

---

**ONE PIECE ~陽気な海賊達と貧血娘~**

K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONE PIECE ～陽気な海賊達と貧血娘～

### 【コード】

N0993Q

### 【作者名】

K

### 【あらすじ】

いつもにぎやか楽しい麦わら海賊団。ある日彼らは海の上に浮かぶ1つの樽を発見。さっそく引き上げて中身を確認してみたら、なんと中には1人の女性が！？

部分的に記憶をなくした常に貧血気味な娘は、にぎやかと言うよりちょっと騒がしい彼らとの旅で、無事に記憶を取り戻せるのか？

原作介入はちょっとあるかもです。

## プロローグ 流された貧血娘（前書き）

初めまして、Kです。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

## プロローグ 流された貧血娘

( side ??? )

真つ暗な世界。

とても、とても暗い。そして、足を伸ばすことも出来ないほど狭い。……いえ、そもそも動かす気力が、ありませんでした。もしかしたら、暗いのは私が目蓋を閉じたままだからなのかもしれません。

「みんな……な………」

異常なほど揺れる、暗く狭い空間の中で、私は意識を完全に閉じました。

( side others )

「……ん？なんだアレ？おゝいみんな！海面になんか浮いてるぞ！！」

「おっ！！ホントだ！！……ってなんだ、ただの樽じゃねえか」

「いやあ、樽でも何か入ってるかも知らねえだろ？とにかく引き上げてみようぜ」

1つの海賊船の船員達が、海に漂う樽を引き上げた。

「いよし！！……ルフィ！！ああ開けてみる！！」

「おいウソップ。足が震えてるぞ」

「何ビビッてんだよ……そんなに重くはなかったから、大したモン入ってねえだろうよ」

「よし!!開けるぞ!!」

麦わら帽子を被った青年が樽のフタを開けます。……するとそこには、

『お、女(の人)!?』

「しかもとびつきりのキューティーちゃんじゃねえか!!」

齡20前後と見られる女性が、細身の剣を抱きかかえるように入っていました。

しかし……

「おいおい……なんかこの子、顔色異常に悪くないか?」

「とりあえず出してみましよう!!それとチョッパー、治療の用意よ!!」

「う、うん!!」

女性を樽から出した後、角を生やしたタヌキのような動物が診察をします。

「この子、異常なほど細いわね……」

「かわいい顔が台無しだな」

「……うん。こいつの症状は貧血と栄養失調だ。とりあえず船室に運ぼう!!」

診断が終わると、女性は船員達に慎重に船室へと運ばれて行きま

した。

( side ??? )

ここは……何処でしょうか？  
なんだか暖いです。

意識が落ちる前に暗いところにいたせいでしょうか？目蓋を閉じているのに少々眩しく感じます。

でも、以前よりはかなり揺れが少ないところです。  
目蓋を開けて見るとそこは……木造の部屋の中です。少し揺れているから、きっと船の上なのでしょう。

「じ、じ………は？」

「ん？……お？目が覚めたか？」

かろうじて声が出ました。

私の声に反応して、誰かが覗き込んできますえつと……？

「ためき………さん？」

「トナカイだ！！」

「ふえ………ごめん、なさい」

トナカイさんでした。

だんだん目が冴えてきて、はっきりとピントを合わせてくれます。  
全体的にモフモフとした抱き心地が良さそうなたぬ……トナカイさんです。帽子がちよっぴりかわいい。

「あ、あの……わた、し………」

「ああ、無理に喋んなくてもいいよ……！……具合はどうだ？辛いところとかないか？」

「だいじょぶ……です」

どうやら、このトナカイさんが私を看病してくれたようです。

「あの……」

「船の上だ。お前は樽の中に入って海の上で浮いてたんだぞ。覚えてるか？」

樽？……だからあんなに狭かったのでしょうか？

「わからない、です……ごめなさい」

「あ、いいんだいいんだ！！気にしないで！！」

慌てて短い両手（前足？）を振ります。とてもかわいいです。

「あ、俺はトニー・トニーチョパー。お前の名前は？」

「私は……ツエル……たぶん」

「そっか、よろしくな。ツエル」

「ごめ、なさい……私、眠く……」

「そっか、気にしないでいいからよく寝るんだぞ」

そう言ってまた意識が落ちました。

(side others)

「みんな、アイツ目を覚ましたぞ」

船室を出ると、チョッパーは看板に集まっている仲間に伝えた。麦わら海賊団は安堵のため息をつく人が4人、反応なしが2人いた。

船長のルフィが先頭きつて船室に入ろうとするが、チョッパーがそれを止めた。

「ま、まだ入っちゃダメだよルフィ！危険な状態からは脱したけど、衰弱状態ではあるから、少し話をしただけでもう寝ちまったよ」「なんだ〜……」

チョッパーの言葉に、見るからに落胆するルフィ。

周りの船員達はルフィのそんな様子は慣れっこなようで、無視である。

「そう、とりあえずもう命の危険はないのね」

「うん。大丈夫だと思う」

「それよりチョッパー。少しは話をしたんだろう？何かわかったか？」

航海士であるナミが安堵し、コックであるサンジがみんなが気になっっているであろうことを代弁するかのように訊ねる。

チョッパーは少し肩を落として答えた。

「どうやら記憶を失ってるみたいなんだ……あ、名前はツエルだつて」

「ツエルちゃんか……あんな狭くて暗い樽に閉じ込められて、かわいそうに」

サンジはすっかり同情しているみたいだが、1人だけ違った見方

をしている者もいた。剣士のゾロだ。

「だが、油断ならないのも事実だ」

「んだと!!このマリモ!!」

「確かに……あんなに危ない状態で、輸血と点滴をただけなのに半日で目が覚めるのは医学的にありえねえ」

そう、ツエルはあんなにも危険な状態にも関わらず、半日で目が覚めたのだ。チョッパーは彼女と話していながらも、その疑問は拭い去ることは出来なかったのだ。

少しの間沈黙状態が続くが、考古学者のロビンが口を開いた。

「でも、今もまだ危険な状態なのには変わりないのでしょっ?……」

「だったら彼女を放り出すのはちよっと可哀想じゃないかしら?」

「そうだな。んじゃ、チョッパー。引き続き看病頼むな」

「うん。わかったよルフィ」

額くとチョッパーは船室へと戻って行き、他の船員達は普段通りの生活に戻った。

ブローグ 流された貧血娘（後書き）

いかがでしたでしょうか？  
感想等お待ちしております。

第1話 復活の貧血娘（前書き）

貧血娘の意外な特技が明らかか？

## 第1話 復活の貧血娘

(side ツエル)

どうも、部分的記憶喪失&貧血もちのツエルです。

簡単に今の状況を言いますと、優しい海賊さん達に助けてもらっています。彼らの話によれば私は樽の中に入って海の上にはぶかぶか浮いていたようで、引き上げて中を見てみたところ私が入っていたと。

その後チョッパーさんの治療のお陰で、今では少しくらいなら歩ける程度に回復しました。チョッパーさんが言うにはあと1日でも発見が遅かったら私はどうなっていたかわからないそうです……本当に命拾いました。

衰弱状態のまま狭い樽の中で何日も漂流してしまったせいで、私は少しだけ記憶を失ってしまったようです。何故樽に入っていたのだとか、漂流前は何をやっていたのか、あとどうして海にいたのか等。他にもなんだか頭の中にポツカリ穴が開いたような感じがしますが、普通の生活には支障をきたさない程度なのでほっとしていません。

今、ベットから降りて壁伝いに歩き出したところなのですが……

「ああ!!まだ寝てなくちゃダメだって!!」

実は無許可なのです。

「あの……もう大丈夫ですから」

「足元フラツフラじゃねえかよ!!いいから寝てる!!」

「うう、はい」

ベットに強制送還されてしまいました。

私の状態はもう安定し、食事も普通に食べられるようになったのですが……貧血がひどいのです。チョッパーさんが仰るには私はもともと血圧がかなり低い体質だそうで、先の漂流による栄養失調がそれに拍車をかけてしまったようです。だからまだ輸血をしなければ辛いくらいです。

それに私の頭の中に残されている記憶を信じるとすれば、私はしよっちゅう貧血になっていたみたいです。

うーむ……それにしても暇です。意識はもうハッキリしているので、正直ずっとベットの上にいるのは我慢なりません！せわしなく働いている記憶があるので、きっと私は働き者だったのでしょう。

そこに、バーンとドアを開けて1人の青年が入って来ました。船長のルフィさんです。

「おはようツエル！！遊びにきたぞー！！」

「はい、いらっしやいです。ルフィさん」

「ルフィ、ツエルは体が弱ってるんだから」

「チョッパーさん。私は大丈夫ですよ」

チョッパーさんの心配はありがたいのですが、やっぱり2人きりだと寂しいです。

「ツエル、入るわよ」

「はい、どうぞ」

「ツエルちゅわーん！！暖かいスープでもどう？」

「いいんですか？頂きます」

ルフィさんが入ってくると、立て続けにロビンさんとサンジさんも入って来ました。ちなみにこの海賊船のみなさんとは顔合わせが

済んでいます。ロビンさんはまだルフィさんの海賊団に入ったばかりの考古学者さんで、サンジさんはとってもお料理が上手なコックさんです。

他にも、剣士のゾロさん、狙撃手のウソップさん、航海士のナミさん、がいます。どうやらゾロさんは私に対していい感情を持っていらっしやらないようで……。そうですね、樽に入って来た女なんて怪しさ満点ですよ。

その後は少しの雑談が入りました。

「なあツエル。おめえが入ってた樽の中にすんげえ細い剣が入ってたんだけど……。アレお前のか？」

「たぶんそう、だと思います。記憶の中に剣術の練習をしている風景がありますので。……。あれ？でもこれって」

「船長さん。剣のことは昨日私が聞いたって、言わなかったかしら？。」

「あれ？そうだったっけ？」

こんな感じで和やかに、話は弾んでいきました。

「ふあゝあ……。よく寝た。おはようツエル……。ってまた起き上がったのか？」

「あ、チョッパーさん。おはようございます」

私が起きて、立ち上がったところにチョッパーさんが入って来ました。

今日はもう調子がいいみたいで、立つてもフラフラしません！！そのことを伝えてみますと、にこやかに声をかけてくださいます。

「そっか、よかった!!」

「はい、あなたのおかげです。チョッパーさん」

「そ、そんなおだてたって嬉しくねーぞコノヤロがつ!!」

「うふふ……」

とつても嬉しそうに小躍りしています。かわいいですつ!!

「それより、部屋の外に出ても大丈夫ですか？」

「うん……そうだな、リハビリを兼ねて少しくらいなら許可するよ」

「ありがとうございます」

私はチョッパーさんに手を引いて頂き、久しぶりのお外に出ました。海から少しだけ顔を出す朝日があつても綺麗です……。

「じゃあ俺は船室にいるから、何かあつたら声をかけてくれよな」

「はい、ありがとうございます」

そう言つとチョッパーさんは部屋に戻っていきました。

見送つた後、私はしばし手すりに手を置いて海から出てくる太陽に目を奪われます。すると、後ろから声をかけられました。

「あれ？ツエルちゃん？……もう起き上がつて平気なの？」

「え？……あ、サンジさん。お早うございます」

サンジさんです。船の2階中央にある部屋に入ろうとしているところでした。

「ああ、お早う。で、調子はどう？」

「あ、ご心配をおかけしました。もう歩いて大丈夫だとチヨ

ツパーさんから許可も頂いています」  
「そっか、よかった」

サンジさんは嬉しそうに、優しく笑って下さいました。

「サンジさん。もしかしてこれから朝食作りですか？」

「ん？……ああ、そうだよ。とびつきり美味しいの作るから待ってね〜！〜」

時々サンジさんは目をハートにしておっきな声で話します。……何故でしょう？

っと、そんなこと思っている場合ではないですね。世話になりっぱなしと言うのは嫌です。だから、不肖私め。ちよっとした恩返しをしたいと思います。

「サンジさん。朝食ですが、私に作らせてもらえませんか？」

「え？ツエルちゃんが？いやいや、いいっていいって。ウチは人数少ないけど信じられないくらい食べる奴がいるから……」

「いえ、お世話になりっぱなしでは申し訳ないですっ！〜！ぜひやらせて下さい！〜！それに私、お料理はできますから！〜！」

おぼろげですが、沢山のお料理を作っている私の記憶が残っています。

「う〜ん……じゃあ頼んじゃおっかな！〜！」

「はいっ！〜！お任せ下さい！〜！」

ルフィ海賊団さん達の朝食を作ることになりました。



第1話 復活の貧血娘（後書き）

いかがでしたでしょうか？  
感想等お待ちしております。

第2話 仲間になった貧血娘（前書き）

第2話更新です。どうぞ。

## 第2話 仲間になった貧血娘

(side ツエル)

私が見なさんに助けていただいてから、もう5日が経ちました。やはり私はもともと血液を作るのが下手な体だったようで、チョッパさんの指示で1日に1回ずつ輸血をすることとなりました。この5日間で、みなさんとは仲良くなれたと思っています。

輸血の必要があるといつてもそれ以外は健康体なので、樽に入っていたと言われた剣<sup>サーブル</sup>を手にとってみたところ、なんだか不思議な感覚に襲われました。とりあえずその感覚に導かれるままに体を動かしてみたところ、自分では信じられない動きが出来ました。どうやら私は少しは腕のある剣士だったようです。えっへん!!……まあ、調子に乗っていたら貧血で倒れてしまつてチョッパさん達に怒られてしまいましたけど……。

今私はみなさんと一緒に朝食をいただいているところです。先日私が朝食を作らせていただいた時、思わぬ高評価をいただいってしまったので、サンジさん、チョッパさんとお話をして私が無理をしない程度にご飯を作らせていただくことになりました。今朝の朝食で2回目です。

『ごちそうさまでした!!』

「はい、お粗末さまでした」

この船の人達(特にルフィさん)は食べるのが早いのであつという間に食べ終わってしまいます。でも、とってもおいしそうに食べてくださるので、私もとつてもうれいんです。いつもはすぐに解散して、私は食器のお片づけをするのですが……今日はちょっと違います。私から、みなさんへ少しお話……と言うかご相談したいこと

があるので、食事前にあらかじめ待つて欲しいと言っておいたのです。

私は立ち上がると、椅子に座っているみなさんの顔を見ていきます。そして、深く一礼しました。

「みなさん、見ず知らずの私を拾ってくださり、それだけではなく手厚く看病していただきありがとうございます」

頭を上げて、またみなさんの顔を見ていきます。うう……ちよつと恥ずかしいです。

「本来ならお礼の1つでも差し上げるべきなのでしょうが……あいにく私は文無しです。なので……ご迷惑でなければここで働かせてください！掃除洗濯、料理でも何でもやりますから……お願いします！」

だんだん、断られてしまったらどうしようと思う思いが出てきて怖くなってしまい、最後にはさつきよりもさらに深く頭を下げました。

最初に声をかけてくださったのはルフィさんでした。

「んなの決まってんじゃねえか。もちろん大歓迎だ！むしろ仲間になれ！」

「またアンタはそんなこと言って……ま、私も反対しないわ」

「フフ……と言うよりも、そこまでしてもらったら逆に申し訳なくなっちゃうわね」

「もちろん俺は賛成だよ！ツエルちゃん！」

「主治医として放っておけないしな！無理はすんなよ！」

「ま、まあ……俺様もお前の料理は気に入ったしな！文句はない！」

「むしろ俺はあのクソコックの料理よりも好みだがな」  
「んだとクソマリモ!!」

立て続けに他のみなさんも声をかけてくれます。……あれ?でもこれってひょっとして……?

「あ、あの……みなさん?これって」

「決まってんじゃないかねえか、ツエル」

『ルフィ海賊団にようこそ!!』

「ふ、ふつつかものですが……よろしくおねがいますっ!!」

こうして私は、ルフィ海賊団の一員となりました。

第2話 仲間になった貧血娘（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想等お待ちしております。

## 第2・5話 設定上の貧血娘（前書き）

このお話の主人公、ツエルの設定です。  
今後、追加することもあります。

1 1 / 0 1 / 1 4 追記

1 1 / 0 1 / 2 9 追記（人物、技、解説、イラスト）

1 1 / 0 2 / 0 4 追記（技）

1 1 / 0 2 / 0 6 追記（技）

## 第2・5話 設定上の貧血娘

名前：ツエル（記憶喪失のため、仮名）

所属：麦わらの一味・家事担当

異名：なし（今後つける予定あり）

悪魔の実：不明（記憶を失っているため、食べたか食べてないかもわからない）

懸賞金：なし

誕生日：不明

年齢：20歳前後

身長：155cm

出身：不明

夢：とりあえず記憶を取り戻す

好きな食べ物：旬の野菜

二オイ：暖かい太陽と洗剤の二オイ

弱点：海（カナヅチ）、嘔、貧血、大きな音、強い光

人物：

ある日、樽に入って海にぶかぶかと浮いていた女性。

真っ黒な髪と瞳をしており、その体は病的なほど痩せている。だが、肌は綺麗なほうだし童顔で整った顔立ちをしている美女と言うより可愛らしい。自信のなさそうな大きな垂れ目が特徴。

身長155cm、体重は「言わないでくださいっ!!」……チツ。スリーサイズは上から……わかった、言わないからそんな涙ぐんだ目で見ないで……ね？………ちなみにAA（ダブルA）カッp「うわああああん!!」

華奢な体、童顔のせいで実際よりも幼く（15、6歳）に見える。髪は肩にかかる程度に切られている。

軽度だが部分的な記憶喪失になっており、ちょっとしたことでい

るんなことを思い出したりしている。だが、自分がどうして海にいたのだろうかとか、故郷はどこなのか等の肝心なものが思い出せない。

武器はサーブルと呼ばれる細身の剣。フェンシング用の剣で切ることにはあまり適してはおらず、専門は突きになる。一応切ることも出来る。武器を持って練習をしていた時に記憶の一部が戻り、とりあえずは戦える。戦闘能力は高そうだが、貧血のせいであまり長くは戦えない。

現在の服装は黒の少し緩めな長ズボンに、白の長袖シャツの上に黒いベストを羽織っている。それとは別に、白の無地のゆつたりとしたワンピースも持っている。普段はこっちのワンピースが多い。

心優しく、いつも敬語で話す礼儀正しい女性だが、弱気で臆病。怒られたりするとすぐに涙目になってしまうほど。正座で涙を流しながらおとなしく説教を聞く。だがノリはいいほうで、作者としてはスリラーバーグ編で、ロビンの代わりにドッキングをさせてビッグ皇帝エンペラーにしようかどうか迷っている。少々天然も混ざっているようだ。

家事全般が得意で、船内では自ら進んで洗濯や掃除、料理などを請け負っている。料理に関しては流石にサンジほどではないが美味しい。家庭的で素朴な味付けで、和の雰囲気をかもし出すものが主流。ソロやウソップはツェルの料理を気に入っている様子。

身体能力、視力、聴力はかなり高め。特に動体視力や聴覚は船で一番。だが、貧血のせいであまり長くは戦えない。脚力も相当なもので、剃と同格の速度が出るが瞬発的なもの。移動範囲は半径5m以内の直線上。

ちなみに左利き。

治癒能力もかなり高く、大きめな傷でも半日程度で治ってしまう。

戦闘：

突きを主流としたフェンシングスタイル。一緒に樽の中に入って

いたサーブルを構えて振り回しているうちに、戦闘のカンと自分の戦闘法、技をいくらか思い出した。まだ技は残っており、とある条件で少しずつ思い出していく。

打ち合いはあまり得意とはせず、動体視力と素早さを生かして相手の攻撃をかわしたり攻撃を受け流したりして、隙を見て攻撃するのを得意とする。力技はあまりやらない。

戦闘時になると、人が変わったような目つき（垂れ目から少しキリツとした目）になり、聴覚と視力が格段に上がる。戦闘中の聴覚は異常なほどで、相手の筋肉が動く際の微かな音すら聞き分け、相手の動きを先読みすることさえ出来る（見物色の覇気とは違う）。だが、やはり貧血が邪魔をし、いいところで倒れる。

本人には自覚がないが、武装色の覇気を使えることが出来る。後述の技の一覧に書かれている、衝撃波系統の技は全て武装色の覇気が込められている。

技：

【ボンナ】（序章終了時）

剃と同格の速度が出る移動技。移動範囲は半径5m以内（今後広がっていく予定）の直線上。最初にいた場所を中心に半径5m以内なら、連続使用が可能。ステップと言うのが妥当かもしれない。

【マルシエ・ファンデヴ】（同上）

ボンナと組み合わせた前方への突き。突いた後にすぐに元の位置に戻るのが特徴。

【ロンペ・ファンデヴ】（同上）

斜め後方に後退しながら突くカウンター技。相手が攻撃してきた腕等に突くのが特徴。

【フレッシュ・ボンナバン】（同上）

ボンナの速度で剣を前に構えたまま前方に突進するように飛ぶ。そのまま走り抜けるのが特徴。

【フレッシュ・ボンナリエール】（同上）

逃走時の奇襲技として使用する技。背を向けて逃げると思わせ少し走ったところで突然振り向きボンナの速度で突き抜ける。

【幻獣の一本角】（同上）

前方に鋭い突きを放つ。その際、ユニコーンの角のような形をした大きい衝撃波が現れる。斬撃ではなく衝撃波なので、相手を吹き飛ばす技。

【猪の湾曲牙】（第1章終了時）

猪の牙のように弓なりの軌道を描いて、上方へと攻撃する。対空技。ユニコーンに対して攻撃力は劣るが、範囲が若干広いのが特徴。同じく衝撃波で相手を吹き飛ばす技。

【鷲の背距】（同上）

一度飛び上がった後、一気に急降下して相手に上方から突く技。隙が多いが、ユニコーンよりも破壊力がある。同じく衝撃波で相手を吹き飛ばす技。

【大衆演劇：幻の三拍子】（第2章第14話）

ボアタスクで相手を打ち上げ、空中に上がったところをイーグルブリークで相手を地面に叩きつけ、跳ね上がったところをユニコーンで吹き飛ばす。キレた時のツエルが使う奥義技。普通の間人では耐えることはできず、下手すれば絶える。

【犀の猛進】（第2章終了時）

モーシオンは“幻獣の一本角”と同じだが、衝撃波が前方に飛んでいく高等技。だが、威力は1番低い。

【前方〓半月斬〓横〓】（同上）

構えた後、前方に半月を描くように横に斬る。衝撃波が半月上に前方に広がっていき、範囲は広いが薄い。こちらは吹き飛ばすのではなく斬れる技。

【前方〓半月斬〓縦〓】（同上）

オ・レイドと同じ。それを縦に斬るだけ。

解説：

ここでは、この表現がわかりにくい等の意見に答えていきます。まず、“ボンナ”について友人から詳しい解説を求められたので、ここで簡単にボンナの法則を解説しようと思います。

【ボンナの法則】

- ・ “剃”の速度で移動をする移動技である。
- ・ 現在の移動範囲は半径4m以内の直線上。故に、障害物等がある場合はその範囲よりも狭まる。
- ・ 発動条件は特でない。
- ・ 以下、“剃”との相違点。
- ・ その一、範囲が決められている。
- ・ その二、移動したら、移動先から元の位置に戻る。ただし例外あり。
- ・ その三、移動中に攻撃等の何らかの妨害を受けると、解除される。
- ・ その四、自発的に元の位置に戻らないようにするには、移動先の着地後に2メートルほどかけてボンナ使用時に出る衝撃を抑える必要がある。【フレッシュ・ボンナバン】はこの法則を利用したものの。

・ その五、術者の体力が続く限り連続使用が可能。技量によっては残像が残り、分身しているかのように見せかけることも出来る。以上です。

他にも、この表現がよくわからない等の質問がありましたら感想の方に送ってください。ここで解説しようと思います。

イラスト：

ここでは、私が描いたツェルのイラストを紹介します。

家にスキャナーがないので写メで撮ったものですので、画質が悪いのは眼を瞑ってください。

まず、ツエル普段着ver.です。

> i 1 7 4 0 8 | 8 7 6 <

続いて、ツエル戦闘着ver.です。

> i 1 7 4 0 9 | 8 7 6 <

以上です。

### 第3話 泣いた貧血娘（前書き）

はわわわ！！想像をはるかに超えた方々がこの作品を読んでくださっていることにとても驚いているのと同時に喜んでいきます。  
今後ともよろしくお願いしますっ！！

### 第3話 泣いた貧血娘

(side ツエル)

「ふんふん、ふん」

どうも、流れ着いた病人改め、妻わらのルフィ海賊団船員のツエルです。ナミさんのお話ですとこの船は現在“ジャヤ”と言う島へ向っているそうです。……海つていいですね。今船の上はくつろぎモードで、私はほかほか陽気に当たりながら洗濯物を干しています。どうやら今まで結構溜めていらっしやっただようで、量は多いです。でも、これはこれでやりがいがありますよねっ！！

鼻歌を歌い、お洗濯も一段落したところで、甲板でみなさんが騒いでいます。……どうしたのでしょうか？

「ツエル！！目的地が見えてきたぞ！！」

「えっ？本当ですか！？」

「ああ！！お前も早くこっち来いよ！！」

チヨッパーさんが呼びに来てくださいました。私も洗濯籠をもって甲板へと急ぎます。……ふふ、楽しみですな。

【嘲りの町モックタウン】

早速港に船をつけますと、ルフィさんとゾロさん、ナミさんが町へと歩いていきました。私ですか？私は……ちよつと……。町から怖い声がたくさん聞こえて来ましたので、船の上でお留守番です。ナミさんはルフィさんとゾロさんの見張りだとか何とか。

今は昼食を作っているサンジさんのお手伝い中。ウソップさんと

チヨッパーさんは船の修理中で。ロビンさんはさつき町へ行っていました。1人で大丈夫でしょうか……。

「よし、ツエルちゃん。悪いけど外の2人を呼んできてくれないか？」

「あ、はい。わかりました」

私は厨房を出て甲板へと向います。下からはお2人の楽しそうな声が聞こえてきました。こういうのっていいですね。

「ウソップさん、チヨッパーさん。昼食の用意が」

「うるへ〜!!」

「うるへ〜!!」

「……………え？」

うるさいって……………あのお2人が私をうるさい、と。やっぱり私、仲間として認められてないのでしょうか？……………そうです、よね。私のようなすぐ貧血になる役立たずなんて……………必要ないですよ。あれ……………涙が止まりません。

『ツエ、ツエル!?!』

「ふえ……………つく……………ご、ごめんなさいっ!?!」

『ああ!?!ま、待ってくれえええええっ!?!』

私は涙をこらえきれず、トイレに駆け込んでいきました。

【20分後】

「すみませんでしたっ!?!」

私はお2人にひたすら頭を下げました。どうやらあの言葉はお2人がふざけ合って言っていただけなようで、私に向けたものではなかったようです。……うう、そうとは知らずに、お恥ずかしい。

「ビ、びや……ボレだちはべづに、な?」「い、いや……俺達は別に、な?」

「ああ……ビにじでねえがら」(ああ……気にしてねえから)

お2人は顔がパンパンに腫れ上がっていました。どうしたのですよ  
うか……?」

そして私は。サンジさんにも頭を下げます。

「サンジさんも、すみません。私が変な勘違いをしたばかりに、お料理が冷めるまで引き籠もってしまって……」

「いいんだよツエルちゃん。このアホ共のせいなんだから。……さ、早く食つちまおう」

そして、サンジさんのおいしいご飯をいただきました。サンジさんのご飯は私の地味な味付けとは違ってとつてもとつてもおいしいです。

その後はみなさんと談笑し、頃合を見計らって私は干した洗濯物を取り込みます。やっぱりお日様に当てた衣類はいい香り……。はふう癒されます。私が船の後ろで洗濯物を畳んでいたら、サンジさん達がやってきて手伝ってくださいました。おかげさまであっという間に終了です。

お仕事も一段落ついたところで、ナミさん達が帰ってきました。でも……、

「ル、ルフィさん、ゾロさん!？」

「ケ、ケガしてんじゃねえか!！」

お2人が傷だらけで帰ってきました。け、けんかでしょうか……？  
とりあえず私とチョッパーさんで手当てをします。……で、でも  
ナミさんがとつても怖いです。

「な、なあナミ。空島の情報は聞けたのか？」

今私たちが目指している場所です。空の上にある島だとか。……  
ロマンですよねっ！！しかし、ナミさんの表情は恐ろしいものでし  
た。

「そおらあじいまあ〜？」

どうやらナミさんは空島のことを聞こうとした時に大笑いされた  
らしく、それに対しても怒ってらっしゃる様子です。

「  
と云うわけなのよ。ねえ！！私そんなにおかしいこと言  
った！？」

「ガードポイント！！」

「必殺ケチャップ星……………」

「……………（がたがたぶるぶる）」

あ、あまりの形相に体が震えてしまいます……………ナミさん怖いです。  
その後ナミさんの怒りはようやく鎮まり、ロビンさんの集めてき  
た情報をもとに、モンブラン・クリケットと言う方のところの行く  
ことになりました。

第3話 泣いた貧血娘（後書き）

感想等お待ちしております。

#### 第4話 うそつきの子孫と貧血娘（前書き）

設定で記入漏れがあったので、人物と戦闘の覧の最後にちよこつとだけ付け足しました。

#### 第4話 うそつきの子孫と貧血娘

(side ツエル)

「ふう〜危なかった」

「くそつ、あんのオラウータンめ……」

「うう、まだ耳が痛いです……」

「ツエル大丈夫？」

モックタウンを出発した後、1組の海賊さん達と出会いました。ルフィさん達やお相手さん(確かシヨウジョウと名乗っていました)の話聞く限りでは、どうやらルフィさん達がシヨウジョウさんの兄弟であるマシラという方を蹴り飛ばしてしまつたらしく、それで怒つたシヨウジョウさんが妙な音波で攻撃してきました。その音波のせいで船は大きな傷を負つてしまい、自慢じゃないですが耳がいい私はその音波の影響で耳が痛くなつてしまいました。

今は全員総出で船の修繕を行っています。船の修理をしながらウソップさんにこの船を手に入れた経緯を教えてくださいました。その話を聞いて、私はボロボロになつてもツギハギの修理でこの船を使い続ける理由がわかりました。

【そして、何時間か後……】

目の前には……な、なんと大きなお城があるではありませんか!!

「す、すごい……」

「アレがそいつの家なのか!？」

私、ルフィさん、チョッパーさん、ウソップさんは思わずはしゃ

いでしまいました。でも対照的に、ゾロさんとサンジさんの態度は冷めたものです。どうしたのでしょうか……。

「バーカ、よく見るよ」

「え？何が？」

「少なくとも、見栄っ張りではあるみたいだな」

「……………？」

お2人の何か含んだような言い方に思わず首をかしげてしまいました。ただど上陸してからお2人が仰っていたことがわかりました。だっってお城が

「げげっ！！ただの板！！」

「に、にせものだったんですか！？」

「家は半分。残りはベニヤ造りだ」

「ずいぶんとケチな男らしいな」

うう……すっかりだまされてしまいました。その後、ルフィさんが家の中を確認してみたら誰もいなかったそうです。

近くの切り株の上には絵本が置いてありました。題名は“うそつきノーランド”。ナミさんが読んでくださいます。なんだか……釈然としないお話でした。

「ぎゃあああゝ！！」

「ル、ルフィさん！？」

「何やってんだ！？お前！！」

ルフィさんが海に落ちました。た、助けないと……！！

「ルフィさん！！今助けますっ！！」

すぐに私は海へ飛び込みました。でも私、重要なことを忘れていました。

それは……

〔ブクブクブク………〕

「ああ！！ツエルが沈んでいく！！」

「ウソツプ！！ツエルちゃんとルフィを引き上げとけ！！」

私、泳げなかったみたいです。

「こほつこほつ………」

「ツエル、大丈夫か？」

「はい、もう大丈夫です。ご迷惑をおかけしました………」

私とルフィさんはウソツプさんに引き上げていただきました。今はモンブランクリケットさんのお家の中です。クリケットさんは潜水病というものを発症して倒れてしまったらしく、今は病状も落ち着き、静かに寝ています。私はみなさんと一緒に看病中です。早く目を覚ましていただければいいのですが……。潜水病は死に至ることもあるらしいので心配です。そう思いながらクリケットさんの額にのせてあるタオルを取り替えようとしたところへ

『おやつさアーン！！大丈夫かア！？』

シヨウジヨウさんと……私の知らない方が突如現れました。後で知ったことなのですが、この人がマシラさんだそうです。最初は私たちがクリケットさんに何かしたのではないかと大声で威嚇してき

たのですが、私たちが看病をしていることを伝えたらあっさり許してくれました。

その後私とチョッパーさんで看病を続けていると、クリケットさんが目を覚ましました。

「迷惑かけたな。……で、俺に聞きたいこととはなんだ？」

ルフィさんが空島に行きたいことを伝えます。クリケットさんが言うには空島があると言った人が1人いたそうです。その人は、先程見た絵本の登場人物のうちそつきノーランドこと、“モンブラン・ノーランド”さん。クリケットさんはその子孫だそうです。絵本のせいで辛い目に会ってきたとか。やがては海賊になり、偶然訪れたのが絵本の舞台であるここ「ジャヤ」。そして、ひたすらここで失われた黄金郷を探し続けているようです。

そんな話はいいから空島の話聞かせて欲しいとルフィさんが催促すると、クリケットさんはノーランドさんの航海日誌を見せてくださいました。そこには空島に関する記述があったのです！！

「す、すごい……」

「やっぱりあるんだ！！」

「やった~~~~！！」

みなさん大喜びです。私もうれしいです。

クリケットさん達も私達の空島行きを協力してくれるそうです。空島まで無事に行けたらいいですね。

**第4話 うそつきの子孫と貧血娘（後書き）**

感想等お待ちしております。

## 第5話 激昂の貧血娘（前書き）

ツエル）と言うよりもこの作品で（初めての戦闘シーンです！！  
ああ……戦闘描写って難しいですね。

## 第5話 激昂の貧血娘

(side ツエル)

「ツエルちゃん。そっちの皿を取ってくれ」

「えっと……はい、どうぞ」

「ん、ありがとう」

「あ、マシラさん、シヨウジヨウさん。つまみ食いはだめですっ！  
！」

「ウツキツキ、すまねえ」

「美味そうでハラハラしちゃってな」

今、私はサンジさんと一緒に晩ご飯の支度をしています。シヨウジヨウさん達が獲ってきたというサンマを使ったお料理です。サンジさんの料理のレパートリーの多さに驚いています……。

「よし、これで終わりだな。手伝ってくれてありがとう。ツエルちゃん」

「いえ、私がやりたかっただけですから」

「じゃあアイツら呼んでくるから、ツエルちゃんは休んでてくれ」

「あ、じゃあお言葉に甘えて……」

サンジさんが外にいるみなさん呼びに行きます。

普段からお食事の量が多いのですが、今日は人数が増えたのでさらに多いです。さすがにちょっと疲れが……うう、そろそろ輸血したほうがいいですね。

そんなことを思っていると、みなさんが入ってきました。なんだかさつきよりも仲が良くなっているような気がします。……いいことですよねっ！！

『ぶわっはっはっは!!!!』  
「うう〜楽しそうですね……」

みなさんが宴会をしている中、私はゴーインググメリー号の中で1人寂しく輸血中です。本当は私も参加したかったのですが、あの騒ぎは体に障りそうですし、チョッパーさんに顔が青くなってきたから輸血するように言われたのです。うう、無念!!

そんなことを言っていたって仕方ないですよ…はい。と言うわけです。おやすみなさい。

(side others)

ツエルが眠りにつき、ルファイたちがサウスバードを探して森で奮闘している頃、猿山連合軍の園長<sup>ボス</sup>達は“ハイエナ”のベラミーの手にかかっていた。彼らの狙いは猿山連合軍が苦労して手に入れた金塊。マシラ、シヨウジヨウはすでに意識を失っており、クリケットももう限界だった。

「ガハッ……!!」

「へっ、弱エくせに大口叩くんじゃねえよ」

ベラミーの足元に崩れるクリケット。高笑いしながら自分達の船へと帰ろうとするところに、対岸にある麦わら一味の船の船室から1人の女性が出てきた。ツエルだ。

彼女は信じられないとばかりに目を見開いている。

「大きな音がしたと思ったら……何てことに。メインマストが……船の先端も？……！ツマシラさん！？シヨウジヨウさん！？クリケットさん！？」

倒れている彼らを見つけると、大声で呼んでクリケットのもとへに駆け寄り、しゃがんで声をかける。だがすでに意識はない。

「ひ、ひどい……誰がこんなこと  
俺達がやったのさ」

ハッとツエルが振り返るとそこには、意地悪そうにニヤニヤしながら近づいてくるベラミー一味。その手には大きな袋がある。

「……なんでこんなことを？」  
「コレだよ」

低い声で訊ねるツエルに、船員の1人が金塊の入った袋を持ち上げて見せる。

「夢追いのバカに本物の金塊は似合わねえ。だから、俺達が貰ってやったのさ！！」

そう言って嘲るように笑うベラミー。ツエルの顔がどんどん険しくなっていく。

「それが……クリケットさん達が何年もかけて苦労して手に入れた物でもですか？」

「嬢ちゃん。俺が何て呼ばれてるか教えてやるよ……“ハイエナ”だ！！他人が苦労して手に入れた宝つてのは格別の味がするのさ！

「ハハツハア！！」

彼らの笑いは留まることを知らないかのように響いている。ツエルの顔はいつものオドオドしたものではなく、眉間に皺をよせた怒りの表情になっていた。胸の奥にドロリとした感情が煮えたぎっている。

すつくと立ち上がるとベラミー達を見据える。

「その金塊は彼らの……猿山連合軍の方々の苦勞の証です。返してください」

腰に添えてあったサーブルを手に取り、鞘から引き抜く。ベラミー達の笑い声はさらに大きくなった。

「オイオイ嬢ちゃん。そんな細い剣で俺らと闘おうってか？」

「必要があるのですたら」

「ハハツハア！！いいだろう……サーキース、相手してやれ」

「まったたく……身の程を知らねえと言うか何と言うか」

ニヤニヤしながらサーキースがビッグナイフを取り出して一歩前に出る。

「ま、骨の1本や2本は覚悟しろよ？」

ツエルの細い体を見て何てことない相手だと思い、峰打ちでやるつもりらしい。

彼女はそんな彼らの行動を微塵も気にせず、気を失ってしまったクリケットを戦いに巻き込まないように離れ、サーキースへと近づく。

「ま、大口叩いた自分を恨むんだな」

攻撃してくる気配のないツエルに、サーキースは右手に持ったナイフを振りかざす。誰もがこれで終わった。そう思ったがナイフは空を切り、地面に刺さった。

『え……………？』

「どこを狙っていらっしやるのですか？」

ツエルはサーキースのすぐ右にいた。その移動動作は誰も捕らえていなかった。辺りが静まり返る。

「う、上手く避けたようだな……………だが次はあ！？」

サーキースが手を返して斬りかかろうとした瞬間、ツエルは斜め後方へと後退しながら、相手が得物を持っている右手の甲へとサーブルを深く突き刺していた。

「“ロンペ・ファンデヴ”」

「ぐ、ぐああああ！！」

サーブルが引き抜かれると、サーキースは悲鳴を上げてナイフを落とした。

「次が、何ですか？」

「くっ……………サーキース！！手加減はいらねえ！！やっちまえ！！」

「……………ちっ、ああわかったよ！！」

落としたナイフを拾うと、ツエルと少し距離を取るサーキース。

「マグレにしてはやるようだな……だが次も上手くいくと思うな！」

「マルシエ・ファンデヴ」

「なあ！？ぐあっ！！」

「だったら無駄口たたかなければいいのではないですか」

ツエルは一瞬の内にサーキースの懐に飛び込み右肩に一突きすると、また元の場所に戻っていた。その何でもない動作は本当に一瞬だった。

「どうです？おとなしく金塊を返す気になりましたか？」

「くっ……調子に乗ってんじゃねえ！！くらえ、“ビッグチョップ”……！！」

サーキースはツエルに向かって回転しながら跳んで斬りかかる。だが

「全くもって無駄な動きが多いですね」

攻撃はあっけなく避けられ、着地した瞬間後ろから首もとにサーブルを突きつけられていた。

「バ、バカな……」

「もう諦めて金塊置いて帰ってはいかがですか？それとも……」

言い終わる前にツエルはサーキースを突き飛ばし、後ろへと下がる。直前までツエルがいた場所に何かが高速で通りすぎる。………  
…ベラミーだ。

「それとも、選手交代ですか？」

「下がってるサーキース。……こいつは俺がやる」

しかしこの時、ツエルは怒りのあまり大切なことを忘れていた。  
自分が重度の貧血持ちだということを……。

## 第5話 激昂の貧血娘（後書き）

次回、ベラミーとの戦闘！！多分展開は予想できます！！

第6話 攫われた貧血娘（前書き）

今回はちょっと短いです。すみません。

## 第6話 攫われた貧血娘

(side others)

思わぬアクシデントにベラミー一味は動揺し、緊迫した空気が流れている。

それも当然だ。突然見知らぬ女と戦うことになり、自分達のナンバー2が圧倒されたのだ。当の本人であるサーキースは特に心中穏やかではないだろう。女に、しかも病弱そうなやせ細った身体の、だ。そんなツエルに圧倒された彼のプライドはズタズタだ。それでも、この状況に不安はなかった。

(クソツ……何なんだあの女。俺は懸賞金3800万だぞ!?あんな女見たことも聞いたこともねえ!!!……だが、大丈夫だ。こつちには5500万の大型ルーキーベラミーがいるんだ。くくつ、あの女が泣き喚く所を拝んでやる)

ベラミーとツエルは睨み合っていた。だが、それはお互いに攻撃のタイミングをうかがっているようだ。ベラミーは能力で脚をバネにして屈んで溜めを作り、ツエルはサーブルを持った左手を曲げた状態で前に出して構えている。先に動きを見せたのはベラミーだ。

「行くぞ…… “スプリング・スナイプ”!!!」

溜めを一気に開放してツエルへと迫る。ツエルはそれを難なくかわすが、少しの間を空けてすぐにベラミーの追撃が来た。

「 “スプリング・スナイプ”!!!」

「……なるほど、着地の衝撃を溜めに利用したんですね」

そう。ツェルの分析通り、ベラミーはツェルに攻撃を避けられるとすぐに身体を反転させ、着地すると同時に再び攻撃を仕掛けたのだ。着地の衝撃があった分溜めの時間が少なくなった上に、一撃目よりも速度が速くなっている。これは彼のもう1つの技である“スプリング・ホッパー”と同じ原理だ。  
だが、ツェルには全て視えている。

「 ですが、甘いですっ」

「 な！？……ぐアッ！？」

ベラミーの跳んでくる軌道を読み、ギリギリでかわしベラミーが通り過ぎる瞬間に、ツェルは横から鋭い突きを放つ。ベラミーは体勢を崩し、みつともなく地面を転がった。

「 あなたはその能力を使った突進攻撃が主な攻撃スタイルみたいですね。ですが残念ながら、私には視えています」

「 コオ〜ムウ〜ス〜メエ〜……………！！」

ベラミーは怒りで聞こえていないようだった。また屈んで溜めを作る。ツェルはそれを見ると呆れたようにため息をついた。

「 また繰り返すのですか……………いいでしょう。私が無駄だということ  
を ツー！くっ……………」

サーブルを構えようとしたところでツェルは眩暈に襲われ、足元がおぼつかなくなった。どうやらここに来て貧血の症状が現れたようだ。

もちろんベラミーはその隙を見逃さない。

「 “スプリング・スナイプ” ！！」  
「 アッ！！」

ベラミーの一撃をまともに受けたツエルは小さい悲鳴を漏らし、勝負の成り行きを見守っていたベラミーの仲間達の近くまで吹き飛び、完全に沈黙した。

「ハ……ハハツハア！！何だもう終わりか！？あっけねえモンだなあオイ！！」

「アハハツ、ダツサ〜イ」

「で？この生意気な小娘はどうする？ベラミー？」

病人のように白い顔をして意識を失い倒れているツエルをベラミーたちが囲む。女は見下すように、男は品定めするかのように。

「ん〜イマイチ身体に迫力はねえが、なかなか整った顔してるな」  
「ハツハツハ……なら連れて行くか？コイツには俺らに逆らったことを思い知らせてやるっ……その身体にな」

大笑いしながらベラミーはツエルを担ぎ上げた。

「見た目通り驚くほどの軽さだな……口と同じだぜ！！」

ツエルは金塊と一緒にモックタウンへと連れ去られてしまった。

第6話 攫われた貧血娘（後書き）

感想等お待ちしております。

第7話 1億の男と貧血娘（前書き）

お待たせいたしました。  
では、どうぞー！

## 第7話 1億の男と貧血娘

(side others)

「ひし形のおっさん!!」

「マシラ!! ショウジョウ!!」

サウスバード捕獲へと向ったツエルを除いたルフィ海賊団が海岸へ出た時に見たものは、傷だらけで倒れている猿山連合軍の園長達<sup>ボス</sup>だった。

ルフィ達が駆け寄ると、クリケットが目を覚ました。

「すまん……」

「あ!! おっさん気がついたか」

クリケットが謝罪と、しっかりと船を強化する旨を伝えていると、ナミが大声でルフィを呼んだ。

「ルフィ!! 金塊が……盗られてる」

ルフィ達は驚きに目を見張る。それに対してクリケットはそんなことはいいと云った。もちろんルフィ達も納得できるわけがない。そんな時、今度はチョッパーの声が聞こえてきた。

「た、大変だ!! ツエルが……ツエルがない!!」

「何イ!?!」

「そ、それと……これが落ちてた」

「それは、ツエルの!?!」

船で寝ていたはずのツエルを見に行つたチヨッパーだが、船室には使い終わった輸血パックだけしか見当たらず、さらに慌てて戻ってくる途中に見つけたのは、刀身に血がついたツエルのサーブルとその鞘。

奪われた金塊、いなくなったツエルに血のついた彼女の武器。ルフィ達の怒りを煽るのには十分な材料だった。

「くっそおおおおお!!どこのドイツがツエルちゃんをオオオオオオオオ!!」

「おい、ルフィ」

「……………?」

ゾロが指差す先、クリケットの家の板には1つのマークが描かれていた。

「ベラミーのマーク!?!」

「手伝おうか?」

「いや……………1人でいいよ」

「麦わら……………オメエ」

時間が無いのはわかっていたが、仲間の1人が連れ去られたかも知れないので、誰もルフィがベラミーの所へ行くのを止めなかった。

「ルフィ、3時間よ。それ以上出向時間を延ばしたら、空島へのチャンスはなくなるわ」

「ああ、わかった」

それだけ聞き、ルフィはツエルと金塊を取り戻しに行った。

「scene モックタウン」

「1億……6千万……？」

勝利の余韻に浸り、談笑しながら未だに気を失っているツエルをどうするか下卑な笑みで話し合っていたベラミー一味や酒場の者達は、昏間に現れた“腰抜け”達の懸賞金額を聞くと一瞬静まり返り、自分達がどんなことをしたかを思い出し騒ぎ始めた。

「ハハツハハツハハ、オイオイ！！……バカ共が、こんな紙キレに怯えやがって……てめえらの目はフシ穴かよ！？張本人を見ただらう！？」

だが、それをベラミーが諫める。

そして彼が過去にいた“弱いのに自分の手配書を自分で偽装してハッターだけで名を上げた海賊”の話をする、再び安堵の空気が流れた。

そこへ、夜の闇を切り裂く大声が響く。

「ベラミー……！！どこだアア……！！！！」

「scene ？？？」

『ただいまー！！』

「はい、お帰りなさい」

1人の女性が沢山の子供達を迎えていた。建物の雰囲気から察す

るに、どつやらここは孤児院のようだ。

遊びから帰ってきたであろう10人近い子供達が女性の周りに集まる。

「ねえおねーちゃん！きょうのばんごはんなにー？」

「なにー？」

「うふふ、秘密です。さ、院長先生にご挨拶が済んだらご飯にしますからね。あと、ちゃんと手を洗うんですよ？」

『はい！！』

「scene モックタウン」

「ツエル……おい大丈夫かー？」

「あ……ルフィさん」

ベラミーを一撃で沈黙させたルフィは、酒場の中で横たわっていたツエルへ駆け寄り少しゆする。

ツエルは少し間を空けて目を覚ました。

「つたく、無茶しやがって」

「えへへ……ごめんなさい」

そう言って2人は笑い合う。ツエルの体調も悪くはないみたいだ。

「立てるか？」

「はい、大丈夫 わっ」

立ち上がるうとしたが、尻餅をついてしまった。

「あはは、ちょっと無理みたいです」  
「しかたねエな……ほら、おぶってやるから金塊持つてる」  
「か、重ね重ねご迷惑をおかけします……」

ツエルが金塊を背中に担ぎ、ツエルをルフィがおぶった。タイムリミットが迫っているので、ルフィは急いで海岸沿いを走り出す。

「ルフィさん」

「ん？なんだ？」

「えへへ……ありがとございました」

「ニツシツシ、いいっていいって

ああ……」

「ひゃあ……ど、どうしましたか!？」

「ほら……アレ見るアレ……」

「え?……ああ……」

ルフィとツエルの視線があるものを捉える。

そのあるものは

## 第7話 1億の男と貧血娘（後書き）

そろそろジャヤ編も終わりに近づいてきました。

あと……2話くらいで空島へ行けると思います!!

第8話 叱られた貧血娘（前書き）

更新です。ではどござっ!!

## 第8話 叱られた貧血娘

(side others)

モンブラン・クリケット宅周辺にて、ルフィ海賊団の船員達はルフィとツェルの帰りが遅いので、心配とイラ立ちからざわついていた。集合時間からもう既に40分過ぎている。

そろそろ（主にナミの）我慢が限界に近づいた頃、ついに待ちわびた2人の人影が見えた。

『おお〜〜い!!』

『おい!!来たぞ!!』

『みんな!!』

『コレを見て下さい!!』

『……………?』

走ってくる2人がそれぞれ上げた片手に何かを持っている。小さくてよく見えないが。

『ヘラクレス〜!!』

『ミヤマクワガタ〜!!』

『ん何しとったんじゃアアアアア!!』

どこか誇らしげに言ってくる2人に対する一同のツッコミが鳴り響いた。

(side ツェル)

私が捕まえたミヤマクワガタの“ミーちゃん”とルフィさんのヘラクレスオオカブトを猿山連合軍の方々に差し上げた後、私たちはすぐにかわいく装飾されたメリー号へと乗り込みます。クリケットさんに別れを告げ、出向したのですが……。

「サンジ君。進路見ててね」

「は〜いつ〜!! ナミさん!!」

「ツエル……………ちょっとここに座りなさい」

「はい……………」

どうやらお説教TIMEになりそうな予感です。私は仁王立ちするナミさんの前に正座しました。

「で？アンタはどうして連れ去られたの」

「そ、それがですねえ……………」

私はベラミーたちと戦ったことについて話しました。それを聞いたナミさんは呆れたようにため息をつきます。

「つまりアンタは、怒りにまかせてケンカをフツかけた挙句に貧血で倒れてそのまま連れて行かれたってコトね……………」

「お恥ずかしながら」

「まったく……………自分の身体のことくらい考えて行動しなさいよね」

「はい、申し訳ございませんでした」

私は床に手をついて頭を下げて謝りました。

「“ソッチ”の事情はわからなくもないから見逃してあげるわ……………でもね？」

「で、でも……?」

「アノ虫八何?」

「ミヤマクワガタの“ミーちゃん”ですっ!!あいたツ!!」

自信満々に言ったら頭を思いつきりぶたれました。

「ふみい……いたいですう……」

「ナイ胸張って偉そうに言うなッ!!」

「ナミさんヒドイですっ!!自分が必要以上にあるからってそんなこと言うなんて!!私に対する……ぶりよく?ぶじよく?ぶりよ

」

「侮辱だ、アホ」

「あ、それです。ありがとうございますゾロさん。……そう、ぶじよくですっ!!」

「はあ……頭痛くなってきた」

「私はもつといたいですよっ!!」

「で、そのミーちゃんとやらを何で捕ってきたの?」

「えっと……素手です」

「……訂正。言い直すわ。どうしてミーちゃんを捕ったの?」

「あのですね……こう、ガバッ!!っと、あたっ!!」

ミーちゃん捕獲時の行動を再現したらまたぶたれました。

「あうう……」

「アンタ、ワザとやってない?」

「?……何をですか?」

「はあ、コレが天然ってヤツなのね。また言い直すわ。どうしてアンタはルフィと一緒に虫を捕って来たりなんかしたの?」

「最初にルフィさんがヘラクレスオオカブトを見つけてまして、一緒に追っかけてたら途中であの子と出会ったのです」

「アンタ時間が無いって事知らなかったの？」  
「いえ、そのことなら帰りがけにルフィさんから」  
「じゃあ何でルフィと一緒にヘラクレスを追ったの？」  
「るふいサンノ少年ノヨウナ目ヲ無視デキナクテ」  
「本当のことを、イ・エ」  
「追いかけるルフィさんが楽しそうだったので私も  
たいっ！！」

またぶたれました。これで3回目です。

「もうっ！！頭ぶたないでくださいよっ！！せっかく戻った記憶が  
また飛んじゃいますよ!?!」  
「飛ばばイイわ!?!」  
「ひどいですっ!?!」  
「　　ってええ!?!ツエル、アンタ記憶が戻ったの!?!」  
「ええ!?!本当か!?!」

私たちの言い合いを聞いていたルフィさんたちが聞いてきました。  
みなさん、私の記憶のことにも気にかけてくださっていたんですね。  
うれしいです。

「まあ、戻ったと言ってもほんの少しですけどね」  
「そっか……よかつたじゃねえか!?!」  
「はいっ!?!」  
「それで、どんな記憶だったんだ!?!」

チョッパーさんが興味津々そんな顔で聞いてきます。

「別にお話してもいいのですが……時間は大丈夫なんですか?それ  
と、たぶんつまらないですよ?」

「ああ、今気を抜きながら全速前進してるだけだから大丈夫だ」  
「わかりました。では、話しますね」

気を失ったときに思い出したことを話しました。思い出したと言  
うよりも、夢で見たと言ったほうが正しいのですが、あれは私の記  
憶だと確信を持って言える気がします。

「ふうん……孤児院で働いていたの？」

「そうみたいです。記憶がなくても掃除・洗濯・料理ができたの  
もそのためかと」

「それで、戻った記憶はそれだけなのか？」

「そうですね……あ、あと、戦い方も少しだけ思い出しました」

「戦い方……ねえ」

「気になったんだけどよ、オメエ強<sup>つえ</sup>えのか？」

ルフィさんが興奮したような顔で聞いてきました。不意な質問だ  
つたので少々驚いてしまいます。

「人並みには戦えると思いますが……あまり強くはないと思います  
よ？」

「そっか……なあ今度」

「園長<sup>ボス</sup>！！マズイツス！！」

ルフィさんが何か言う前に、マシラさんの船から慌ただしい声が  
……。一体どうしたのでしょうか？

## 第8話 叱られた貧血娘（後書き）

ツエルは記憶を取り戻し、若干弱気で臆病なところが改善されました。

記憶を取り戻す度に若干のキャラ習性や新しい技が出ちゃったりする予定なのでお楽しみに！！

### 《次回予告》

「あんなでつけエ大渦の穴が……」

「うわ！！急に波が高くなった！！」

「まさか……！！」

「　　　　　^ ^　　　　　〽〽〽〽！！」

「やめたア！！やめやめ！！」

「来るぞ……」“突き上げる海流（ノックアップストリーム）”

「行くぞ……！！」“空島”〽〽〽〽！！」

〽空を飛んだ貧血娘〽

## 第9話 空を飛んだ貧血娘（前書き）

第8話から次回予告を取り入れてみました。  
あとがきに書くので、よかったら見てください。

## 第9話 空を飛んだ貧血娘

(side others)

声を上げたのはマシラの部下だった。南西から目標の空島がある積帝雲が来ているのが見えたのだ。予想していた時間よりもずっと早かった。

シヨウジヨウの部下のウータンダイバーズが海に潜り、海流を探すと、10時の方角に巨大な渦潮を発見し、マシラの指示でその方角へと向う。

「きゃあー!!」

「うわ!!波が急に高くなった!!」

「爆発の前震だ!!気をつける!!」

荒れ狂う波に船は揺れ、ツエル達は振り落とされないようにしっかりと船体につかまる。

そのままメリー号はマシラの船に誘導されて渦の近くまで行き、渦の中心まで行くように言われた。

「飲み込まれるなんて聞いてないわよオ!!」 ナミ

「……………」 チョッパー(楽しそう)

「大丈夫だ!!ナミさん、ロビンちゃん、ツエルちゃんは俺が守る

!!」 サンジ

「こんな大渦初めて見たわ」 ロビン

「 ^^ ~~~~~!!」 ツエル(声にならない叫び)

「やめだア!!やめやめ!!引き返そう帰らせてくれエ!!」 ウソップ

「観念しろウソップ……手遅れだ。1人すでにノッチまってる」

ソロ

「行くぞ〜〜〜！！空島〜〜〜〜！！！」

マシラ達はすでに渦の被害にあわない所まで移動していた。

渦の中心へ落ちるかのように吸い込まれそうになった時、さつきまでの大荒れがウソのように急に鎮まった。

「何イ！？消えた！？何でだ！？」

「何が起こったんですか！？」

「あんなでっけエ大渦の穴が………どういコトだ！？」

ツエル達も騒然とし、海を見下ろす。

海底から聞こえてくる音にいち早く気付いたナミが声を上げる。

「………違う！！始まっているのよもう………渦は海底からかき消されただけ………！！！」

「………え？」

「まさか………！！！」

ツエル達が周りを見回していると、シヨウジヨウが声をかけてくる。

「おいおめエら！！余所見するな！！くるぞ、  
“突き上げる海流（ノックアップストリーム）”………！！！」

「え………」

海がだんだんと盛り上がってきた。

「全員船体にしがみつくか船室へ！！！」

「ギヤアアア！！海が吹き飛ばぶぞオオオ！！！」

次の瞬間、もの凄い爆音と衝撃と共に海から空へと水柱が出来上がる。

その水柱の上を船が垂直に走るが、だんだんと船体が浮き始めていた。

更に悪いことに、上から海王類やら船の残骸やらが落ちていき、自分達もそうなるのが時間の問題だと思ってしまう。

「やっぱただの“災害”なのか!？」

「うわあ!! 色々なもんが降ってくるぞ!! “突き上げる海流（ノックアップストリーム）”の犠牲者だ!!」

「ああ……おれ達ももうお終いだ。このまま落ちて全員……!! 海に叩きつけられて死ぬんだよ!!」

「せめて痛くないようにしたいです……」

若干2名が諦めかけている中、ナミが打開策を見つけた。

ナミの指示通りに帆をはり舵をとる。

船が水から離れそうになり、落ちると思った瞬間

「え!!!？」

船は上昇気流に乗って飛んでいた。

「すげエ船が空を飛んだ!!」 ルフィ

「まじか!?!」 ウソップ

「……………」 ロビン

「ウオオオ!?!」 チョッパー

「やった……………」 ナミ

「へエ……………」 ゾロ

「キヤアア!?!キヤアアツ!?!」 ツエル(楽しんでいる)

「ナミさん素敵だー!?!」

メリー号は立ちはだかる積帝雲へとどんどん近づいていく。  
一同も楽しそうな顔になっている。

「“積帝雲”に突っ込むぞオオ〜!?!」

第9話 空を飛んだ貧血娘（後書き）

《次回予告》

「ああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜暇」

「アレって……小船、ですかね？」

「なにかあったのか!？」

「俺、やりたいぞ!!！」

「……無理ね」

「だ……………大好き」

「It's a party time!!！」

〈番外編 Mr・パーティと貧血娘〉

第9・5話 番外編Mr・パーティと貧血娘（前書き）

総PV1万突破御礼番外編です！！

2人目のオリキャラが登場します！！

ちなみに本編との時間系列の関係は全くございません。

では、どうぞー！！

## 第9・5話 番外編Mr・パーティと貧血娘

(side others)

天気は快晴。海も穏やかで見晴らしがいいある日のこと。麦わら海賊団一行はのどかな日中を過ごしていた。前の島を出航してから数日、食料も水もたっぷりと積み込んでおいたので釣りをする必要もないし、船の上なので遊べるようなものもない。

ナミは新聞を読み、ロビンは本を読み、ツエルは鼻唄を歌いながら洗濯物を畳み、ゾロは筋トレ、サンジは夕食の仕込みと、それぞれ思い思いに過ごすことにしていた。だが、もともとやることのないルフィ・ウソップ・チョッパーは思いっきり暇していた。

「ナミィ〜〜まだ次の島につかねエのか？」

「まだまだよ」

「あア〜〜〜〜……………暇」

「ふふ…………大丈夫ですか？ルフィさん」

「ダメだ。暇すぎて死ぬ」

「右に同じ」

「俺も」

だらだらと寝転がっている3人を見て、ツエルはクスクスと笑っている。彼女はむしろ、こういう平和で暇な時間のほうが好きだった。

「オラお前ら、暇だったらツエルちゃんの手伝いしてやれよ」

「大丈夫ですよサンジさん。今日はもう輸血も終わってますし…………あれ？」

船の後方甲板にいるツェルの何かを見つけたような声に反応して、ルフィ達が駆け寄る。

「何かあったのか!？」

「あ、いえ……アレ、何でしょう?」

「アレ?」

ツェルはメリー号の右側遠方の海を指差した。確かにそこには何か小さいものが浮かんで見える。

「アレって……小船、ですかね?」

「ん?どれどれ……あ、ホントだ小船だよ。よくわかったな」

「えへへ……私、目はいいので」

ウソップが頭につけているゴーグルで確認すると、確かに小船だった。

「あと、たぶんこのままだとあの小船近づいてくると思いますよ?」

「え?そうなのか?」

「はい。ほらあの船、進行方向は一緒ですけど、だんだんこちら側に近づいているように見えませんか?」

「ん………本当だ」

それから数十分後、ツェルの言ったとおり、小船はメリー号のすぐ近くまで接近してきた。だが、その船には倒れている男が1人だけ。船室にも人がいる気配はない。どうやら漂流者のようだった。

とりあえずルフィ達はその漂流者を助けることにし、小船からメリー号へと男を運ぶ。メリー号に乗せた時、男が意識を取り戻した。

「お、大丈夫か?」

「め……………めシ……………」

漂流者の食欲はなかなかのものだった。ルフィほどではないがそれはそれはよく食べ、ツエルが「ふわぁ……………」と感心したような声を上げていた。

「ゴクン……………プッハー！！イヤァー助けてもらっちゃってアリガト！！君達は命の恩人ダツ！！」

「あ、いや……………どういたしまして」

「申し遅れタ！！ボクは娯楽の伝道師をやっているヨ！！Mr・パーティーって呼んでチヨ！！」

Mr・パーティーと名乗った男は、奇抜なファッションをしていた。赤いリボン付きの白いシルクハットに、白の燕尾服。白のソックスに白い革靴で、赤いマントを羽織っており、目の部分が星型になっているサングラスをかけている。怪しい人物ではあるが、言動から敵意はないように見える。

「そつか、Mr・パーティーっていうのか！！」

「イエース！！」

「で、その“娯楽の伝道師”ってのは何だ？」

サンジがそう訊ねると、Mr・パーティーの眼（サングラスだけど）がキラーンと光る。待ってましたと言わんばかりに。

「ボクはね、お金と引換えに暇な時に簡単に楽しめる遊びを提供して旅をしているのサ！！」

「へ〜〜なんだか面白そうだな」

今まで暇していたルフィ・ウソップ・チョッパーには耳寄りな話

だった。

「ウン!!とつても面白いのばっかりサ!!命の恩人な君達にはパーティーゲームの1つである、“限定リミテッド王様ゲーム”をプレゼントしたと思うんだけどどうかナ?もつちタダだヨ!!」

「うっほオオなんだか楽しそうだな!!」

「本当にタダならやってみたいわね」

「俺、やりたいぞ!!」

「フフ……ちよつと興味があるわね」

「へエ……………」

「ど、どんなゲームなのでしょう……(ドキドキ)」

「ゲームか、なんだかそういうのって久しぶりだな」

「面白そうだ!!やろうぜ!!」

Mr. パーティの気前のよさに一同が盛り上がる。それを見ているMr. パーティも嬉しそうだ。

「じゃ、満場一致でOKツかな?」

『もちろん!!』

「よ〜〜シツ!!It's a party time!!」

Mr. パーティは1回船に戻ると、“?”と大きく書かれた上に手が入る程度の穴が開いている箱を1つ持ってきた。

「じゃ、遊び方を説明するヨツ!!簡単だからスグに覚えられるはずサツ!!」

ルフィ・ウソップ・チョッパー・ツェルの眼はキラキラしていた。早く早くと急かしている。

Mr. パーティはポケットから8本の短い気の棒を取り出す。

「まず参加者は1人1本ずつこの棒を引いて、他の人には見えないように棒の先端に書いてある文字を確認してネツッ！この棒にはそれぞれ、1〜7の数字もしくは“王様”と書かれているんだ。で、ボクが『王様だ〜あれッ!?』って声をかけたら、王様の人が手を上げてネツッ！その時王様以外の人は番号を他の人に教えちゃダメだからネツッ！ここまで大丈夫かなッ？」

ルフィ達は全員頷く。どうやら大丈夫なようだ。Mr. パーティはニツと笑って続けた。

「そしたら、王様はこの“?”が書かれている『指令ボックス』の中から一枚だけ紙を引くんだ。王様はまずそれを読み上げるんだヨッ！！例えばア〜…よっト！！」

Mr. パーティは『指令ボックス』から一枚の紙を取り出す。そしてそれを全員に見えるように持つ。そこには、『番が 番を思いつきりデコピン!!』と書かれていた。

「この“ ”の部分に番号を入れて、もう一度王様を読み上げるんだ。例えば、『1番が2番を思いつきりデコピン!!』みたいにネツッ！そしたら、1の数字が書かれた棒を持っている人が、2の数字が書かれた棒を持っている人に思いつきりデコピンをするって感じだヨ！！基本的にどれも簡単な指令ばかりだから安心してネッ！！でも、このゲームをやっているからには【王様の指令は絶対!!】だから必ず従ってネ！！ハイ、コレで説明終わり！！大丈夫かなナ!？」

ルフィとチョッパーが少し怪しかったが、とりあえず全員理解したようだ。

満足げな顔を見ると、Mr・パーティは懐からマイクを取り出した。

「それでハッ！！“リミット限定王様ゲーム”……スタート開始ッ！！」

注：このゲームは実際に、作者が1人でクジを作り、クジを引き、本人になりきったつもりで番号指名をして、1人寂しくやってみました。その時の結果ありのままにしております。なので、明らかに特定の人物に固まっても、それは作者の運であることをご了承下さい。では、どうぞ。

「よし！！みんな棒を引いたネ！？じゃ、王様だ〜あれッ！？」  
「俺だー！！」

勢いよく手を上げたのはチョッパー。

そして指令は……『 番が 番に想いを叫ぶ』

「じゃあ……5番が3番に！！」

「あ、3番俺だ」

「5番私じゃないですかっ！！」

サンジが3番、ツエルが5番だったようだ。

「えっ……ツエルちゃんが俺に想いを叫ぶってコトは……」

(サンジの妄想)

「は、恥ずかしいです……けど、王様の指令は絶対ですもんね……」

火が出そうなくらい真っ赤な顔をしたツエルは船の端まで行くと海に向って叫んだ。

「さ、サンジさんのお料理大好きですっ！！でも、サンジさんの方がもっと好きですーっ！！」

(終了)

(なんてコトになったらどうしよう！！ぶフッ！！)

「オラその妄想野朗ッ！！戻って来ないとツエルが叫べないだろうガッ！！」

司会のMr.パーティが、サンジを蹴って正気に戻した。

「では、5番のツエルさん！！船の端から海に向ってどうぞ！！」  
「うう、恥ずかしいです……でも、王様の命令は絶対ですもんね……」

ここまで妄想と同じなので、正直サンジはドキドキしていた。  
顔を赤くしながら、ツエルは船の端に行き、叫んだ。

「実はタバコの煙が苦しいんですっ！！せめて厨房の中だけでも我慢してくださいさあーっ！！」

ピシッと岩のように固まるサンジ。背を向けているので見えないツエルと、ロビン以外のその様子を見ていた全員が必死に笑い声を

こらえていた。

「プツクク……そ、そうだなッ！！タバコの吸い過ぎもほどほどに  
ネッ！！じゃあ次いつてみヨ！！！」

Mr. パーティが棒を回収し、再び配った。

「王様だ〜あレッツ!？」

「あ、私だ」

今度の王様はナミ。

そして指令は……『 番が 番にプロポーズ』

「おおつト！！なかなかシビアなのが来たネッ！！これで男が男に  
とかだったらやだなッ！！」

「じゃあ……7番が3番に」

「ん？3番俺だ」

「……………」

「あれ？ゾロの相手、3番は誰かナツ？」

「マリモ！！何で俺がテメエにプロポーズしなきゃならねェンだよ  
ッ！！！」

「知るかッ！！それはコツチのセリフだ！！！」

どうやら相手はサンジのようだ。

「おおつト！！恐れていた事態が起きちゃったネ！！ま、でもルー  
ルはルールだからドウゾッ！！！」

「くっ……………オ、俺が毎朝みそ汁を作ってやるよッ！！！」

「お断りだッ！！！」

「さ、見苦しいイベントも終わったし、次いこっか」

「なんかゴメン……2人とも」

「王様だ〜あレッツ!？」

「よっしや!!また俺だ!!」

本日二度目のチョッパ!

そして指令は……『 番が振り返って“大好き”って言う』

「うおっト!？またしても男はイヤな指令だヨツ!!」

「じゃあ……2番」

「チョッパ! テメエツ!!」

「おおつとその反応は君だネゾロ!! さあ張り切ってどうゾ!!」

ゾロは後ろを向き、首だけ振り返る。その顔は屈辱と怒りでほんのり赤くなっていた。

「だ………大好き」

『 …… ダツ!! …… オooooooooooooo……』

ロビンとツエル、ゾロとMr. パーティ以外の全員が船の端までダッシュし、海に向って思いつきり吐いた。

「こ、これは(ある意味)威力が高いネツ!! 流石にボクも吐きそ  
うだヨツ!!」

「だっいたらやらせるんじゃねエツ!!」

「Oh~~~~!! パーティ中に暴力は反対だヨツ!!」

全員が落ち着いた頃、再びゲーム再開。

「王様だ〜あレッツ!？」

「俺だアアア!!」

元気よく立ち上がるルフィ。今の全員の願いは、“今度こそマシな指令であってくれ!!!”

結果……『番が 番に毒舌アドバイス』

「今回は吐き気をもよおすタイプじゃないネツ!!!」

「じゃあ……1番が2番に!!!」

「おっ1番は俺様だな!!!さアて相手は誰だ?」

「私ね」

「おおつト!!!見た感じ欠点ありまくりそうな人が、見た感じ欠点のなさそうな人にアドバイスとは……なかなかオモシロイネツ!!!」  
「ウツセエぞこのスットコドツコイ!!!」

1つ咳払いすると、ウソップはロビンと向き合う。

「ロビン、お前は暗い。暗すぎる!!!お前は島を見つけたら何て言う!!!?」

「普通に……“島が見えたわ”って言うわ」

「全く、暗すぎるぞ!!!新しい島を見つけたら明るくしなくてはならんのだ!!!手本を見せてやらろつ。船長、どうぞ!!!」

「野郎共!!!しくまっが見いえたっぞお!!!イツ!!!ヤッハウ!!!」

「こつだ!!!」

「……無理ね」

「ハイ終了ーッ!!!毒舌の“ど”もない上になんだかよくわからないアドバイスだったネツ!!!って言うか今のアドバイスじゃなかったネ!!!」

軽く涙が出たウソップだった。

「王様だ〜あレッ!!!?」

「あ、俺だ」

今度の王様はサンジ。

そして指令は……『 番が王様の頬にk i s s 』

(この時の様子を語るp氏)

「いやあ、あそこまでの“ やってもうた ”という表情は今まで見たことがなかったネツ!!」

「また男だったら最悪だネツ!!」

「テメエワザとか!? ワザとだろ!？」

「No!! って言うかクジを引いたのは君だろウ!? まあまあよく考えてみなヨ!! 場合によっては天国だヨツ!？」

そう、確かに男だったら再び嘔吐地獄だが、女性陣だったら……  
そう、<sup>ハレルヤ</sup>天国だ!!

「(頼む……ナミさん、ロビンちゃん、ツエルちゃんの誰かであつてくれ!!) ……5番だ!!」

(この時の様子を語るs氏)

「思い出したくもない……オエツ」

結果だけ言えば……5番はゾロだった。

ツエル、ロビンを除く船に乗っていた全員が船の端までダッシュし、海へ吐いた。もちろん司会のMr・パーティーも。

全員が落ち着いた頃、げっそりとしたMr・パーティーがまだ続けるかどうか聞くが、答えは満場一致でNo。

「ウン……………流石にボクも限界だよ」

こうして、“リミット限界王様ゲーム”は幕を下ろした。

第9・5話 番外編Mr・パーティと貧血娘（後書き）

《次回予告》

「排除する……」

「そりゃ乗るだろ。雲だもんよ」

『（いやア……微妙）』

「ちよつとフラフラするだけです」

「大変だ~~~~~!!」

「あの野郎雲からおちたのか!？」

「我が名は“空の騎士”ガン・フォール!!」

〈遙か天空の貧血娘〉

## 第10話 遙か天空の貧血娘（前書き）

K「Kと!!!」

T「ツェルの!!!」

K & T 『作中ゲリララジオ! 略して“ゲリララ”!』

K「え? 下痢、羅々?」

T「いきなり下品なこと言わないでくださいっ!」

K「だってそう聞こえちゃったんだもん! 仕方ないじゃん!」

T「それでも言っちゃだめですっ!」

K「こほん、それでは気を取り直して……みなさんこんばんは。ONE PIECE 陽気な海賊達と貧血娘の作者Kと!」

T「主人公なのに影が薄い貧血娘ことツェルです!」

K「この新コーナーでは、私<sup>わたくし</sup>Kとツェルちゃんがとりあえず無駄話します」

T「そんなグダグダな感じで大丈夫なんですか……?」

K「苦情だけは受け付けませんっ」

T「作者として失格ですね」

K「さて、ツェルちゃん」

T「なんですかKさん?」

K「この作品の、名前つて長いと思わないかい?」

T「たしかに……ちよつと長いですよね」

K「だから私、この作品の略称を考えてきました!」

T「え? 1人ですか?」

K「ううん。えとね……Mr. パーティと」

T「なぜでしょう? 不安しか出てきません」

K「この作品の略称は、“楊貴妃”<sup>ようきひ</sup>に決定いたしました! ひゅ〜  
どんどんぱぶぱぶ!」

T「……………」

K「なんだようっ！！その“うわあ、この人やつちやっただよ”みたいな眼は……！」

T「いえ、別に……あ、そう言えば、Kさん」

K「なんでしよう？ツエルちゃん？」

T「読者のみなさまに謝ることがあるんですよね？」

K「……すっかり忘れていやがりました」

T「えっと、前回の“限定王様ゲーム”のことですよニギハヤクね」

K「うん、そう。友達に『BLっぽくない？』って言われちゃって

……ゾロとサンジのファンに不快感を与えてしまったなって」

T「ですよ。早く謝ってはいかがです？」

K「うん。そうだね。あ、これ謝罪文だからそういうコトでっ！！

(ダツ)

T「あ……！逃げました……！……まったく、しょうがないですね。

謝罪文がルーズリーフ一枚だけ、しかも片面のみってどうかと思いますが……では、代わりに読ませて頂きます。『ゾロ・サンジのファンの方、そして番外編を見て不快感を感じてしまった読者の方へ。いくら運だからと言って、ワルノリしてやりすぎ、みなさまの心にダメージを負わせてしまい、申し訳なく思っております。今後、こういうことがなるべく起こらないよう改善していきますので見捨てず、今後もこの作品をよろしくお願いします』Kさん……：そうですか。ふふ、なんだかんだ言ってもやる時はちゃんとやるんですね。あら？一枚だと思ったたらもう一枚重なっていました。えっと……『勢いでやってしまった。今はとても反省はしているが、後悔はしていない』ってちょっとKさん！？……どうということですか……！……！」

K「不快に思ってしまった方、本当に申し訳ありませんでした。ですが、Mr.パーティを気に入ってくださった方もいらっしやるよ

うですので、今後第二弾も計画しております！もし、こんなパーティーゲームをやって欲しい！！と言う方がいらっしやいましたら、気軽に感想のほうへ書き込んでください。それでは！！長くなってしまうましたが、本編どうぞ！！」

11 / 1 / 29

第2・5話 設定上の貧血娘にて、色々更新。

## 第10話 遙か天空の貧血娘

麦わらの一味は何とか空島へと到達は出来た。だが、到達してから色々起こった。

「雲の上……なんで乗ってんの!？」

「そりゃ乗るだろ。雲だもんよ」

『イヤ、乗れねエよ(ませんよ)』

すっ飛んだことを言ったルフィに全員で突っ込みを入れたり、

「大変だア!!ウソップの息がない!!」

「何イ!?何とかしろ!!人工呼吸だ!!」

「じゃあ俺は具合が悪そうなツエルちゃんと!!」

「あ、いえ……ちょっとフラフラするだけです……だから、その……」

「マジメに受け答えなくていいわよ」

ウソップの生命の危機だったり、

「キャプテン・ウソップ!!泳ぎまゝすっ!!」

気付いたウソップが雲の海を泳ぎだしたと思ったら、

「思ったんだけど……ここには“海底”なんてあるのかしら」

「まさか!!」

「あの野郎雲から落ちたのか!？」

「ウソップ~~~~~!!」

雲から落ちたウソップをルフィとロビンの能力で助け出したりした。

その後、チョッパーが双眼鏡で辺りを見回していたら、一隻の船が見えた。そのことをみんなに言いかけるが……。

「……………え？……………わ……………わアー！」

「チョッパー。船がどうした？」

「いや、船は確かにあったんだけど……………」

「？……………どういうことですか？」

チョッパーの様子がおかしい。

「そこから牛が四角く雲を走ってくるから……………大変だ……………！！」

「わかんねエ落ち着け」

「一体何だっつてんだ……………！！？人だ！！人が雲の上を走ってくる！！」

変な仮面をした男が雲の上を走ってメリー号に向っていた。どうやらチョッパーはこの男を目撃したらしい。その男に友好的な雰囲気はなかった。

「排除する……………」

更にこんなことまで言うもんだから、ルフィ・ゾロ・サンジの三人が応戦しようとする。だが、男に一蹴されてしまった。あの三人が！？ナミ達も動揺する。

男は飛びのくとバズーカを構えてメリー号を狙う。沈める気だ。だが、その時また鳥に乗った別の男が面の男に槍で攻撃した。面の男は雲の海へ落ち、鳥の男はメリー号に着地する。

「何!!今度は誰!？」

すっかりテンパっているナミがその男に向っていった。その男は振り返って答える。

「我輩、“空の騎士”!!」

“空の騎士”と名乗った男は敵ではないようだ。面の男は去っていった。

とりあえず危機は脱したようで、ナミが3人がかりでだらしがないとルフィ達を叱咤する。ルフィとサンジが、戸惑ったような声で受け答えた。

「いやまつたく……不甲斐ねエ」

「なんか身体が……上手く動かねエ」

「きつと、空気が薄いせいね」

「ああ……そう言われてみれば」

そのことについて、“空の騎士”が少し説明してくれた。今ルフィ達がいるのは上空7000mの“白海”と呼ばれる場所で、さらに上層の“白々海”にいたっては地上から1万mも上空に位置するとか。

「通常の青海人では身体がもつまい」

青海人とは地上の、青い海からやってきた人達のことだ。確かにこれだけ遙か上空に位置する場所にあるならば、普通の人間ではキツイだろう。そう………普通の人間では。

「おっし!!だんだん慣れてきた」

「そうだな。さっきより大分楽になった」  
「イヤイヤ、ありえん」

この船の船員は普通ではなかった。……1名を除いて。

「ん？……お、オイ、大丈夫か？」

「うっ……………アツ……………フラツバタツ」

「ツエル!？」

ツエルは元々白い顔を更に白く青くし、頭を押さえて倒れた。

「大丈夫か!？ツエル!!」

「……………マズイ。高山病だ……………それも重症だよ!!」

「と、とりあえず船室に運ぼう!!」

息を荒くし、ぐったりとしているツエルを船室へと運んだ。

20分後

船室からチヨッパーが出てきた。

「チヨッパー!! ツエルちゃんは!？」

「今はもう状態も安定して、静かに眠ってるよ」

「そっか、よかった」

「でも、うっかりしてた。よく考えればこうなることはわかるはずだったのに」

「え?……………どういうことだ?」

チヨッパーの言葉に、全員が注目した。彼は浮かぬ顔で話す。

「前に、ツエルは理由は不明だけど自分で血液が作れないって話したよな？」

「あ、そう言えば……」

「ツエルの身体には普段から血液が少なすぎるんだ。それも1日1回輸血をしなくちゃならないほど。だから、酸素を運ぶ役目をする赤血球も少ないんだ」

「つまり、どういふことだ？」

「酸素が……空気が少ない空島では、彼女は満足に動くことすら出来ない。ということかしら？」

「うん、そう。だからツエルは……空島では船に籠りつきりになるよ。それと、万が一のために誰かがついてあげなくちゃいけないんだ」

「そっか……それなら仕方ねえな」

麦わらの一味の間に暗い空気が流れる。空の騎士は気まづくなくなっていた。

「そろそろ、話を続けてもよいかかな？」

「え？あ、ああすまん」

とりあえず彼の話を再開することとなった。空の騎士は色々と教えてくれた。彼が言うには、ノックアップ・ストリーム以外にもう1つ、空島へと到達する手段があったらしい。だが、そちらは確実に行ける代わりに犠牲が多いとか。だが、ノックアップ・ストリームの場合は全員がたどり着くか全員が死ぬかの大勝負。最近はその手段で上がってくる航海者はほとんどいないそうだ。

空の騎士はその度胸と腕を気に入ってくれたようで、鳴らせば必ず助けに来てくれるという笛をルフィ達に渡してくれた。

そして、去ろうとする。

「待って!!名前もまだ……!!」  
「我輩の名は“空の騎士”ガン・フォール!!そして相棒のピエール!!」

ピエールと鳴く変な鳥が相棒のようだ。

「言い忘れたが我が相棒ピエール……鳥にして“ウマウマの実”の能力者。……即ち」  
「うそ……素敵!!ペガサス!？」

鳥の身体から馬の脚や鬣、尾が生えてくる。その姿はまさしく

「そう!!ペガサス!!」

「ピエール!!」

『（いやア……微妙）』

神々しさや凛々しさとはかけ離れた外見だった。

「勇者達に幸運あれ!!」

バツバツと翼をはためかせ、去っていくガン・フォール。  
麦わらの一味は微妙な空気で見送った。

## 第10話 遙か天空の貧血娘（後書き）

### 《次回予告》

「隙ありっ!!」

「（一番危険なおれだっ!!）」

「実に腹立たしい……」

「吼えておれ!!」

「貴様……まさか心綱マントラを!？」

「こんな子供だましですよ」

「ウオオオオオオ!!空の騎士イイイイイ!!」

〈唸れ!!貧血娘〉

## 第11話 唸れ！！貧血娘（前書き）

K「Kと！！」

T「ツエルの！！」

K & T「作中ゲリララジオ！！略してゲリララ！！」

K「さあ始まりました“楊貴妃”。今回はツエルちゃんのバトルとなっております！！ね、ツエルちゃん」

T「もう戦いたくありません……船でお洗濯やお掃除してるほうがいいです」

K「まあそう言わないで。さて、今回はお便りが来ています」

T「なんだか本当にラジオっぽいですね」

K「えつと、東の海からお越しの“肉大好き！！”さんからのお便りですね」

T「なんでしよう？1人心当たりどころか、確信をもってこの人だつて思える人が浮上します」

K「『K、ツエル。オッス！！』こんばんは」

T「こんばんは」

K「『ツエルつて本当は強いのか？こんど戦つてくれよ！！』だそ  
うで……どうします？戦つちゃう？」

T「さつきもう戦いたくないつていったばかりですよね！？いやに  
決まっていますっ！！つていうか、どんな場面でKさんは戦わせる気  
ですか！？」

K「まあそこはホラ、作者権限とかで」

T「権力の乱用反対っ！！」

K「へっへっへ……ねえちゃん。クビになりたくなくьяおとなしく  
従いな」

T「パワハラですかっ！？」

K「いやほら……作者、登場人物って関係で、もう縦の関係になつてるじゃない？」

T「ええ！？私たちの関係って縦だったんですかっ！？」

K「ははっ今更……」

T「上下関係なんてだいつきらいですっ！！」

K「まあ冗談はこのくらいにしておいて、まあ今のところそんな」とする予定はないから安心して」

T「ほっ……」

K「今のところ……ね」

T「ええ！？」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは、読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ！！」

K「メールアドレスは、k a k k e y - c o m e p k s p . j p  
です。 を@にして下さいね」

T「って……メールアドレス出しても大丈夫なんですか？」

K「大丈夫！！以前使ってた、今は更新してない個人サイトのメールアドレスだから」

T「それなら安心ですね」

K「感想、メッセージその他待つてまゝすっ！！」

K & a m p ; T 『それでは第11話、どうぞ！！』

## 第11話 唸れ！！貧血娘

(side others)

ここは、神の島“アップアーヤード”の中にある生贄の祭壇。ツエルが寝ている間、色々な出来事があった。空では海軍にも追われることもなく、ゆっくりとくつろげると思っていたルフィ達だが、不法入国者として空の警察ホワイトベレーに捕まりそうになったところ応戦し、第2級犯罪者とされてしまった。

そして、ルフィ・サンジ・ウソップを残して麦わら海賊団の船員達はメリー号ごとここに連れてこられたのだ。

黙って捕まっているのが性に合わないゾロ、歴史感あふれるこの島に興味を持ったロビン、財宝目当てのナミは生贄の祭壇から抜け出し、アップアーヤードへと探索に行った。船に残っているのは未だに目を覚まさないツエルと、彼女の看病と船の修理を任されたチョッパーだった。正直、行くのが怖いというのもあったが。

「とにかくおれは今できることをやろう！！危険な森で1人で船番なんて信頼されている証拠だ。そうだ！！おれは1人でこんな危険な場所に……はっ」

だが、1つ気付いたことがあった。それは

「（1番危険なおれだっ！！）」

これが杞憂に終わればどれだけよかっただろうか。チョッパーの思ったとおり、彼の置かれた状況は最も危険な位置だった。神官の1人、シユラが現れたのだ。突然の訪問者に驚いたチョッパーは、空の騎士から貰ったホイッスルを鳴らした。

「うわアアアアアア！！やめろオ！！やめてくれエエエエ！！」

シユラは容赦なくチョツパーと船を攻撃した。弱っているツエルが船室で寝ているのに気付いていないのが不幸中の幸いだと言えるだろう。ゾロ達は本来生贄の祭壇でルフィ達の助けを待っているべきだった。だが、そのルールを破ってしまったがために、チョツパーの命が危なくなってしまったのだ。

「誰かが逃げた罪は誰かが死んで詫詫びろ。“犠牲”と言う名のこの世の真理だ。……お前の命を“神”に差し出せ！！」  
「いやだア~~~~~！！」

シユラの攻撃に抵抗しようと拳を振りかぶるが、肩を槍で突かれる。しかも傷口が発火した。

「アアアアアアアア！！」

だがその時、待ちわびていた人物がやっと現れた。ガン・フォールはピエールに乗って現れるとシユラに攻撃し、シユラとガン・フォールの戦いになった。

「少々待たせた」

「ウオオオオオオ！！空の騎士イイイイイ！！」

ガンフォールはピエール、シユラはフザと呼ぶ鳥に乗っての空中戦となった。

「なかなかの相手だ。不足ない。少し手荒に行こうぞピエール」

「先代の老いぼれが何用だ！！遊んでやるか……フザ」

「吼えておれ!!」

「この島にや“神”は2人といらん!!」

挨拶とばかりの言葉を交わし、2人の戦いは徐々に徐々に激化していく。若干ガン・フォールが有利に見えていた。だが

「む!? (何だ!? イヤに身体が重い……!!)」

「かかったな……!!」

何か罫を仕掛けていたようだ。シュラがニヤリと笑う。

「カハハハ!! どうかしたかガン・フォール!!」

「おのれ……何をした……!!」

ガン・フォールとピエールが空中で止まっていた。

「死ぬ者に……答えは要るまい」

シュラが身体を動かすことの出来ないガン・フォールに、止めを刺そうと槍を振りかざす

「隙ありっ!!」

「な!?           ぐはっ!!」

突如現れた声と共にシュラとフザは吹き飛ばされ、森の巨木へと叩きつけられ、地面に落ちた。

たっ、と着地した音の方へチョッパーが目を向けるとそこには……

「ツエル!?」

「大丈夫ですか? チョッパーさん」

高山病で身体を動かすだけでも辛いはずのツエルがいた。

「お、お前……身体は!？」

「ええ、もう大丈夫ですよ。ご心配をおかけしました」

驚いた表情のチョッパーにニコツと笑いかける。だが、すぐにキツと目を鋭くさせる。

「今、“空の騎士”さんに攻撃しようとした人は……敵でよかったですね?」

「あ、ああそうだ」

「そうですか……」

森の方へ目を向けると、シュラが起き上がるどころだった。

「くっ……何だあの小娘は。フザ!……くそっ、落ちてやがる」

フザは叩きつけられた衝撃で脳震盪を起こしたようだ。これでシュラはしばらく飛べない。

「チョッパーさんは、ここで待っていてください。追い払ってきます」

「え?お、おいツエル!」

チョッパーの制止を無視して、飛び上がるガン・フォール達の近くまで上がると剣を振るう。すると、ブチブチと何かが切れる音が聞こえ、ガン・フォール達は動けるようになった。そして、飛行手段のないツエルは川へと落ちていく。

「ツェ、ツェル!!」  
「大丈夫ですよ」

だが、水面の数メートル上で、ツェルの身体は止まった。さつきまでのガン・フォール達のように。チョッパーやガン・フォールはもちろん、シユラまでも大口を開けて驚いていた。

「え?ええ!?!ツェル!!お前空中に浮くのか!?!」

「ふふ、違いますよ。これは“空の騎士”さんの身体の自由を奪った“あるもの”を利用してもらっているだけです。……どうしました?そんな驚いたような顔をして」

チョッパー達にはいつも通りの優しい声で。シユラには低い声で話す。シユラは未だに信じられないと言う顔でツェルを見ていた。

「貴様、何故だ……紐雲を見破るところか、何故紐雲の上に立っていられる!?!」

「そうですね……これは紐雲と言うのですね」

ツェルは何もないように見える周囲を、焦点のしつかり合った眼で見回す。チョッパー達は何のことだかさっぱりだと言う顔をしていた。

「ああ、理由でしたね。私は異常なほど眼がよくてですね、この程度の細さも見えてしまうんですよ。はっきり言って、こんな子供だまですよ。……私にとっては」

「バ……バカな」

「え?え?ツェル、どういうことだ!?!」

「簡単な話ですよチョッパーさん。“空の騎士”さんの自由を奪っていたのは、あの男が言った“紐雲”と言う細い紐みたいな物体で

す。恐らく集まればかなりの強度を誇るのだと思われます。私はまず“空の騎士”さんに絡まっていたそれを斬って、落ちていく時に1本1本足の裏で手繰り寄せながら落ち、それなりの強度が出来上がったので、その上に今立っている状態です」

「ふざけるな！落ちながら足で手繰り寄せると！？そんなマネが出来るはずがない！！どれだけ細いと思っっているんだ！！」

「はあ……現にできているからこうやって空中制止しているんじゃないですか」

やれやれと首を横に振る。そして、少し膝を曲げると岸まで一気に飛び、着地した。

「どうやら鳥さんは気絶してしまったようですね。これなら同じ条件で戦えます」

「俺と戦うだと……？カハハハ！！この俺に勝てると思っているのか！！」

「やってみますか？……どちらが強いか。……私の大切な仲間と船を傷つけたこと、後悔させてあげます」

シユラとツエルは得物を構え、睨み合う。

そこへ、ツエルにチヨツパーが声をかける。

「ツエル！！気をつける！！そいつの槍は燃える上に、俺の動きを読んでいるような感じだった！！」

「燃える槍？動きを読む？」

「娘よ、それは心綱マントラと呼ばれるものだ！！その男は身体から発している声を聞き、動きを先読みしてくる！！」

ガン・フオールが補足説明をした。

「チツ、ガン・フォールめ……余計なことを」

「声を聞いて先読み、ですか……なかなか厄介ですね。先に攻撃はしないほうが無難……かな」

「ハッ……だったらこっちから行ってやるよッ!!」

シユラがツエルめがけて突きを放つ。だが、それをツエルは右へと“ボンナ”で飛んでかわした。シユラはそれをも読んでいたかのように、右手を地面について衝撃を消しているツエルの方へ槍を横薙ぎに振るう。移動時の衝撃を消すために、ツエルの視線は下を向いていたのでこれは反応できないと思っていた。だが

「甘いです!!」

「なあ!？」

ツエルは更に体勢を低くとる、地面に伏せているのではないかと思うくらいだった。槍はツエルの頭のすぐ上を通過し、空を斬った。すぐさまツエルは立ち上がるとシユラの後ろへと駆け抜けた。……すれ違い様に相手の左肩を突いて。

「フレッシュ・ボンナバン」

「くっ………実に腹立たしい……!!」

すぐさま、シユラの猛攻が始まった。突き、斬り、薙ぎ払いを次々と繰り返すが、ツエルはことごとくかわしていく。シユラの顔にも焦りが生まれ始めていた。少し経つとツエルが大きく後退し、シユラとの間に距離をとった。2人とも息が上がっていた。

「つく………何故だ!!………何故貴様は俺の先に行く!? 貴様………まさか心綱を!？」

「声を聞く………でしたか? たぶん、違いますが、似たようなもの、

「ですね」

「……………どう言う事だ!？」

「先程言い忘れていましたが、私は目だけではなく耳も異常なほどいいんです。それこそ行動を起こすときに骨や筋肉が出す音すら聞き分けるほどに。なので、それを聞いて先読みしています」

「なん……………だと……………?」

驚愕に目を見開いていた。

「だ、だが!! 避けてばかりでは勝てるはずがあるまい!!」

気を取り直して、シユラは駆け出す。だが、ツエルは避ける様子  
がなかった。

「ですね。だから攻撃させていただきます……………“幻獣の一本角(ユニ  
ニ=ホーン)”!!」

「……………!! のああアアアア!!」

ツエルが構えていたサーブルを勢いよく前に突き出す。すると、  
シユラは刃に触れる前に何かに吹き飛ばされ、木に激突する。

「な、これはインパクト衝撃貝? いや違う……………何だ、これは……………?」

「はあ、はあ……………音速を、超えた突きは空を裂き、……………はあ……………衝  
撃波を生み出します……………打撃とも斬撃とも違い……………衝撃は身体の内  
より破壊を促します。ただ……………はあ……………疲れます」

ツエルの額にはびっしりと汗が浮かび上がっていた。確かに疲れ  
るみたいだが、今はなれない環境のせいで更に息が上がっていた。

「ですが、一撃で、大打撃ですね」

「コノ……………」

シユラ口からは血が出ていた。内臓のどこかをやられたようだ。だが、彼も諦めない。槍を再び構えた。

「まだ戦えるんですか……………」

「当たり前だ……………ヤワな青海人と一緒にするな!!」

「なら」

シユラが再び駆け出し、槍を突き出す。だが思わぬ強敵の出現で心が乱れ、心綱シントラが使えていなかった。ツエルは屈んでそれを避けると、立ち上がると同時にサーブルを一気に突き上げた。

「猪の湾曲牙（ボア＝タスク）!!」

「……………!!」

ドン!!と音を立て、シユラは声も上げられずに上空へと打ち上げられ、地面に叩きつけられた。

「ぐあア!!……………つく、くそっ!!」

それでも意識を失わない。なかなかしぶとかった。だが  
恐  
れていた事態が起きる。

「……………うつ……………くっ……………ま、また……………」

「まさかまた血が?……………ツ!!ツエル!!危ない!!」

「え?……………ツ!!」

「やっと捕らえたぜ……………小娘」

「くっ……………かふっ……………」

「ツエルウウウウウウ!!」

ツエルが貧血を起こした。またもや悪いタイミングで。

頭を押さえてフラフラとしているツエルの胸に、シユラは容赦なく槍を突き刺した。槍が引っこ抜かれるとツエルは地面へと倒れる。

「……なんだ、気を失ったか。だが……貴様に与えられるのは“死”だ!!」

痛み、発火による熱、そして貧血。ツエルはそのまま意識を閉じた。

だが、シユラの攻撃は終わらない。いや、これからが始まりだと言っても過言ではない。まったく動かないツエルの心臓めがけ、槍を振り下ろす。

「や、やめるオオオオ!!」

「そこまでだ!!」

シユラの槍はツエルの身体に届く前、空中に止まっていた。シユラが止めたのだ。いや、止めざるを得なかった。彼の背後には……槍をシユラの首もとに突きつけたガン・フォールがいた。

「そこまでだ……娘を突けば、我輩は容赦なくおぬしの首にこの槍を入れる」

「ガン……フォール……!!」

「交渉しようではないか」

「交渉だと!？」

「我輩達がおぬしを見逃す代わりに……おぬしも我輩達を見逃せ」

「ハッ……そんな交渉、成立すると思ってるのか!？」

「信じないとなればそれでもよい。だが、今どちらのほうが不利な状況か冷静に考えてみるがよい」

「くっ……………」

ガン・フォールの言う通りだった。今この状況では、圧倒的にシユラが不利。この交渉を見逃す手はない。だが、シユラにも神官としてのプライドがある。

少しの間視線の合わない睨み合いが続き、結局シユラが出した答えは……………」

「ふう……………やっと危機を脱することができたな」

「ありがとう。空の騎士。助かったよ」

「いや、礼を言うのは……………そして、謝るのも我輩のほうだ。我輩が不甲斐ないばかりに、ツエル……………とか言ったかな？彼女に傷を負わせてしまった」

「大丈夫だよ。ツエルの回復力は凄いし……………何より優しいから気にしてないと思う」

「……………そうか」

シユラがフザを引きずって帰って行った後、チョツパーはすぐにツエルの治療を行った。幸い傷は内臓と内臓の間にあり、命に別状はなかった。だが、高山病に加えてこの傷は油断できるものではないだろう。

第11話 唸れ!!貧血娘(後書き)

《次回予告》

「黄金前夜祭だ~~~~!!」

「ツエルは……大丈夫だったの？」

「この島に黄金があるってわかってな」

「我輩の名はガン・フォールと言っ」

「さ、さすがに遠慮させていたきたいなーと……」

「弱点でもあるかもしれないわね」

「……もしかしたら、お前ら4人にも匹敵するんじゃないか」

〈話題は貧血娘〉

第12話 話題は貧血娘（前書き）

K「Kと!!!」

T「ツエルの!!!」

K & T 『作中ゲリララジオ!!略してゲリララ!!』

K「始めました“楊貴妃”!!今回は話しはですね……」

T「今回の話しは?」

K「自分で書いといて何だけど、前回とちよっち被ってるんだよねコレが」

T「……」

K「そ、そんな眼で見ないですよッ!!かけたんだからいいじゃん!!!」

T「まあ……別にいいですけど……」

K「あ、まさか主人公なのにまた出番が少なくなったことに拗ねてる?」

T「そんなことないですもんっ!!!」

K「さて、今日もお便りが届いています」

T「あっさりスルーですか……」

K「ええつと、東の海からお越しのラジオネーム“大剣g……海賊王に俺はなる!!”さんからのお便りですね」

T「口さあああん!!ごまかせてませんよおおお!?!」

K「“ツエルに聞きたいことがある”ほうほう、なんでしょうね?」

T「さあ……」

K「“お前は本当に強いのか?もし強いのであれば戦って欲しい”……だそうで、どうする?戦っちゃおう?」

T「ルイさんと同じじゃないですかっ!!!どれだけ戦いたいですかっ!!!」

K「いやあバトルマニアが多いみたいだねっ」

T「なんでKさんはそんなにいい笑顔なんですか!?! っていうかわざとそう言う類のお便りを紹介してませんか!?!」

K「ハハハ……ソナワケナイジヤナイ?」

T「カタコトな上に疑問形じゃないですか!?! ちょっとそつちにあるお便りBOX貸してくださいっ!?!」

K「いやんえつち」

T「変な声出さないでくださいよ!?! どれどれ……ほらあ!?! 趣味はなんですか? とかの普通な質問もあるじゃないですか!?!」

K「だってそんなのリスナーの人が満足するはずないじゃんっ!?!」

T「どれだけ私興味持たれてないんですか!?!」

K「さて、そろそろ時間もなくなってきました」

T「まだお話し終わってませんよう!?!」

K「ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ」

K「メールアドレスはkakkey-comepksp.jp  
です。 を@に変えてくださいね」

T「このメールアドレス紹介続ける気なんですか?」

K「まあね 感想、メッセージ等お待ちしております!?!」

K&amp;T「それでは第12話、どうぞ!?!」

## 第12話 話題は貧血娘

「そっか……ツエルが」

「うん。ツエルが戦ってくれなかったら、おれも空の騎士も危なかったよ」

「くそつ、俺達があのだんごと戦ってる間にそんなことになってたとは……」

ここはメリー号の船室。シユラを追い払った後、すぐに麦わら海賊団は全員集合した。

最初にツエルの状態を見た時、サンジのゾロに対する怒りの様子は凄いものだった。何故病人のツエルを放って島の探索なんかに出のだ、と。だがゾロを攻めると、一緒に行ったロビンやナミも罪悪感を感じ、申し訳なさそうな顔をしたので、すぐに攻めるのをやめた。

ガン・フォールは危ないところを救ってくれたお礼だと言い、彼らのすぐ側にいる。

とりあえず、もしもの時に戦いやすいと言う理由で生贄の祭壇を降り、湖畔にキャンプを張ることにした。そこで、全員が今日あった出来事を報告していく。それと、ガン・フォールに貝と心綱ダイヤルマントラの説明もしてもらった。

そして……話題はツエルのことになった。

「それで、チョッパーを襲ってきた神官ってのはそんなに強かったのか？」

「うん。燃える槍に、さつきサンジ達が言ってたダンゴの神官が使ってたっていうマントラって言うのでこっちの動きを先読みしてきたんだ」

「燃える槍なんて……怖えな」

「それと、ツエルが言っていたのは凄く細いけど強度の強い紐みたいな物をそこから中に張り巡らせて、それで空の騎士の身体の自由を奪ったんだって」

「ツエルは……大丈夫だったの？」

「うん。それが凄いんだ。ツエルは逆にその紐を利用して、それに乗っかって空中に浮いてるみたいだった」

「見えないほど細い紐に乗っちゃうって……あの子どもな目してるのよ……」

「神官もびっくりしてた。それで2人の戦いになったんだけど、神官の攻撃が一切ツエルに当たらないんだよ」

「えっ？でも、その“マントラ”ってのを使って動きを読んできてるんでしょ？」

「そうなんだけど……ツエルはその神官の一步どころか何歩も先を読んてるような動きだったんだ」

「まさか……ツエルちゃんもそれを使えてたのか？」

「いや、あの娘は心綱マントラの存在を知らなかった。だから違うと思われる。……だが我輩の目から見てあの娘、少々戦い慣れたような感じもした」

ちなみにガン・フォールもツエルの記憶がないのをルフィ達に聞いて知っていた。

「で、結局ツエルちゃんが相手の動きを先読みした方法は何だったんだ？」

「それがわかんねえ。後で聞いてみようと思ってる」

「そっか」

「他にも、ツエルは妙な力を使ってた」

「え？どんな？」

「何か、こう……よくわかんねえんだけど、ツエルが剣を凄く速さで前に突き出したと思ったら、神官の身体に剣が触る前にその神官

が凄い勢いで吹っ飛んだんだ」

「はア！？なんじゃそりゃ！？」

「だからおれもよくわかんねえんだよ！！とにかく、ツエルは凄く強かったよ。……もしかしたら、お前ら4人にも匹敵するんじゃないかってくらい」

その4人とは、ルフィ・ゾロ・サンジ・ロビンだ。その言葉を聞き、ゾロは「ほう……」と嫌な笑みを浮かべた。同じ剣を使う強者が身近にいたとわかり、嬉しいのだろうか。

「ゾ、ゾロ！！何だその笑みは！！言っとくけどツエルに戦いを挑んじゃダメだからな！！ホントに重症なんだから！！」

「わかったわかった」

「それで……なんでそんなに強いツエルがやられちゃったの？

って……わかりきったことだったわね」

「うん。貧血症状がまた出たみたいで、フラフラしちまった時にやられたんだ」

「で、変な騎士の助太刀が入ったってところで終わったわけね」

「うん。そう」

彼らの間に流れる空気が少し変わった。全員、ツエルの見方が今までと変わったのだろう。1日に1回輸血する、臆病だけど優しいみんなの世話係程度の認識だったが、改めて記憶を失う以前の彼女の得体の知れなさが話題に浮上したのだ。

空島へと向う前、記憶の一部を取り戻したツエルは“自分は以前孤児院で働いていたみたいだ”と話した。だがチョッパーとガン・フォールの話を聞き、そんな戦いとは無縁そんな職場で、そこまでの強い力が必要とはしないはずだということまでたどり着く。

では、ツエルがウソをついているのか？それこそ問題外だ。普段の彼女を見る限り、そんなことをできるような人間には見えない。

一体あの身体のどこにそんな力があつたのか、どこでそんな力を得たのか……答えは全て、失われたツェルの記憶の中だということ、その話題はお開きとなった。

そして話題は他愛もないものとなって行き、夜に近づくと結局……

「黄金前夜祭だ……!!」

宴となった。怪我人が寝ているというのに。酒が入った彼らはどこまでも盛り上がっていた。敵陣なのに。

その様子をゾロ、ロビン、ガン・フォール、ピエールは踊りの輪の外から眺めていた。そして……

「あ、あのお……これは一体？」

ツェルが目覚めたようだった。もう歩き出している彼女を見て、3人と1匹は驚いた顔をしていたが、静かに声をかけた。

「動いても大丈夫なの？」

「あ、はい。ご心配をおかけしました」

「黄金」

「え？」

「この島に黄金があることがわかってな。その前夜祭だよ」

「あ、あはは……」

苦笑いしか出なかった。

「娘よ」

「あ、“空の騎士”さん。おけがはありませんでしたか？」

「うむ。我輩は大丈夫である。それより……迷惑をかけたな」

「あ、いえいえそんなことないですよ!!顔を上げてください」

ガン・フォールが頭を下げて謝ってきたので、慌てて彼の顔を上げさせる。

「私もお礼を言わなくちゃいけませんし」

「はて？……我輩が何かやったかな？」

「薄れていく意識のなか、“空の騎士”さんがあの男の後ろに迫っているのが見えました。あの後あなたが追い払ってくださったんですよね？」

「まあ……そうなるだろうな」

「ありがとうございます。“空の騎士”さん」

「それはこちらの台詞だ。……ちなみに我輩の名はガン・フォールと言っ」

「そうですか。わかりましたガン・フォールさん。私のこともツエルと呼んでください」

「うむ」

「ああ！！ツエルちゃん目を覚ましたんだね〜！！」

サンジが宴の輪を抜けてやってきた。

「きゃっ！！さ、サンジさん……はい、ご迷惑をおかけしました」

「いやいや……チョッパー達のために戦ってくれたんだろ？ありがとう」

「……………はい！！」

「そつだ、ツエル。お前に聞きたい事があつたんだ」

酒を飲みながら、ゾロが訊ねてきた。

「なんですか？」

「お前が戦った相手、マントラとか言う妙な力で動きを一步先読み

してきたらろう?」

「はい」

「チヨツパーが、お前はその何歩も先を読んでいるような動きだったと言つてたんだが……どう言う事だ?」

「それは我輩も興味がある」

「えつとですね……」

言い辛そうな、恥ずかしそうな表情を浮かべるツエル。

「私、戦闘になると途端に目と耳が異常によくなるみたいなんです……相手の骨や筋肉が発するわずかな音が聞こえるほど。それで、相手の動きがわかつたんです」

「骨や筋肉の音が……異常って言うレベルじゃないか? それ」

「あはは……自分でもそう思います」

「でも、その長所は弱点でもあるかも知れないわね」

今まで黙っていたロビンが言葉を挟んだ。ゾロとサンジはわからないような顔をしていた。

「ですね。場合によつては」

「どう言うことか説明してもらえないかな……ロビンちゃん。ツエルちゃん」

「耳が異常にいいということは、大きい音が。目が異常にいいということは、まぶしい光が直接ダメージになってしまうんです。他の人ではそうでないものも、敏感に反応してしまいますので」

「……なるほど」

「おお!? ツエル起きたのか!! ありがとな!! 踊ろう!!」

「踊ろうツエル!!」

「さ、さすがに遠慮させていただきたいな」と……」

「お前医者だろ……」

身体が本調子でないツエルはやんわりと辞退し、ニクニクと踊っている彼らを嬉しそうに眺めていた。

そして、夜は更けていくのであった。

第12話 話題は貧血娘（後書き）

《次回予告》

「うえええええん！！こわかったですううううう！！」

「我輩も断固拒否する」

「説明するから落ち着けエ！！」

「ど、どうしましょう……森へ入って行ってしまった」

「大人しく斧アッタスアル貝の餌食となれ！！」

「一緒にいて飽きないわ」

「……………不届き」

〈島に入った貧血娘〉

### 第13話 島に入った貧血娘（前書き）

K「Kと!!!」

T「ツエルの!!!」

K & T 『作中ゲリララジオ!!略してゲリララ!!』

K「さあ始まりました“楊貴妃”!!!と、その前にご報告があります!!!」

T「お、なんですか?」

K「“楊貴妃”の総アクセス数がなんと!!!2万pvを超えました!!!はい、はくしゅ!」

T「おお!!!おめでとございます!!!作者冥利につきますね!!!」

K「みなさんありがとうございます!!!これからも執筆がんばりますので、応援の程よろしくお願いします!!!」

T「よろしくおねがいますっ」

K「さて、ツエルちゃん」

T「どうしましたかKさん?」

K「この前第2.5話、設定上の貧血娘にツエルちゃんのイラストを貼ったじゃない?」

T「そういえばそうでしたね」

K「あれね、実は貼る前に友達に見せたんだよね」

T「あ、そうなんですか?」

K「うん。最初は何も言わないで見せて、その後に今書いている二次創作の主人公なんだよって言ったの」

T「はい、それでどうしたんですか?」

K「そしたらね、『え?これ主人公だったの?……なんて言うか、ONE PIECEっぽくない感じだね』って言われたんだ」

T「……………え？ど、どういう意味ですか？」  
K「つまり〜……………地味だとかあ〜」  
T「うっ（グサツ）」  
K「まあやっぱりたどり着くところは……………胸、だよな」  
T「うわああああああああああん！！」  
K「やっぱりA Aカップって深刻な問題だよな〜」  
T「人の気にしていること言っつて楽しいですかっ!？」  
K「楽しい」  
T「最低ですっ！！最低の人間がここにいますっ!!」  
K「いやあ照れるなあ……………/ / /」  
T「ほめてませんよっ!!」  
K「で、私気付いたわけです」  
T「なににですか？」  
K「服装を変えればいいのではないかと」  
T「なるほど!!ちなみにどんな感じにする気ですか？」  
K「えっと……………アラバスタでナミちゃんやビビちゃんが着ていたよ  
うなやつ」  
T「え……………つまりそれって……………」  
K「そ、踊り子のふく〜」  
T「い〜や〜で〜す〜!!」  
K「じゃあ妥協してミス・ファーズデーのあのカエルっぽい衣  
装？」  
T「今のままでいいですっ!!」  
K「そう？地味なのになあ〜」  
T「地味で結構です!!」  
K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読  
者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」  
T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!」  
K「メールアドレスは、k a k k e y - c o m e p k s p . j p p  
です。 を@に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってます!」

K&amp;mp:T『それでは、第13話どうぞ!』

### 第13話 島に入った貧血娘

天気は快晴。まさに洗濯日和と言っても過言ではない天気だった。メリー号は脱出チームのウソップ、ナミ、サンジ、ツエル、そしてガン・フォールとピエールを乗せて雲の川（ミルキー・ロード）をのろのろと進んでいた。全員看板にいたが、ツエル1人が船室のベツドでおとなしく横になっていた。ちなみに服装は万が一の時に備えて戦闘着だ。

「むう……………お洗濯……………お掃除……………」

チヨッパーやナミにおとなしく寝てるように指示され、頬を膨らませていた。せつかくの快晴なのに……………と。そして薬を飲み、輸血を始めるとすやすやと眠りに落ちていった。輸血も毎日やっているものだから、手馴れたものだった。

『パラパパラパパ〜!!』  
「きゃああああああつ!?!」

急な爆音で目が覚めたツエル。輸血も終わっていたので、針を腕から引っこ抜いて慌てて船室から飛び出す。

「ななな、何があつたんですか?!?!この音は何ですか?!?!」

「あ、ツエル!!」

「ナミさん ……!!サンジさんとウソップさん黒コゲじゃないですか?!?!で、敵襲ですか?!?!」

「ああもう!!説明するから落ち着けエツ!!」

爆音と、黒コゲになった2人を見てすっかり取り乱したツエルを、ナミは拳骨せつめいして落ち着かせた。そして、コニスとパガヤとアイサを紹介する。

「だいたい状況はわかりました」

頭にそびえ立つこぶを擦る。

「じゃあ、とりあえず私はお2人の手当てをしますので、ナミさんは島からの脱出をお願いします………ん、んんんん！！！」

2人を同時に持ち上げて船室へと運ぼうとするが……非力すぎて持ち上げることすらできない。

見かねたパガヤが手伝い、2人を船室へと運んだ。

「うう……ご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、では私は外に出る準備をしますので」

パガヤが出て行き、船室にはツエルとサンジとウソップだけになった。

「お2人とも………しっかりしてくださいね………」

どこか手馴れた手つきで2人の身体を拭き、包帯を巻き、頭にタオルを乗せる。

全ての作業を終えたところで、船室から出て、表の様子を確認しに行った。看板に行ったツエルが見たのは、雲の海へと飛び込むアイサとそれを追って飛び込んだナミだった。

「え？ちよっ……どういう状況ですか！？」  
「ああ、ツエルさん。今、アイサさんが皆を助けると言つてアツパーヤードに行こうとして、それをナミさんが止めに入ったところで」  
「す」

下に目を向けると、ウェイバーに乗って言い合いをしているナミとアイサの姿があった。その2人を見て、何事もなかったのだとほつと一息ついて船の後方を見やる。すると

「あ、あわわわわわわ、だだだっだ、だいだいだい……」

「？……どうしましたかツエルさん」

「大蛇あああああっ！！」

「ええ！？」

巨木のような太さの大蛇がそこにいた。しかもちよつと機嫌が悪い。

「ジュララララララララ！！」

『きゃあああああっ！！』

「何なのこのデカさ！！」

「ウガ、ジュラララララララア~~~~！！」

「イヤアアアアアア！！」

ナミはウェイバーのアクセルを踏む。勢いよくウェイバーが進んだその先は……

「ああっ！！ナミさんそっちは森の中ですよっ！！」

「ナミさん！！」

「ど、どうしましょう……森へ入って行ってしまった」

ナミはウェイバーでアイサを乗せ、森の奥へ入ってしまった。大蛇もその後が続いていく。

「し、仕方ありません……パガヤさん。コニスさん。サンジさんたちをお願いします」

「え？ど、どうするんですか？」

ツエルは一旦船室へと入っていった。すぐに出てきたツエルの右手には、鞘に入ったサーブルがあった。

「ナミさんたちを探してきます！！」

「そ、そんな！！危険で……！！」

パガヤの制止する声も聞かず、ジャンプしてアッパーヤードまで跳んだ。着地すると振り返って2人を見る。

「ご心配ありがとうございます。でも、私は大丈夫ですので……もし、少し経つても私が戻ってこなかったら、北東の海岸まで船を運んでください。お願いします」

「あ、ツエルさん！？ツエルさーん！！」

ツエルは森の奥へと、ナミを探しに走っていった。

そして、十数分後。

『メ~~~~ー！！』

「はあ……はあ……もう何なんですかあゝ!!」

神兵達（3人）の標的となっていた。ナミを追うところではなかった。

ツエルの実力なら大したことない相手だが、キレてないツエルは暴力なんて振るいたくないか弱い女性なのだ。だから必死に逃げた。

「大人しく斧<sup>アックス</sup>貝<sup>ノミ</sup>の餌食となれ!!」

「メゝゝ!!」

「はあ……はあ……いゝやゝですゝ……!!」

「くっ……なんて逃げ足の速い青海人なんだ……このままでは神の社へ行かせてしまう」

スケートタイプのウェイバーを神兵は使っているが、ツエルとの距離は徐々に開きつつあった。

「はっ、そうです。隠ればいいんじゃないですかっ……!!」

ちらりと後ろを向けば神兵達との距離は結構あった。しつこく追ってくるが。ツエルは両側に巨木があるところを通り過ぎたところで、“ボンナ”を使って超高速で姿をくらませた。神兵達も急に姿が見えなくなつたツエルに戸惑い、辺りを探し出すが見つかからない。それもそうだ。ツエルは彼らの発する音が全て聞こえているので、見事彼らから逃げ果せることができた。

さて、そこで問題が起きた。

「ナミはどこでしょう?」

最初はナミ達を通つたと思われるルートを辿っていたが、途中で

ら神兵に見つかり必死で逃げるハメとなったので、完全に見失っていた。

「仕方ありません……あのおっきい蔓を目指しましょう」

ジャイアントジャック  
巨大豆蔓を目指し、歩き始めた。

ジャイアントジャック  
巨大豆蔓周辺へ到着したツエルは迷っていた。道にはない。上に行くか、下に行くかだ。上からは荒々しい音が聞こえ、下からは何やら話しているような声が聞こえていた。で、結局出した結論は、

「上は怖いですし……ここは下に行きましょう!」

意気地ない。さて、ここで問題が発生した。どうやって下に行くかだ。下は島雲のようなもので覆われている。降りられそうな場所は見つからない。……となれば、

「ガラじゃありませんが……ちょっと強硬手段ですね」

ふう、と1つ息を吐き、右手に持っている鞘からサーブルを抜く。目をキツと鋭くさせると一気に垂直跳びする。

「“鷲の背距（イーグル＝ブリーク）”!」

急降下すると同時にサーブルを突き出す。生み出された衝撃波が島雲を破壊し、ついに遺跡までツエルは降り立った。

「ここは遺跡、ですかね……………ああ！！ロビンさん！！」

後ろを向くと、ロビンとツエルの知らない誰かがいた。ツエルはロビンに抱きつく。

「うえええええん！！こわかったですうううう！！」

「ツエル、あなたどうしてここに？」

「ヤハハハハ……………どうやら青海人は優秀な人間が多いようだ。あっさりここを見つける人間がまたもや現れるとは」

「?……………ロビンさん。この方は？」

「神、だそうよ」

「神さまですかっ！！ははー神さま。どうか私の記憶が戻りますように……………」

「……………何なんだこの娘は？」

「私も理解しかねるわ」

いきなり両手を合わせて神を拜み始めたツエルを見て、2人は対応に非常に困っていた。

「ちなみに昨日あなたが戦った神官の親玉よ」

「出ましたね諸悪のこんげんめっ！！」

「……………面白い娘だな」

「一緒にいて飽きないわ」

「いや、そう言うことではない。そうか、この娘が昨日シユラと戦り合った女か……………聞けば、心綱が効かないそうじゃないか」

「な、なんですか？」

じろじろと見てくるエネルに警戒心を抱き、後ずさる。だが、エネルは突然右手を上に向けた。

「こんなことしている間に……上では決着がついたようだな」

「……………え？」

「サンゴ稲妻”！！」

「何を！！（“自然系　ロギア”の能力者？）」

「なにしてるんですかっ！！」

「ヤハハハハ！！招待したのさ貴様らの仲間らを！！この“シャンドラ”へ！！」

ジャイアントジャック

巨大豆蔓の周辺にあった島雲はエネルの力によって全て破壊され、その上にあつた遺跡とそこにいたゾロ、ワイパー、大蛇が落ちてくる。そして、大蛇の腹の中にいたナミと、ガン・フォールも。

エネルが大蛇を倒すと、玉雲に乗って全員と向き合った。そして、この戦いが彼にとってのゲームだという。3時間以内に、島にいる81人の中で一体何人が無事に立っていられるか、と言う。

「あと3分でその3時間が経つ」

そして今無事に立っているのはエネル、ゾロ、ロビン、ガン・フォール、ワイパー、ツエル、そしてナミ。つまり彼にとって2人多いのだ。

「さて、誰が消えてくれる？そっちで消し合うか、それとも私が手を下そうか……………」

「……………」

しばし沈黙が流れる。やがて、ゾロがツエルとロビンに訊ねた。

「……お前らどうだ？」

「私はイヤよ」

「私もいやですよっ！……」

「俺もだよ」

「俺もごめんだな」

「我輩も断固拒否する」

そして結論は………

『お前（あなたが）消えろ（消えてください）』

全員一致（ナミは無回答）。エネルギーに武器を向けた。

「………不届き」

### 第13話 島に入った貧血娘（後書き）

#### 《次回予告》

「雰囲気がまるで違う……」

「この世に神はいる。………私だ」

「ジジイ……」

「おそらく“ゴロゴロの実”」

「変な騎士……」

「貴様悪魔かア……」

「それでも、自分は神だと言い張りますか？」

（神VS貧血娘）

## 第14話 神VS貧血娘（前書き）

K「Kと!!」

T「ツエルの!!」

K & T 『作中ゲリララジオ!!略してゲリララ!!』

K「さあ始まりました“楊貴妃”!!今回はついにツエルちゃんとエネルの戦闘です!!」

T「争いのない……平和な世界に生（行）きたいです……」

K「今日はお便りの紹介をしましょう」

T「了解ですつ!!」

K「ええつと、北の海からお越しの“戦うコックさん”からのお便りですね」

T「たぶんあの人ですね」

K「Kさん、ツエルちゃん。こんばんは”こんばんは!!」

T「こんばんは」

K「実はツエルちゃんに聞きたいことがあつて投稿しました”だつて。なんだろうね”」

T「なんでしよう？」

K「第13話で、ツエルちゃんは黒コゲになった俺達の身体を拭き、包帯を巻いてくれたみたいだね”」

T「はい。そうでしたね」

K「“身体を拭くつてことはもしかして……あゝんなどころもオホホホ”!!”つてええええええ!!”」

T「う、うそですつ!!捏造ですつ!!たしか上半身だけだったはずですつ!!」

K「かーさんはあなたをそんな子に育てた覚えはありません!!」

T「誰があなたの娘ですかつ!!」

K「KはKASANのKよ!！」

T「気持ちわるいのでやめてください!!!ってなんですかその眼はっ!?!？」

K「いやあだつてさ……今まで純粹無垢で真つ白な娘をイメージして書いてたのにこんな仕打ちされたらさ……なんて言うか……ねえ」

T「人の話を聞いてくださいようっ!！」

K「さて、お時間もなくなってきました」

T「私を変態のままにして終わらせないでくださいっ!!!！」

K「ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ……」

K「メールアドレスは、kakkey-com epksp.jp

です。を@に変えてくださいね。たくさんメッセージ待ってますっ!!!！」

K & T『それでは、第14話どうぞ!!!』

## 第14話 神VS貧血娘

ガン・フォールがエネルギーに目的を聞かせると言うと、エネルギーはすぐに答えた。ようするに、この国と住民を消し去り、自分（神）の在るべき場所へ行くというものだった。そして、エネルギーはガン・フォールの部下であった神隊の人々も手にかけてたという。その話を聞いて、ガン・フォールとツエルは怒っていた。

「別に好きで手にかけてたわけではない。私のこれからの目的を話したら……ヤハハハハ。血相かえて挑んできたのだ」

「……………エンジェル島に、家族のおる者達だぞ……………」

「そうだな、早く家族も葬ってやらねば」

「貴様悪魔かア！！」

耐え切れなくなったガン・フォールはエネルギーに斬りかかるが、

「“2000万V放電”<sup>ヴァーリー</sup>”！！”

エネルギーの電撃にやられた。

「変な騎士！！」

「ジジイ……………」

「ガン・フォールさん！！」

「ガン・フォール……………この世に神はいる。……………私だ」

倒れるガン・フォールに、エネルギーは見下すような眼で言い放った。

「悪魔の実か……………」

「おそらく“ゴロゴロの実”……………数ある能力の中でも、“無敵”と

謳われる能力の1つ……雷の力」

「雷……！？そんな人間がかなうわけが  
ツエル！？」  
「うあああああああつ！！」

ガン・フォールを見ていたためナミ達に背を向けていたエネルに、ツエルはサーブルを鞘から抜いて突撃していた。だが、雷のエネルにただの突きが効果あるわけがなく、あっさり通過するだけだった。

「ヤハハハハ……今度は貴様か？……どれ、シユラを追い込んだ力を見せてみる」

エネルの自分の存在を思い上げる態度、恩人を攻撃された悔しさ、そして……彼の罪なき人々を虫けらのように殺す計画を聞き、完全にキレていた。そして……

「……………キッ」

「ん？（な、なんだ？手の振るえが止まらない……………）」

「ねえゾロ……あの子……………」

「あ、ああ。俺も気付いた」

「背が……伸びた？」

「それに、霧囲気がまるで違う……………」

麦わら海賊団の中でチョッパーの次に背が低かったはずだが、何故か今はゾロくらいの身長に見え、霧囲気も全然違う。何かこう……赤黒いような感じだった。彼女の身長の変化は、その豹変した霧囲気に気圧された錯覚なのだろうか？

「……………スッ」

無言のままサーブルを構え、そして突き出した。

「 幻獣の一本角（ユニ＝ホーン） ” …… 」

「 ヤハハ… 私に攻撃が通じるわけが …… 」

『 何イ！！ 』

ツエルの放った衝撃波がエネルギーを吹き飛ばした。見ていたゾロ達は一斉に声を上げた。

「 くっ… な、何が …… 」

予想外の出来事に混乱した様子で起き上がるエネルギーだったが、ツエルがすぐそこまで迫っており、しかも攻撃の構えをしていた。

「 猪の湾曲牙（ボア＝タスク） ” …… 」

エネルギーは一気に打ち上げられ、

「 鷲の背距（イーグル＝ブリーク） ” …… 」

上がった先で待ち伏せていたツエルに突き落とされ、

「 幻獣の一本角（ユニ＝ホーン） ” …… 」 “ レヴュー 大衆演劇：幻の三拍子（ヴィジョン＝ワルツ） ” …… 」

そして、地面に叩きつけられて身体が跳ね上がったところを吹き飛ばされた。

エネルギーは意識を手放しこそしなかったが、吐血量はなかなかのもので、あまりにも大きすぎる衝撃にフラフラし、膝をついていた。

ツエルはそんな彼を見下ろしながらゆっくりと近づいていく。

「神、神、神、神、神、神、神、神、神……この国の長の称号である神！！何故あなたは国を……国民を大事にしようとは思わなんでしょうか！！この国の長であるなら……神であるなら、何故！？民がいなければ長は成り立たないことに何故気がつきませんか！？」「私は人ではない……神だ！！」

「ただの人に見下ろされている神がいますかっ！！神とは尊いもの……絶対不可侵であり絶対不可視なものです！！見えるものに真実はありません！！あなたは自分の欲に溺れた、病弱な女1人に見下される愚かな人間です！！」「神を愚弄する気か！！」

エネルギーの太鼓が形を変え、鳥になった。

「3000万V雷鳥」！！」

「ボンナ」！！」

だが、それをツエルはかわす。そして、エネルギーの横まで移動したツエルは、

「幻獣の一本角（ユニ＝ホーン）」！！」

再びエネルギーを吹き飛ばした。

「………これでも、自分は神だと言い張りますか？」「くっ………ん？……ヤハハハハ！！」

悔しそうに顔をゆがめたエネルギーだったが、途中で何かに気付いたかのように笑いを浮かべ始めた。

「……どうしましたか？気でも狂いましたか」

「いやなに……くくっ、人間とは……他人を見捨てないのだったな？」

「そうですが……！！」

「ヤハハハハ！もう遅い！！」

エネルギーはすぐさま移動すると、倒れているガン・フォールの胸に手を当てる。

「娘！！ガン・フォールはまだかろうじて生きているが……もう一度電流を流したらどうなるかな!?」

「くっ……カラアンッ」

「ヤハハハハハハ！迅速且つ賢い判断だな」

ツエルはサーブルを地面に落とす。エネルギーは勝ち誇った顔をしていた。

「ヤハハ……動くなよ。“6000万V<sup>ジャムフル</sup>雷龍”！！」

エネルギーの太鼓が龍の形になり、ツエルを飲み込んだ。

「きゃああああああああ！！」

『ツエル！！』

「……ほう、まだ立っでいられるか」

「あ、う……あなた、は……かみ、なんかじゃ……ない」

身体が電熱で焼け焦げてても、ツエルは立って主張し続ける。

「口の減らない娘だ……消え去るがいい！！“神の裁き（エル・ト

「ル」"!!!"

「王や神は……もっと、優しくあるべきで

『ツエルウウウウウ!!』」

言い終わる前に、エネルの攻撃によって完全にツエルの意識は落ちた。彼女は地面にできた大きな窪みの中で横たわっていた。

## 第14話 神VS貧血娘（後書き）

### 《次回予告》

「おつもう朝か？」

「ばかつ！！声がでかい！！」

「飽きる事無く続けておる」

「ウソツプが殴った~~~~！！」

「ビツ！！と出してブワツ！！となるから敵がバーンツ！！と吹き飛ぶんですよ！！」

『黄金！！黄金！！黄金！！』

「へそ！！」

〜島の歌声と貧血娘〜

第15話 島の歌声と貧血娘（前書き）

K「Kと!?!」

T「ツエルの!?!」

K & T「作中ゲリララジオ!?!略してゲリララ!?!」

K「さあ始まりました“楊貴妃”!?!今回の話しでなんと!?!」

T「なんと?」

K「空島編しゅくりよ!?!」

T「早くないですか!?!」

K「仕方ないじゃん!?!だってツエルちゃん要所要所で氣イ失ってるんだもん!?!」

T「それってKさんの策略ですよね!?!私のせいじゃないですよね!?!」

K「あ、そう言えばさ」

T「また無視ですか……なんですか?」

K「一昨日2月3日って節分だったじゃない?」

T「あ、そう言えばそうでしたね」

K「ツエルちゃんは豆まきとかってした記憶ある?」

T「うん……すみません、ないですね」

K「あ、そうなの?」

T「はい。Kさんはあるんですか?」

K「あるんだけど……私はもっぱら鬼役だったね」

T「性格が悪いからですか?」

K「そんなこと言うのはこの口かナ……?」

T「い、いひゃいれふ!?!ごえんあふあい!?!」

K「なんで豆まきするかくらいは知ってるよね?」

T「鬼を追い払うんですよね?」

K「うんそう。これは私の友達Tくんが体験したことなんだけど、  
一昨日の節分の時に、家で豆まきしたんだって」

T「ふんふん、それでどうしたんですか？」

K「その友達の弟Oくんが2階にまいてくるって言ったんだって。  
それで、夜寝ようとTくんが自分の部屋に入ったら……」

T「入ったら？」

K「ベッドに大量の豆がまかれてたんだって」

T「……………悲しすぎますね」

K「ちなみにこれは私が指示した」

T「やっぱり性格悪いじゃないですかっ!!」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読  
者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!」

K「メールアドレスは、kakkey-com p k s p : j p  
です。 @に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってまゝす!!」

K & a m p ; T 『 それでは、第13話どうぞ!!』

1 1 / 2 / 4

第2・5話 設定上の貧血娘にて、更新。

## 第15話 島の歌声と貧血娘

「scene ??」

「マインハルトさん」

「おや、どうしましたか？ツエル殿」

「殿は取ってくださいっていつも言っているのに……」

「それは無理な相談ですね。これでも妥協しているのですから」

「もう……マインハルトさん」

「はい」

「私、1回故郷へ帰ることになりました」

「……何をなさる気です？」

「別にやましいことなんてありませんよ。孤児院のお手伝いでもしようかと思ひまして」

「しかし……よく許可が下りましたね」

「ええ。なにしろ……事情が事情ですし」

「そう、ですね。……無茶だけはなさらないで下さい」

「ふふ……わかってますよ」

「scene スカイピア」

「コニスちゃん……ツエルちゃんの様子はどうだ？」

「苦しそうな表情も、もうありません。静かに眠っていますよ」

「そっか……よかったあ」

心配そうにしていた顔が少し緩んだサンジ。

スカイピアは神の呪縛と、長年の争いから開放された。そして…

…雲の下、クリケット達の長い長い戦いも終わった。彼ら……麦わら海賊団によって。

エネルギーの戦いで、ツエルはかなりの重症だった。ただでさえ身体が弱いと言うのにエネルギーから大量の電撃を食らってしまったのだから。だが、やはり彼女の回復力には眼を見張るモノがあった。今はテントの中で静かに寝ている。

そして外では……

「宴だ〜〜!!」

青海人、シャンディア、空の者……そんな隔たりなど最初から存在していなかったかのように、全員が隣りの人と手を取り、踊り、飲み比べ、楽しんでいた。呪縛から開放された今、誰もが心から楽しんでいた。

「う、う……ん……」

「!!　　ツエルさん!! 気がつきましたか!？」

「あ……コニスさん……ここは？」

「“シャンドラ”の遺跡ですよ。怪我人は全員ここで手当てをしています。ほら、あなたの隣りにも」

ツエルが横に目をやると、そこにはワイパーが座っていた。

「あ……あの時の戦士さん」

「起きたか……小娘」

「私の名前はツエルです……それよりも、エネルギーは？」

「麦わらが……お前らの船長が見事にぶっ飛ばしてくれたよ」

「ふふ、さすがルフィさんです」

そっけないが、敵意のない感じの声でワイパーは教えてくれた。ツエルはそれを聞き、嬉しそうに笑っている。

「お前にも」

「え？」

「お前にも世話になったな……正直お前がエネルギーを圧倒していた時、いい気味だと思っていた」

「なんだか複雑ですね」

「おお、ツエル。目が覚めたか」

「え？　　……ガン・フォールさん!!」

急に名前を呼ばれ、ソツチの方に目をやると元気そうなガン・フォールがいたので驚いた声を上げる。

「大丈夫だったんですね？よかったあ……」

「オレンジの娘に聞かせてもらった。お主、エネルギーにやられた我輩を見て、怒ってくれたようだな」

「結果がこれですけどね」

「いや……行動を起こしてくれたことに感謝をしたいのだ。……ありがとう」

「……どういたしまして」

にっこりと微笑み返す。そして、外に目をやってワイパーとガン・フォールに目をやると苦笑いを浮かべる。

「また宴ですか？」

「……ああ」

「飽きる事無く続けておる」

困ったように、だがどこか嬉しそうに2人は言葉を返す。

そして宴は連日続いた。

楽しみ疲れ、みんなが寝静まった頃、ルフィが動きを見せた。

「（おいナミ。みんなを起こせ）」

「ん……なに？」

「（黄金奪って逃げるぞ……）」

「（え！？黄金があるの！？）」

「ばかつ！！声がでかい！！」

「あんたのほうがかいわよー！！」

「うるせエな！！寝れやしねエー！！」

「グへ~~~~~！！！！」

それを合図に全員が起きだした。

「おっもう朝か？」

「でかいつていうお前の声がでけエだろー！！」

「ナミさんおはよー！！あれ！？朝じゃねー！！」

「ウソツプが殴った~~~~~！！」

「あ、あの静かにしないとみなさん起きちゃいますよう……」

「なあに？」

「本当に宴が好きだな青海人は……」

空の人達に呆れられていた。

「じゃ、そういうわけだ。滅多に来れねえ空島だ。思い残すことのないように!」

翌朝、それぞれ思い思いに過ぎ去っていた。

ウソップは空の人達と貝ダイアルと青海の物資の物々交換交渉。ロビンは“歴史の本文”ボーンケリフを見に島の端に。ルフィ・サンジ・ナミ・チョッパーは大蛇の腹の中へ黄金を取りに。そしてツエルとゾロは……

「ツエル、俺に剣を教えてください」

「……………正気ですか？」

遺跡の中で向かい合っていた。

「俺はいたってマジメなんだが？」

「え……………でもお……………」

「エネルギーとの戦いではつきりしたことがある。それはお前の実力は少なくとも俺よりは上だと言ったことだ」

「そ、そんなこと……………」

「現にお前はエネルギーを圧倒していた……………あそこで人質をとられなければルフィではなくお前がエネルギーを倒していたはずだ……………違うか？」

「……………でも、なにを教えろというのですか？」

「あの不思議な力をどうやって出しているのか、だ」

「不思議な力……………？」

「エネルギーを吹っ飛ばしていたらどう？」

「ああ、“幻獣の一本角（ユニ＝ホーン）”とかですか」

「そうそれ。あれは俺にもできないのか？」

「さあ……どうでしょう？」

「ちなみにどうやってやっているのか説明してみる」

「説明ですか……」

ツエルはサーブルを抜くと、ゆっくりとゾロに左半身を向けて構えた。

「この状態から普通に、こう、突き出すんです」

「それはわかってる……何かこう、原理とかないのか？」

「わかっていることは、音速を超えた突きは空を裂き、衝撃波を生み出すんです。打撃とも斬撃とも違い、中から破壊を促す力です」

「お……音速？」

「はい。音速です」

「まあいい、ちょっとやってみるか……」

ツエルの指導の下、ゾロは訓練を開始してみる。だが……

「違いますっ！！もっところ……ビッ！！と出してブワッ！！となるから敵がバーンッ！！と吹き飛ぶんですよ！！なんでわからないんですかっ！！」

「わかるかアツ！！」

開始3分で終わった。

その後、ゾロに呆れられて納得がいかない顔をしながらも、宴の後始末をシャンディアと空の女性達と一緒にした後、先にゴーイングメリー号に行って出航の準備と掃除をすることにした。

そして、黄金を大量に持って帰ってきたルフィ達が乗ると、白海まで降りる。

「黄金！！黄金！！黄金！！」

「ついに俺たちは大金持ちだぞ！！でつつつけエ銅像買わねエか！？かつこいいぞおめエ」

「バカ言え何すんだそれで！？ここは大砲を増やすべきだ！！10門買おう！！」

「ナミさん！！俺は鍵つき冷蔵庫が欲しい！！」

「おれなア！！おれはなア！！本が買って欲しいんだ！！他の国の医学の本が読みてエんだ！！」

「酒」

それぞれが欲しいものを口にする中、ツェルはニコニコしながらその様子を見ていた。ロビンが話しかけてくる。

「あなたは何か欲しいものはないの？」

「私は特にありません……そう言うロビンさんは？」

「ふふっ私も同じよ」

とりあえずお宝の山分けは青海に降りてからとなった。そして、メリー号は“雲の果て（クラウド・エンド）”へとたどり着き、コニスやパガヤともお別れになる。

「ではみなさん！！私達はこちらまでですので！！」

「お元気で！！みなさん！！」

「送ってくれてありがとう！！」

「何から何までありがとう！！」

それぞれが2人に別れを告げる。

「さて船長<sup>キャプテン</sup>。次の島への記録もバツチリ！！」

「んんそうだ！！ここ降りたらまた、新しい冒険が始まるんだ！！」



..... 次の冒険を夢見て。

第15話 島の歌声と貧血娘（後書き）

《次回予告》

「Mr. パーティ!?」

「君たちだけ逃げようだなんてズルイヨッ!」

「なな何!? 何が起こったの!」

「そ、そんな滅相もないです!」

「もはや洗脳に近いわね」

「望むところだ!」

「……さあ、勉強の時間だ」

〈番外編 珍解答と貧血娘〉

第15・5話 番外編珍解答と貧血娘（前書き）

K「Kと!!!」

T「ツエルの!!!」

K & T 『作中ゲリララジオ!!略してゲリララ!!』

K「さあ始まりました“楊貴妃”!!今回は番外編です!!」

T「前回の二の舞にはならないですよね?」

K「その辺は大丈夫ですつ!!楽しんでください!!」

T「それならよかったです」

K「ところでツエルちゃん」

T「なんですかKさん?」

K「前回の話で、特に欲しいものはないって言ってたよね?」

T「そうでしたね。それがどうしましたか?」

K「もし、“1つだけ願いを叶えることができたなら”どうします?」

T「どうしましたか急に?」

K「べつ、別に7つ全部集めたら願いが叶うボールの話を見たから聞いたわけじゃないんだからねツノノ」

T「……………本当は?」

K「みちやったく、テヘツ」

T「……………」

K「ごめんなさい謝るからそんなかわいそうなものを見る眼で見ないで……………」

T「もし、1つだけ願いが叶ったら、でしたっけ?」

K「うん。そう」

T「やっぱり記憶を早く取り戻したいですね」

K「あ、そっか。早く戻るといいね」

T「はい。ところでKさんは何を願うんですか?(まあ、今までの

やりとりで性格が悪いつてわかってますから大体予想つきますけど

……………」

K「なんか失礼なこと考えてない？」

T「そ、そんなことありませんよ!？」

K「まあいいや。私の願いはですね」

T「願いは？」

K「今、砂漠のどこかで飢えている人全員を3分間だけ呼び寄せて、食べ物と飲み物を振舞ってあげたいですね」

T「い、意外ですっ!！」

K「え？」

T「Kさんのことだから世界征服とかいうかと思ってました」

K「……そう、そんなに出番を減らして欲しいんだね」

T「うそですうそですっ!！ごめんなさいっ!！」

K「ちなみに振舞うのは……」

T「振舞うのは？」

K「きな粉餅と沸点ギリギリアツアツの生姜湯……(ニヤリ 黒い笑み)」

T「鬼っ!！悪魔っ!！」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララフでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!！」

K「メールアドレスは、kakkey-comepksp.jp  
です。@に変えてくださいね」

T「たくさんメッセージ待ってます!！」

K& amp; T『それでは第15.5話、どうぞ!！」』

11/02/06

第2.5話 設定上の貧血娘にて、更新。

第15・5話 番外編珍解答と貧血娘

「みなさん！！ちよつときてくださいー！！」

後ろの甲板で洗濯物を畳んでいたツェルの声が響いた。

今、麦わら海賊団は次の島へ向けて出航してから数日経ったある  
昼下がり。それぞれが思い思いに過ごしていたところだった。

「どうしたどうした！！」

「あ、あそこ……」

ツェルが指をさす場所はすぐ近くの海面。そこには……木にしが  
みついている人間がいた。大急ぎで救出するルフィ達であったが、  
どこか既視感デジャヴを感じてならなかった。

「scene ?????」

「オヤ？あれハ……………」

小船の上で双眼鏡をのぞいていた男が、嬉しそうな声を上げる。  
ニイツと口角を上げると、船の進路を変え始めた。

「よっシ！！前回のリベンジだネッ！！」

「scene メリー号」

「いやはや。助けて頂きまことにありがとうございます。……私はアンスと申します」

「あ、ご丁寧にどうも。私はツエルと申します」

「先日の嵐で船が難破してしまいましたね。このケース以外全て流されてしまい、死を覚悟していたのですが……貴方達は命の恩人だ」

「いえいえ、手遅れにならなくてよかったです」

引き上げたのは見た目30代の男だった。その男はインテリそうなトンガリ眼鏡にスーツと言う見るからにマジメそうな感じの人間で、正直寄りかたかったのだ。ツエルはそんなことなさそうだったので、とりあえず全てツエルに任せることにしていた。今2人は甲板にいる。

「それにしても」

男はメリー号の中を見回していく。

「ツギ八ギの修理でボロボロですが……掃除が行き届いていて、居心地のいい船ですね」

「ふふ、ありがとうございます」

「この船はみなさんで掃除なさっているのですか？」

「いえ、私お掃除が大好きなので……私が勝手にやらせていただいているんです」

「ほう、これを貴女が1人で……いやいや、今時見上げた若者だ」

「そ、そんな滅相もないです!!」

「謙遜なさらずに。……私の弟にも見習わせたいくらいです」

「弟さんがいらっしやるのですか?」

「ええ、真面目にやれば出来るヤツなのですが……なにしろ無類の遊び好きでね。今頃どこをほっつき歩いているのやら……おっと失礼。つい愚痴を言ってしまった」

「気になさらないでください。……弟さんとは仲がよろしいのですか?」

「あの子……ああいう対応上手いわね」

初対面なはずの2人が丁寧ながらも話が弾んでいるのを見て、一同は驚いていた。

そこへ、急な来訪客が現れる。

「オオ~~~~イツ!!ルフィ達~~~~ツ!!」

何事かと海のほうを向くと、見覚えのある人物が乗った小船が向ってきた。その人物とは……

『Mr.パーティ!?』

「いや〜お久しぶりだネツ!!元気だつタ?」

ニツと笑いながら小船をメリー号と無許可に繋ぎ始めるMr.パーティ。そして、メリー号に飛び乗った。

「奇遇だネツ!!」

「テメエまったくだらしないゲームをやらせに来たんじゃねエだろうな!?!」

「くだらないとは心外だネツ!!今回持ってきたゲームは  
「ガッド!!こんなところにいたのか!!」

「……………？」

ギギギギ、と言う効果音と共に、首が曲げられる。その先には、先ほどルフィ達が引き上げたアンス。

「げゲツ！！にいさん！！」

『にいさん！？』

「え？じゃあ先ほどアンスさんが仰っていた弟さんって…………」

「そう、コイツですよツエルさん。…………皆さんこの愚弟と知り合いだったのですか？」

「ええっと…………なんて言いましょうか……………」

『コイツの被害者だ』（ゾロ・サンジ）

「ちよット！！その言い方はヒドイヨツ！！」

「またお前は…………人様に迷惑をかけていたのか……………」

「ち、違つヨにいさん！！助けて貰ったお礼にゲームを教えてあげただけだヨ！！」

「そうか、ゲーム…………か。…………お前には私の存在を思い出させた方がよさそうだな」

「えエ！？い、イヤダ！！にいさんの“勉強教室：（首なんか）ぶらりタツプリア4時間コース”だけはイヤダア！！」

頭を抱えて悶絶するMr. パーティ。すぐく中身が気になる勉強教室だった。

「なに、慌てるな…………お前が私のテストで無事合格点を取ることが出来たら免除してやる」

「そ、そんなの無理に決まっテ…………！！そ、そうダ！！にいさん！！ルフィ達も一緒に受けさせてヨ！！にいさんの知識を分けてあげれバ！？」

「な、なに言つてやがンだてめエ！！」

「そ、そーよー！私達には受ける義務がないわー！」

「そうだな……うむ、皆さんも一緒にどうですか？コイツの遊びなんかよりも、ずっと役に立つと思えますが？」

「断固拒否するー！」

「絶対にイヤー！」

「君たちだけ逃げようだなんてズルイヨツー！よーし、じゃあこはじゃんけんで決めよう。ルフィーー！ボクが勝ったら君たち全員大人しくテストを受けろー！」

「望むところだー！」

『望むなツー！』

『じゃーんけーん』

「それでは、これからテストを始めます」

メリー号の船室にて、全員が机の前に座らされ、目の前には問題用紙が置いてあった。ロビン、ツェルはいつも通りだったが、それ以外は凄い落胆っぷりだった。

「カンニング等の不正行為は即失格。私の勉強教室を受けてもらいます。ちなみに30点以下の人間も同じ扱いです。正しく名前を書けていないものは0点です。では……始めっー！」

注)このテストでは、作者の一身上の都合により、公用文字は仮名・漢字としています。その辺りが原作と違うので、ご理解をお願いします。

第 一 問 ( 国 語 )

次に述べる慣用句に足りないところを補いなさい。もしくは意味を答えなさい。

？ 一 ( ) の 長

意味：他の人よりも、少しだけよく知っていて、上手に出来ること  
？ 顎で人を使う

意味：( ) ( )

ツエルの答え

『 ？ 一 ( 日 ) の 長

？ 威張った態度で人を使う』

アンスのコメント

正解です。やはりしっかりしている人は違いますね。

ロロノア・ゾロの答え

『 ？ 一 ( 族 ) の 長』

アンスのコメント

確かにそれっぽいですが、違います。あと、勝手に読み仮名を加えないように。



『?じいちゃんに無理やり変な服を着させられること』

アンスのコメント

急に字が力強く……………? 一体お祖父さんと何があったのですか?

サンジ、ゾロの答え

『?勝って(敵)の(首)を締めよ』

アンスのコメント

君達は鬼ですか。

第 一 問 ( 社会科 )

北の海で取れる、美しい球状体を作るため特別天然記念物に指定されている淡水性の緑藻の一種の名称を答えよ

ツエルの答え

『マリモ』

アンスのコメント

正解です。

ロロノア・ゾロの答え

『答えたくない』

アンスのコメント

わからないならまだしも、答えたくないとは……よっぽど私の授業を受けたいようですね。

モンキー・D・ルフィ、サンジ、ウソップ、トニー・トニー・チョッパーの答え

『ゾロ』

アンスのコメント

皆で一緒に謝りに行きましょう。

第 一 問 ( 理科 )

人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい。

サンジの答え

『 脂質、炭水化物、たんぱく質、ビタミン、ミネラル 』

アンスのコメント

さすがコックをしているだけありますね。 正解です。

モンキー・D・ルフィの答え

『 鶏肉、豚肉、牛肉、ワニ肉、チョッパー 』

アンスのコメント

栄養素関係ないじゃないですか。あと、最後のはトナカイ肉と言いたいのでしょうか？

第 一 問 ( 英 語 )

次の英単語を日本語訳、日本語を英単語にしなさい。

? October

? かぼちゃ

ナミの答え

『? 10月

? pumpkin

アンスのコメント

正解です。

ウソップの答え

『? 新種のタコ

アンスのコメント

こんなところまでウソを言わないで下さい。

サンジの答え

『? pumpkin

アンスのコメント

絶対にわかっててワザとやってますね?おちよくるのもいい加減にしなさい。

「ふむ、成績優秀者とはニコ・ロビンさん100点とツエルさん97点。素晴らしい出来ですね」

2人を賞賛するように拍手が送られた。ツエルは恥ずかしそうにしている、ロビンは笑顔で返している。軟らかい声だったアンスだったが、声がガラリと変わる。

「そして、30点以下の人間は……………」

一同の喉がゴクツと鳴る。

タツプリ溜めた後、彼はその名前を言う。

「ウソツプ25点!! ロロノア・ゾロ10点!! モンキー・D・ルフィ5点!! ガッド!! 貴様は0点だこの愚か者め!!」

点数を暴露され、次々と崩れていった。だが、ガッド……………Mr・パーティーは反論する。

「ちょっと待ってヨにいさん!! 流石に0点はないでショ!? 偽装したんじゃないノ!？」

「貴様の耳はただの通気口か? 私はテストを始める前にちゃんと言っただけだ。『正しく名前を書いていないものは0点』だと」

そう言うと、アンスはMr・パーティーに答案を見せ付ける。

「……………お前の正しい名前は“Mr・パーティー”ではなく“ガッド”だろうこのバカが!! その時点で採点すらしておらん!!」



「もはや洗脳に近いわね」

もの凄く礼儀正しくなっていたルフィ達を見て、騒然としていた。そんなことも気にせず、ルフィ達は別室でアンスに渡された問題集を黙々とこなしていたとき。

ちなみに、彼らは5日間もとに戻らなかったそうだ。

第15・5話 番外編珍解答と貧血娘（後書き）

《次回予告》

『アンタ（お前）は十分強いでしょ（だろ）！！』

「かつこいいですよ。チョッパーさん」

「これだけ見えすいてりゃ危険もなにもねェだろ」

『可憐だ……………』

「一流コックと言え」

「まず、私のへそくりが8割」

「ゴ~~~~~ルツ！！」

（デービーバックと貧血娘）

## 第16話 デービーバックと貧血娘（前書き）

（作者Kの一言シリーズ）

自分の赤ちゃんを抱いた、知り合いの女性との会話の中にあっただ、言われて凄く困った一言。

K「幼児虐待や、育児放棄がニュースに度々出てくるけど……こういう風景見ていると微笑ましいな。Sさんは大丈夫？」

S「私は大丈夫よ。この子大好きですもの」

その瞬間、彼女はこう言いました。

S「なんだか……他人とは思えなくて」

K「（他人じゃ……ないよね!?!）」

T「え!? ちょ、これなんですか!?!」

K「ゲリララ飽きちゃった」

T「そんな理由で終わらせちゃうんですか!?!」

K「以降、このシリーズが何回か出てきまーす!?!」

では第16話、どござー!!

## 第16話 デービーバックと貧血娘

青い海へと戻り、なんやかんやあったが落ち着きだした頃、ついに全員（ツエル、ロビン除く）が待ちわびていた時間がやってきた。

……………そう、黄金の山分けTIMEだ。

「イよオツ!!」

「待ってたぞー!! 銅像買った俺は!!」

「本買つていいか!？」

「新しい鍋とフライパンと……………食器に巨大ねずみ捕り」

「飲み放題だな、コリヤ」

「どれだけ飲む気ですか……………」

嬉々としてそれぞれ買いたいものを口に出す。

「まず、私のへそくりが8割」

『いやちよつと……………』

ナミの仰天発言に全員の声が八モる。

「冗談よ」

「あたりめエだ!!」

「んなおおっぴらなへそくりがあつてたまるか!!」

結局、黄金の使い道は船の修繕費に使ってからあまりを全員で振り分けることになった。これは全員一致の賛成だった。

そして船は海を進む……………着いた先は、

「何もね〜っ!!」

見渡す限りの大草原。

『うおー！！大草原だ〜！！』

ルフィ、ウソップ、チョッパーは興奮を抑えきれなくなり、大草原を走っていく。

「コラーッ！！　　もーあいつらは……得体の知れない土地に

づかつかと」

「まあまあ……」

「これだけ見えすいてりゃ危険もなにもねえだろ」

そう言っつてゾロは錨を海に落とした。

とりあえず、全員船から降りる。これだけの大草原も珍しい。降りないわけにもいかないだろう。

「さて、これからどうする？」

「どうするもこうするも……記録ロギが溜まるのを待つしかないだろ」

「そうですね、この島には人は住んでいるのでしょうか……」

「とりあえずルフィ達が帰ってくるのを待ちましょうそれまで

」

ナミが船を振り返ると、メリー号の奥に知らない海賊船があり、しかも猫の手のような鎖のついている錨で行く手を封鎖されてしまった。

「何だお前ら……！！」

「やるんなら降りて来い！！」

「え、ちよっ……挑発しないほうが……」



「俺！！俺が1番弱エぞ！！」  
「いえ、ここは私よ！！私こそ1番弱いわ！！」  
「この船で1番弱えのはおれだ！！」  
「わ、私だって弱いですよ！？」  
『アンタ（お前）は十分強いでしょ（だろ）！！』  
「そ、そんなあ……………」  
「変わったケンカをするのね」

結局、ケンカになるという理由で、全員クジによって決めることになった。枠は『ドーナツレース』が3名、『グロッキーリング』が3名、『コンバット』が1名、“休憩”が1名。

結果は……………

『ドーナツレース』  
・ナミ  
・ウソップ  
・ロビン  
『グロッキーリング』  
・サンジ  
・チョッパー  
・ツエル  
『コンバット』  
・ルフィ  
“休憩”  
・ゾロ

注）実際に作者が、原作のメンバーの誰と変えるかをあみだクジでやった結果です。Mr. パーティの時といい、今回といい、とことん作者はゾロにクジ運が悪いみたいです。

「なんで戦闘組のアンタが出ないのよ!!」  
「そっだそっだ!!」  
「仕方ねエだろ……決まっちまったんだから」  
『さアドーナツレースの説明を始めるよ!!全員ステージ前に集ま  
つてね!!』

試合の火蓋が切って落とされた。

結果だけ言えば、レースはウソップ達の負けだった。もう少しで勝てそうだったのだが、最後の最後に敵船長フォクシーの能力、“ノロノロビーム”を当てられて負けてしまったのだ。ルフィ海賊団の中から、1人渡すことになってしまった。フォクシーが選んだのは……

「船医!!トニー・トニー・チョッパー!!」  
「おれ!?!」

あっという間に、チョッパーは連れて行かれてしまった。

「チョッパー!!」  
「確かに考えてみればあいつは珍獣の中の珍獣……」  
「カワイイものマニア?」  
「毛皮マニアじゃないかしら」  
「言ってる場合かおめエら!!仲間とられたんだぞ!?!」

ゾロとツェルは黙っている。

チョッパーは必死にルフィ達にイヤだと訴える。だが……

「ガタガタぬかすなチョッパー！！見苦しいぞ！！」

ゾロが叱咤する。驚き、辺りは静まり返る。

「お前が海に出たのはお前の責任……どこでどうくたばろうとお前の責任……誰にも非はねエ。ゲームは受けちまってるんだ。ウソツブ達は全力でやっただろ。海賊の世界で誰がそんな涙に同情するんだ？」

「ゾロ！！」

「男なら……フンドシ締めて、黙って勝負を見届ける！！」

「そんなこと……アンタあいつの気持ちも考えなさいよ！！」

ナミが攻めるように言うが、ゾロはもう何も言わない。今度はツエルが口を開いた。

「チョッパーさん」

「ツエル……」

「大丈夫ですよ？私とサンジさんに任せてください……必ず取り返してみせますから。……だから泣かないで……ねっ」

ニコツと笑いかける。2人の言葉を受けたチョッパーは涙を拭き、涙をすする。そして、どっかかと堂々と座りなおした。フォクシー海賊団からは感心する声が聞こえる。

「よし！！」

「かつこいいですよ。チョッパーさん」

「イカスぜあの剣士！！」

「あの子の台詞もキユンとくるな〜！！」

「オヤビン！！次はあのどっちか貰いましょう！！」

「トナカイも根性あるな」

「泣けたツス！！マジ泣けたツス！！」

「よっしゃツエル！！取り返せ！！」

そして、次の試合が始まった。

グロッキーリングではツエル、サンジ、チョッパーの3人だったが、チョッパーが抜けたうえに、人員補充は認められていないのでツエルとサンジの2人だけとなった。

「ボールマン、ですか……………どうします？サンジさん」

「レディに危ない目はあわせられねエ。俺がやるよ」

「はいっ。わかりました」

サンジがボールマンに決定した。そして敵チームが登場する。3人まとめて“グロッキーモンスター”だ。四速ダッシュの奇人ハンバーグ、タックルマシンのピクルス、そして魚人と巨人のハーフであるビッグパン。

「ん〜……………サンジさん」

「なに？ツエルちゃん？」

「手加減無しでいきましょう。相手も強そうですし……………早くチョッパーさんも助けたいです」

「ああ、もちろんだ」

そして実況によるツエル達の紹介が入った。

「対するは、一回戦でお邪魔軍団を蹴散らした“暴力コック”サンジ！！」

「一流コックと言え」

「そして、男だらけのこのフィールドに咲く一輪の儂い花！！見るからにか弱そうな身体だけど大丈夫かな！？“家政婦”のツエル！！」

「なんだか私の紹介ムダが多すぎませんか？」

「ツエルちゃんには丁度いいくらいだよー！！」

「そ、そうですか……」

フォクシー海賊団サイドからもいくつか声が出てくる。

「おいお前ら！！あの子あんまりいじめんなよー！！」

「俺……あの子さっきの2人より好みだな」

「俺もだ……」

『可憐だ……』

「……………（ゾクゾクゾクッ）」

そんな彼らの眩きは耳のいいツエルには届いており、肩をブルブルと震わせる。

「どうした？ツエルちゃん」

「い、いえ……なんでもないです」

「おい君！！武器は反則だぞ！！剣は置いておけ！！」

「え？……そうなんですか？じゃあ……ナミさん！！お願いします！！！！」

注意されたツエルは、ナミにサーブルを手渡しに、一度フィールドを出てまた戻った。サンジが心配そうに話しかけてくる。

「ツエルちゃん、武器なくて大丈夫か？」

「ルールだから仕方ないですよ。……あの子がなくても、一応“あれ”、使えるので大丈夫ですよ」

「それなら大丈夫だな」

“あれ”とは、ツエルが戦闘時に使う衝撃波のことである。エネルの電撃を受けて気を失い、また夢を見た時に使えることがわかったのだ。

コイントスによって、ボールをとったのはグロッキーモンスターズ。サンジは敵陣のミッドサークルに入り、試合開始となった。

笛が鳴ると同時に相手チームのピクルスがサンジを狙う、だがサンジはそれを飛び越えるどころか踏み台にし、一気にボールマンであるビックパンを狙った。ビックパンはサンジを自分の腕の上に乗せるように手を伸ばす。サンジは上に乗ってしまふ。

「うお！？コイツの皮膚ぬるぬるする！！」

「サンジさん！！危ないです！！」

「え？」

「速攻ーーーー！！」

ツエルの声を聞き、前を見るとビックパンがサンジを乗せている手と逆の手を振りかぶっていた。そして、それをサンジに当てて彼をボールのように前に飛ばす。

「パンクパス」

「ぐア！！」

「サンジさん！！つく……」

サンジの軌道を読み、いち早く落下地点までたどり着くツエル。彼女の足の速さを見て大多数が驚いていたが、気にしない。少し遅れてハンバーグも同じ場所まで来るのが見えてきた。

「お掃除タツクル”!!!」

「え? きゃあっ!!!」

「ツエルちゃん!!! てめエツ!!!」

サンジとハンバーグの集中していたため、ピクルスが見えていなかったツエルはピクルスのタツクルを受けてしまい、吹き飛ばされた。しかも非常に軽いため、結構な距離を。それを見てサンジは激昂するが、空中にいるため何も出来ない。

そのままピクルスはゴールへと走って行き、ハンバーグがジャンプしてサンジを掴むとピクルスの方へ投げる。ツエルは遠すぎて間に合わない。

「スピニングタツクル”」

ピクルスが高速回転し、落ちてきたサンジを再び空中に打ち上げる。後方ではビッグパンがハンバーグを空中に掬い飛ばしていた。ハンバーグはサンジをキャッチする。彼らの落下コースは完璧にゴールだ。

『何とかしろサンジツエル~~~~~!!!』

「仕方ありませんっ」

ツエルは“ボンナ”でピクルスの前、ゴールとピクルスが直線上になるところに移動する。

「イヒ?.....速.....」

「ちよつと我慢してくださいね」

ツエルはサーブルを構えるように、定位置に腕を構える。

「ユニホーン幻獣の一本角ネンビューマー無武装編！！！」

ピクルスに正拳突きを放つと、衝撃波が生み出され、ピクルスは吹き飛ばされる。

一方でサンジは、

「守るべきレディに……守られちゃったら男が廃るだろうがア！！」

自力でハンバーグから脱出し更にハンバーグをリングに向って蹴り飛ばした。ピクルスとハンバーグはゴールリングの上で衝突し、フィールドの外でダウンした。

『何イ~~~~~!!?』

フォクシー達からは驚きの声上がる。それも当然だろう。見るからにひ弱なツエルが巨漢のピクルスを吹き飛ばしたのだから。

「何だあの子……能力者か!?!」

「ピクルスが吹き飛ばされるなんて……」

「ハンバーグさんがはじき飛んだ」

だが、麦わら海賊団の面々はほっとはしたものの、驚きはしなかった。

「つたく、あの子は窮地に立たされないと本気出さないんだから……」

「あいつ素手でも強えな」

ツエルは無事フィールドに降り立ったサンジに心配そうに、申し訳なさそうに近寄る。

「大丈夫ですか?……私、余計なことしちゃいましたか?」

「いや、むしろもう1人敵が減って好都合だ。……じゃ、さっさと協力して倒しちまおうぜ」

「はいっ」

2人はそれぞれ構えてビッグパンの方を振り返るが……すぐそこまで迫っていたビッグパンに踏みつけられそうになって、慌てて避けるが……

「ええっ!? ちょっ……まっ

」

「コレア……」

刃物が靴の裏についており、必死で逃げた。審判の白々しさに腹を立てたサンジが抗議に行くが、取り合ってもらえない。その間、ツエルが1人でビッグパンに追われるはめになるが足の速いツエルに、逆にビッグパンが翻弄されていた。ビッグパンはツエルを追いかけるのに必死で、余裕のあるツエルは相手ゴールの辺りをずつとうろつろしていた。だが、1人では流石に勝負を決められないので、サンジに助けを求める。

「さ……サンジさん!! 早くう……戻ってきてくださーいっ!!」

「ツエルっちゅわ〜んっ!! 今行くよ〜〜〜!!」

サンジが逃げるツエルの隣にたどり着くと、ツエルがまとめた作戦を耳打ちする。そして、作戦の不安要素をサンジがこなせるかどうか聞くと、自信満々にやってみせると言い切った。

「流石サンジさんですっ！！では……」

「ああ……」

『作戦開始ッ！！』

合図と同時に、ツエルは立ち止まってビッグパンと向かい合い、サンジは左へ走っている方向を変えた。ツエルは向ってくるビッグパンのもとへと一気に距離を詰めると、跳躍して構える。

「ボアヒタスク猪の湾曲牙ネンビユーマー無武装編！！」

急すぎて、しかもかなり速いツエルの行動について行けず、ビッグパンはモロに攻撃を食らってしまう。巨大な身体は持ち上がりはしないものの、衝撃波によって倒れこみそうになる。だがそこにはサンジが待ち構えていた。

「アンチマナー反行儀キックコース！！」

サンジの強烈な蹴りによって、巨体は持ち上げられ、倒れこむことも出来なくなった。そしてサンジはまた走り、ツエルがいるところまで来る。その位置は、ビッグパンとゴールリングが一直線になる位置。

サンジの足にツエルが乗る。

「アルメ・ド・レール空軍………インパクトシュート！！」

「はあああああああああつ！！」

気を失うか失わないかの境目をさまよっているビッグパンの腹めがけて、ツエルが勢いよく飛んでいく。

「ライノヒョット犀の猛進ネンビユーマー無武装編！！」

ツエルから放たれた衝撃波はビッグパンの腹に直撃した。一定範囲を突き進むそれは巨体にぶつかってもなお前に進もうとし、結果ビッグパンはゴールの方へと押されていく。そして……

「ゴ~~~~~~~~ルッ!」

第16話 デービーバックと貧血娘（後書き）

《次回予告》

「木かと思った」

「“ノロノロ!!…びびび…!!”!?”」

「え?おいおい、どうしたってんだよ?」

「うははは!!“5”オ!!」

「アンタはいつも結局そうなるのね」

「ツエルちゃん…お疲れ様」

「私を…私を知っているんですか!?”」

〈大将と貧血娘〉

## 第17話 大将と貧血娘（前書き）

～作者Kの一言シリーズ～

もし、気になる彼の好みのタイプを友達に聞いて来てもらった時に言われたら困る一言。

「それで……どうだった？」

「あ、うん。彼ね、女なら誰でもいいって」

「（あれね？彼の好みに入ってるはずなのに嬉しくないこの気持ちは何！？）」

T「またこれですか……」

K「いいじゃんいいじゃん」

T「はあ……」

K「突然ですが、“楊貴妃”の総アクセス数がなんと！！3万5000アクセスを突破しました！！みなさまいつも見ていただきありがとうございます！！」

では第17話、どうぞ！！

## 第17話 大将と貧血娘

『そして試合終了のホイッスル!!グロッキーリング決着!!勝負を制したのはなんと!!麦わらち~~~~ムッ!!』

「がー!!がばー!!ツエズー、ダンジー!!やっぱー!!」

チョッパーは嬉しくてひどく泣き出した。

だが、フィールドでは……

『ツエル!!』

「ツエルちゃん!!」

危ねエツ!!」

ビッグパンをリングに突っ込んだツエルだが、力なく重力に引張られて着地の態勢をとってなかった。それをサンジがキャッチした。どうやら技を多用した疲労と、勝った安心感からか身体に力が入らなくなったようだ。

「ツエルちゃん……お疲れ様」

「サンジさんも……お疲れ様です」

2人は笑い合い、サンジはツエルを俗に言う“お姫様抱っこ”で抱え、ルフィ達のところへ戻っていく。途中で自分がどんな体勢でサンジに抱えられているか気付くと顔を真っ赤にして抵抗する。

「サ、サンジさん!!おおお降ろしてください!!恥ずかしいですっ!!」

「歩けないんだろ?だったらこのままでいいだろ?」

「うう……あうう……」

今降りても歩けないのが自分でもわかっていたため、渋々従う。

「チクシヨーおめーらハラハラさせやがって!!」

「うははは、あつたり前だ!!こいつらがまけるかー!!」

「アンタはいつも結局そうなるのね」

「面目ないです……」

「ナミさーん!!ロビンちゃん!!見てた!?ホレた!？」

「ステキだったわよ」

チョッパーを取り返し、次は最終戦コンバット。その前に試合会場の準備等があり、時間が空いたのでその間にチョッパーから（主にツエルが）傷の手当てやら輸血やらを受けることにした。

「ありがとうな2人共!!かつこよかったぞ!!あゝんなでつけエやつ蹴ったり吹っ飛ばしたり」

「勝てたのはツエルちゃんのお陰さ」

「そんな……サンジさんのお力が無くては勝てませんでしたよ……」

……」

ルフィが呼ばれ、セコンドとしてウソップを率いて控え室に行くと、ゾロ達は新しく作られた客席へと着席する。ちなみに席順は左からゾロ、チョッパー、ツエル、サンジ、ナミ、ロビンとなった。少し経つと、司会のイトミミズが入場するフォクシーとルフィの紹介をする。何より眼を惹いたのは……ルフィのアフロ頭だった。

「誰だよ……」

「おおー!!ルフィかつこいい!!」

「きゃあああつ!!こつち向いてくださああい!!」

「やるなア!!ブラザー魂<sup>ソウル</sup>が燃えたぎってる」

「まじめにやってほしいわ……」  
「ウフフ、ステキじゃない」

そしてゴングは鳴り、試合開始となった。序盤から、ルフィはフォクシーの“ノロノロビーム”に翻弄され、押され気味だった。そして2人が船内に入ると司会のイトミミズさえ試合の行方がわからない。その間、しばし雑談となる。

「負けやしねエよ」

「そうさ、ルフィだもんな」

「ルフィで……アフロだからだ!!」

「ルフィだからで十分だろ……あんなクソキツネ」

「何でアフロをパワーアップだと解釈してるの？」

「見た目……です」

「強そうに見えたわ」

突如試合会場であるフォクシー達の船から爆発音と煙が上がる。煙が晴れるとそこには……倒れているルフィと立っているフォクシー。ルフィの身体は黒コゲだった。船内でどんな攻撃を受けていたのだろうか？……それは誰にもわからなかった。

甲板が上がってからも、ルフィは防戦どころか殴られっぱなしだった。フォクシーの“ノロノロビーム”は想像以上に手強かったのだ。だがルフィが何か言うと、2人の激しい打ち合いとなる。殴られっぱなしだったはずのルフィなのに、その打ち合いはルフィが押していた。そして、耐え切れなくなったフォクシーが最後の一手を繰り出す。

「“ノロノロ!!ビュッ……”!??」

「……え？」

「何だ？」

「……………動かない」

フォクシーが突き出した手とルフィが突き出した手が重なった状態で、両者微動だにしなかった。おかしいと思い始めたところで、ルフィが倒れた。……ルフィのほうが動いた。ルフィの手からは鏡が落ちてきた。どうやらそれでビームを跳ね返したみたいだ。そして、ルフィ渾身の一撃が放たれる。

「……………9秒です」

「……………?」

「あと8秒」

「え?……………え?」

「7……………」

「何?」

「……………6」

「うははは!……………5”オ!……………」

ツエル、ゾロ、サンジ、ロビンが言っている意味がわかったウソップが楽しそうに立ち上がった。

「何してんあおめエらもカウントしろ!……………4”!……………」

「何だ?」

「さア……………楽しそうだ」

『……………3”!……………』

自分達の船長が沈むまでのカウントダウンとは知らずに、ノリで数えだすフォクシー海賊団船員達。

『……………2”!……………1”!……………0”オ……………!……………』

「うおおおお~~~~っ!……………」

『やったーっ！』  
『うわーっ！！オヤビーン！！』

見事にフォクシーは吹っ飛び、ルフィの勝利で幕を閉じた。

場所は変わり、今はトンジツトの家の前。そこで一同はルフィが試合を受けた理由を知ることとなった。

もてなしをしてみると、トンジツトはルフィ達に家に入るように言い自分も入ろうとするが、ドアにたどり着く前に、何か……いや、誰かとぶつかって尻餅をつく。それは見上げるほどの高身長の人だった。

「何だお前ら？」

「おめエが何だー！！」

「木かと思った」

「……………ハア……………ハア……………え！？」

ドサツと音が聞こえたほうを見やると、ロビンが見たこと無いくらい取り乱していた。

「あららら……………コリヤいい女になったな……………ニコ・ロビン」

男はロビンのことを知っている風な口ぶりだった。取り乱すロビンにルフィが知っているかどうか訊ねると、男が答える。

「昔……………ちょっとなア」

「ロビンがこんなに取り乱すなんて……誰!？」

ルフィ、ゾロ、サンジ、ウソップは油断無く攻撃態勢になっている。そんな彼らを見て、その男が落ち着くように言う。

「別に指令を受けて来たんじゃないねえんだ。天気がいいんでちょっと散歩がてら……」

「指令だと!?! 何の組織だ!?!」

ゾロの一言には、ロビンが答えた。

「海兵よ。海軍本部“大将”青キジ」

「大将!?!」

全員の声が八モる。ロビンが大将の説明をした後、青キジとウソップ達の言葉の応酬ボケ・ツッコミが入る。ルフィはただ青キジを見上げ、ツエルは信じられないようなものを見たかのように、眼を見開いていた。そして、ロビンに訊ねる。

「……ロビンさん」

「何?」

「大将の顔と違って……一般人に公開とかされてますか?」

「たぶん……されていない。一般人だとほとんどの人が顔も知らないと思うわ」

「じゃあ……じゃあなんで」

ぐつたりと横になった青キジを見開いている眼で見つめる。

「なんで……なんで私はあの人に見覚えがあるんですか?!?!」

「……ツエル?」

あまりにも信じられないことだったのか、つい大きい声が出てしまった。驚いたルフィ達はツエルを振り返る。普段のツエルならここで恥ずかしそうに顔を赤らめて俯くだろうが、今はそんな余裕すらなく、青キジを見ていた。声を聞き、初めてツエルの存在に気付いたかのように青キジはツエルに声をかけた。

「あらら……ツエルちゃんじゃない？ どうしてこんなところに？」  
「……え？」

しかもいたって友好的に。知り合いかのように。

「私を……私を知っているんですか！？」

「え？ おいおい、どうしたってんだよ？」

突如寝転がっている青キジに、ツエルは迫った。青キジも突然のことに驚く。

「私を知っているなら……教えてください！！ 私は……私は何者なんでしょうか！？」

「落ちて着けて……なああんたらも、この子どうしたってんだ？」

ツエルの剣幕に、耐え切れなくなった青キジがルフィ達に説明を求めた。チョッパーが答える。

「ツエルは、ある日海に流されてたのをおれらが拾ったんだ。その時のシヨックなのか……ツエル個人に関する記憶がほとんどないんだ」

「記憶喪失、か……」

「お願いしますー！！ 知っているなら教えてくださいー！！」

食い下がってくるツエルを見て、気まずそうに頭をかく青キジ。  
……そして、口を開いた。

「ワリいな……俺の口から言うことは出来ない」

「どうして!？」

「記憶喪失は、無理に戻そうとすると身体に悪影響を与えることがあるから……か？」

ツエルの言葉に答えたのはチョッパーだった。青キジは1つ頷く。

「そつだ……すまん」

「そつ………ですか」

徐々に冷静さを取り戻してきたのか、納得のいかない表情を浮かべているが青キジと距離を作った。顔色は優れていなかった。

「ツエル……大丈夫？」

「すみ……ません。ちよつと……気分が優れないので、散歩していきます」

そう言って、ツエルは全員に背を向けて歩き出した。

第17話 大将と貧血娘（後書き）

《次回予告》

「これから本部に向おうと」

「アンタ達何勝手に進路を変えてんのよ!!」

「カエルも灯台を目指しているわよ」

「俺達はそれを是非丸焼きで食いてエんだよ!!」

「どうした島が見えたのか？」

「ふわああああ!!? 飛ぶ!! 飛びますうううつ!!」

「記録を辿って次に着く場所に……記憶を取り戻す“鍵”となる人物がいる」

《海列車と貧血娘》

## 第18話 海列車と貧血娘（前書き）

K「Kとー!!」

T「ツエルのー!!」

K & T 『作中ゲリララジオー!!略してゲリララー!!』

K「さあ始まりました“楊貴妃”!!そして久しぶりのゲリララー!!」

T「そうですね。一言のコーナーはもうやらないんですか?」

K「いえいえ、また思いつき次第やっていきますよー!!」

T「はあ……そうですか」

K「さて、前回は青キジさんとの対面で混乱しちゃったツエルちゃんだけど……ホントにびっくりだね」

T「私も驚きましたよ。名前がわからないのに顔に見覚えがあるこの気持ち……わかりますか?」

K「あゝわかるわかるよ。私もよくありますもん」

T「え?そうなんですか?」

K「うん。テレビとか見ててもさゝ、あれ?この人の名前が思い出せないなゝって事が」

T「……それって単なる物忘れじゃないですか」

K「そうとも言つ」

T「……」

K「ええい!!人をそんなポケ老人を見る眼で見るな!!」

T「はあい」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞー!!」

K「メールアドレスは、k a k k e y - c o m e p k s p . j p p

です。 を@に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってますー!」

K&a m p・T『それでは第18話、どうぞー!』

## 第18話 海列車と貧血娘

「どうしたと言うのでしょうか……私は」

青キジを見た時から、何かツエルの頭の奥底で凝り固まっているような……そんな感じがしていた。だがその正体がわからない。何かを言わなければいけない気がしたのだ。

……ではそれは何だ？ わからない。

海岸に座り海をじっと眺めているが、それはただただ穏やかだっ  
た。

ルフィとの決闘を終えた青キジは、持っていた子電伝虫で電話をかける。

『プルプルプル……プルプルプル……ガチャ、……もしもし？』

『マイルか？俺だ、俺』

『……まさか、クザンさんですか？』

『おう、そうだ』

『明日は槍でも降ってきますかね？貴方から連絡を下さるなんて』

『お前も相変わらずだな……今どこにいる？』

『“カーニバルの町”サン・ファルドですよ。海列車に乗ってこれからエニエス・ロビー経由で本部に向おうと』

『ねえくん、誰と話してるのお？』

『一緒に遊びましょうよお』

『ええい！！私には仕事があるのです！！遊んでいる暇なんてあり』

ません!!ちよ、放

【5分後】

『……すみません、カーニバルの雰囲気と酒に酔ってハメを外しすぎていた女子に捕まってきました』

「相変わらずモテモテだな」

『好きでこうなったわけではありません。それで、本題は何ですか？私の居場所を聞くために態々電話をかけたわけではないのでしょうか？』

「そつだ、お前さん“バスターコール”の召集がかつてるだろ？アレ参加するな。センゴクさんにやあ俺から話しつけとくから」

『は？私には願ったり叶ったりな事ですが……何故ですか？』

「……“例のアレ”、見つけたぞ」

『……どこですか？』

「ロングリングロングランドだ。恐らくここからウォーターセブンに向うだろう」

『わかりました。すぐに向います……様子はどうでした？』

「その辺は今じゃなく、直接言ったほうがいいだろう?……俺もちよつとだけ寄るから、その時直接話そう」

『わかりました。それでは……うわ!!また追ってk ガチ

ヤ

「……………」

通話の切れた子電伝虫じつと見つめ、ため息をつく。

「アイツ、どこ行っても苦労してるな……さて、と。あの子にも話をしておかなくちゃな」

頭を掻き、自転車に乗って目当ての人物を探しに行く。

そして海岸沿いに、自分が凍らした方とは逆の方角に少し進んだところで目当ての人物、ツエルを見つける。膝を抱えて座りながらじっと海を見ていたツエルだったが、青キジの姿が見えるとはっと立ち上がり、浮かぬ表情で顔を背けた。どんな関係かもわからないので、どう向き合っているかわからない。青キジが自転車から降りると、ツエルが話しかけた。

「何か、ご用ですか？」

「ツエル……アンタア記憶を取り戻したいよな？」

「……はい、もちろんです」

小さいが、ハッキリした声でツエルは答えた。その様子を見て、青キジも続ける。

「アンタらが記録ログを辿って次に着く場所に……記憶を取り戻す“鍵”となる人物がいる」

青キジの言葉に、信じられないといった驚きの表情で彼を見上げるツエル。

「え？……それってどういう」

「ただし、」

尋ねようとしたツエルの言葉に、声を重ねて遮った。

「ただし……恐らくアンタは記憶を取り戻したら、麦わら達と距離を感じずにはいられなくなるだろう。……それでもいいなら、取り戻すといい」

それだけ言い残すと、自転車に跨って去って行った。残されたツ

エルは、青キジの言葉を頭の中でなんども反芻する。……そして、決心したような顔つきをみると、メリー号がある海岸の方へと歩き出した。

「（どんな記憶であつても……私はルフィさんたちと疎遠になんてならない……！！）」

そう心に誓つて。

ちなみにメリー号にたどり着いたツエルは氷漬けになつたルフィとロビンを見て気絶し、2人の心臓が動くまで起き上がることはなく、役に立たなかつたそうだ。

ルフィとロビンの身体の安静のため、4日間ロングリングランドに停泊した後出航し、今日で3日目。ルフィ海賊団の面々といえは……

「追つぞ野郎共！！船体を2時の方角へ！！急げ！！！！」

偶然見つけたクロールするカエルを追っていた。

「アンタ達何勝手に進路を変えてんのよ！！」

「でっけエ体中傷だらけのカエルを見つけたんだ！！俺達はそれを是非丸焼きで食いてエんだよ！！」

『食つのかよ！！』

ナミは船が進んでいる先に何かがあるのが見えた。双眼鏡で確かめてみると……それは灯台だった。

「どうしてあんなところに灯台なんて……誰かいるのかしら」

「どうした島が見えたのか？」

「ううん、灯台があるの。別に記録ロケが指す場所じゃないわ」

「カエルは！？カエルの方向を指示してくれ！！」

「いやよ！！」

「カエルも灯台を目指しているわよ」

「カエルはまず白ワインでぬめりを消し、小麦粉をまぶしてカラッとフリート」

「ちよつとロビン！！サンジ君！！」

「え、ちよつ……なんでみなさんオールで漕いでいるんですか！？」

洗濯物籠を抱えたツエルが、驚いた表情でみんなを見ていた。そして後甲板を見てみると……

「ああっ！！洗濯物がぐつしゃぐしゃにいいいっ！？」

干したばかりの洗濯物達は風に煽られ、甲板に落ちたり引つ付いたりしていた。

揺れる船体、だがツエルまめげずに洗濯物達を綺麗に干しなおしていく。途中、何かに船が乗り上げたような衝撃があったが関係ない！！船が180°方向転換したが関係ない！！テキパキと作業を進めていく。すぐ後ろを蒸気機関車が通ったが関係あつた。

「ふわああああ！？飛ぶ！！飛びますうううっ！！」

通り過ぎたことよって起きた風に、洗濯物達が吹き飛びそうに

なる。いや、飛んだ。船の端まで走り  
なんとか死守するが……

「ああ！！ナミさんのシャツが！！」

「たあっ！！」

一枚だけ、船から大きく離れていく。ツエルは跳躍し、見事それをキャッチするが

「きゃあああああ！！（ドボンッ）」

「大変だアッ！！ツエルが海に落ちたア！！」

「何やってんのよあの子はッ！？」

海に落ち薄れて行く視界の中で、2つの人影が海に飛び込んだのが見えた。そして、意識が落ちる直前、最後にこれだけ思った。

「（……）ご迷惑をおかけします」

第18話 海列車と貧血娘（後書き）

《次回予告》

「わしゃあ本職じゃあウソは言わん」

「ツエルちゅわ〜ん！！一緒に買い物に行かない！？」

「ボロ儲けだラッキー！！やっちめエ！！」

「おれ、メリー号が好きだぞ！！」

「この船が……」

「風邪、ひかないようにしてくださいね」

「メリーお前……本当にもう、走れねエのか？」

〈壊れた羊と貧血娘〉

第19話 壊れた羊と貧血娘（前書き）

K「Kと!!!」

T「ツエルの!!!」

K & T 『作中ゲリララジオ!!!略してゲリララ!!!』

K「ねえねえツエルちゃん」

T「なんです?Kさん」

K「川柳って知ってる?」

T「ええ、一応知ってますよ。要するに季語の入ってない俳句ですよね?」

K「うん。そうだよ」

T「それがどうしたんですか?」

K「いやー友達と遊んでたらね?面白い川柳作ってみよう!!!ってことになって、結構盛り上がったからここでもやってみようかと思ってる」

T「あ、いいですね。正直前回のなんて話題が浮かばなくて苦しんだ末に変な近況報告で終わりましたもんね」

K「うん……今回は話題が見つかってよかったよ」

T「そうですね。……じゃあ、どっちからいきます?」

K「では私からいきます!!!」

T「お願いします!!!」

K「あの背中、めがけて私、ニーキック!!!」

T「面白いですか!?!それ!!!」

K「少なくとも私は面白いです」

T「相変わらずですね……」

K「じゃあツエルちゃんドウゾ!!!」

T「ええっと……洗濯物、追いかけてダイブ、海へドボン」

K「……………つまんない」

T「そんな目でみないでください……………」

K「じゃあ次私ですね。やあウツチー！！、間違えました、すみません」

T「他人に膝蹴りしたってことですか!？」

K「下級生だったから許してくれたよ」

T「最低です!!!」

K「はい、次ツエルちゃん」

T「うゝん……………おかわりだ、求める先は、空の鍋」

K「……………(フツ)」

T「うわあああんっ!!!嘲笑しないでくださいようっ!!!」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!!」

K「メールアドレスは、k a k k e y - c o m e p k s p . j p  
です。 を@に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってまゝす!!!」

K & a m p ; T 『 それでは第19話、どうぞ!!!』

## 第19話 壊れた羊と貧血娘

ルフィ達が遭遇したのは“海列車”といわれるものだった。ナミが見た灯台はその駅、“シフト駅”<sup>ステーション</sup>だ。駅長のココロと仲良くなり、ウォーターセブンの簡単な地図と船の工場長への紹介状を貰い、一同は再びウォーターセブンへと船を進めた。

そして、数時間後

ウォーターセブンに無事到着すると、どこか海賊慣れしている一般の人達に誘導されつつ岩場の岬にメリー号を停泊させる。だが、ゾロがメインマストをたたもつとロープを引つ張つたら支柱の真ん中から折れてしまった。一同はメリー号が予想以上に傷ついていたことに驚いた。

そして思い思いに別行動をとることになった。ルフィ、ウソップ、ナミは空島で手に入れた黄金の換金と工場へ行きメリー号修理の依頼。チョッパーとロビンは買い物。ゾロは昼寝。サンジ、ツェルは

……

「ツェルちゅわ〜ん！一緒に買い物に行かない!？」

「う、ごめんなさい……まだお洗濯が終わってないので……また今度一緒に一緒にしてください」

<sup>ステーション</sup>シフト駅で海に落ちた時、洗濯物の大半を持ったまま落ちてしまったので洗いなおさなければならなくなっていたのだ。

「そっか……わかった。じゃあ俺行くから、ゾロもいるから何かあ

「だったらアイツに全部任せとけばいいよ」  
「ふふ……わかりました」

そう言ってサンジは町へと出かけて行った。メリー号にいるのはゾロとツエルのみ。ツエルの鼻唄とカモメの鳴き声、岸に打ち付ける波音だけが響き渡っていた。

ツエルは洗濯物籠を持って後ろ甲板へいく。潮風がツエルの髪を撫で、気持ち良さそうに眼を細めた。やっぱり戦っているより……こうやって何気ないひと時を過ごしているほうが好きだと思った。

「なんていったら……ルフィさんたちつまらなそうな顔をしてしま  
うかもしれませんね」

想像するのに容易過ぎたため、くすくすと自然に笑い声が漏れてしまう。ひとまず籠に入っていた洗濯物を干し終えると、まだ残っている洗濯物を洗うために船室へと入って行った。

ツエルが船室に入ってから数分後、荒っぽい来訪客達がゾロを襲う。

その男達の内の1人が寝ているゾロに刀を振りかぶったが、そのゾロに刀で受け止められた。

「……寝込みを襲ったつもりだったが……」  
「誰だてめエら……名乗れ」

ゾロは一睨みしながら、相手の刀を弾いた。

「俺達ア賞金稼ぎ……泣く子も黙る“フランキー”一家だ！！てめ  
エの首の“6千万”ありがたくいただくぜ！！」

妙な恰好をした彼らを見て、ゾロは微妙な顔をしていた。

「　　そして船内で待ち伏せて、一味全員一網打尽だ！！ウハハハ！！ボロ儲けだラッキー！！やっちめエ！！」

先頭の男が両手持ちで刀を振りかぶるが、ゾロが片手で持った剣にあっさり止められる。

「ラッキー？」

「え？」

「アンラッキーだろ」

ゾロはその男を切るのではなく殴り飛ばした。他の男達は一瞬だけ怯むが、気を取り直して再び襲い掛かる。ゾロは刀を2本だけ構えた。

「二刀流”……”サイクル“犀回”！！」

『ぶぎやあ~~~~つ！！』

ゾロの一撃で、全員海へと吹っ飛ばされてしまった。

「……………くだらん」

メリー号の柵に背を預け、再び眠りに入る。

「あ~~~~ゾロさん？」

船室からツエルが洗濯籠を持って出てきた。

「荒っぽい音が聞こえたんですが……大丈夫そうですね」

既に気持ち良さそうに寝ているゾロを見て苦笑する。あつ、と何かを思いついたような顔を見ると、洗濯籠を置いて再び船室へと戻っていった。少しして戻ってきたツエルが持っていたのは一枚の毛布。それをゾロに優しくかけた。

「風邪、ひかないようにしてくださいね」

その言葉をかけ、再び洗濯に専念する。

ツエルが洗濯を終え、これからどうしようか考え始めている頃、船に再び誰かが来た。その男は船の甲板の柵に飛び乗った。ちなみにそこはツエルがいたすぐ前だったので、ツエルはかなり驚いた。

「ひゃわっ！？ ななな、なんですかっ！？」

「おおすまん。驚かしてしもうたか。別にワシヤ怪しいモンではない。……ガレーラカンパニーの職員。カクと言う」

「ガレーラカンパニー……あ、もしかして船大工さんですか？」

「そうじゃな。お主らの船長に依頼されて来たのじゃ。……ちよつと船を見せてもらうぞせい」

「はい、お願いします」

カクが船を見て回っているのを、ツエルは心配そうに眺めていた。するとそこへ、声をかけられる。

「ん……おいツエル。アイツは誰だ？」

「あ、ゾロさん。おはようございませす。ルフィさんたちに依頼され

て船を見にいらっしやった船大工さんです」

「ふうん……」

「……メリー号」

「ん？」

「無事、直るといいですね」

にこつとツエルはゾロに笑いかけた。ゾロも少しだけ笑う。

「ああ………そうだな」

そして一通り船を見終わった後、ツエルとゾロのもとにカクがやってくる。

「今、この船にいるのはお前さん達だけか？」

「はい、そうです」

「そうか」

「あの……メリー号はどうでしたか？」

「……ハッキリ言って、この船はもう直らん」

『……え？』

2人の声がハモった。

「本当か！？そりゃ……」

「わしゃあ本職じゃあウソは言わん」

「そ、それじゃあ………本当、なんですか？」

「残念ながら、な………船底の竜骨と呼ばれる船の命と言っていい部分  
分が、ひどく損傷してある。この船が次の島へたどり着ける可能性  
は………“ゼロ”じゃ」  
「そ、そんな………」

がつくりと膝をつくツエル。ゾロも信じられないような顔をしていた。

「ツエル……」

「では、わしゃあ仕事場に戻る。麦わら達にも知らせなくてはいいかんからの」

「はい……ありがとうございます」

俯いたまま、ツエルはお礼を言った。

カクは造船所へ帰って行く。2人の間には沈黙が走る……。そして柵に腰掛けたゾロが、メリーの船首に声をかける。

「メリーお前……本当にもう、走れねエのか？」

答えは返ってこない……。再び沈黙が訪れる。

やがて、ツエルが口を開いた。

「ルフィさんたち、どう思うでしょうか……」

「さあな……問題を起こしてなきやいいが」

「おいツエルちゃん！ ただいま~~~~~！！」

「サンジさん……とチョッパーさん？ お帰りなさいです」

落ち込んだ顔を見せまいと、出来るだけ笑顔で迎えた。だが、1  
人人数が足りないのが気になった。

「あの……ロビンさんはどうしたんですか？ チョッパーさんと一緒  
でしたよね？」

「それが……おれが本に夢中になっていて見失っちまったんだ」

「そうですね……あの、お2人とも」

『何っ？』

「その……」

ツエルが凄く言いにくそうな顔をしているのを見て、ゾロは彼女が何を言おうとしているのかわかった。

「メリー号は……もう直らないらしい」

『何イ！？』

2人がもの凄く驚いた顔でゾロを見た。ツエルは俯いてしまう。

「先程……船大工さんがいらっしやって、船を点検した後仰ってました」

「この船が……」

「金があつてもか！？……じゃあ……ど、どうなるんだ！？」

「さアな。最終的にはルフィがどう判断するかだ。造船所にいる3人で何らかの答えを出して来るだろう」

「そんな事言われても話が極端すぎるぜ……見ろ、船はいつもと変わらねエし……“東の海”<sup>イストブル</sup>からこんなところまで一緒に海を渡って来たじゃねエか」

「渡つて来たからこそだろ。人間なら波を越える度強くなるが……船は違う。痛みをただ蓄積するだけだ」

「腑に落ちねエ……ウソツプの奴、コレ聞いたら何て言うか……」

……

「おれ、メリー号が好きだぞー！！」

「……全員そうさ。だが、現状打つ手がねエそうだ」

「メリー号も……ロビンちゃんも心配……落ちつかねエ午後だ」

なんとも言えない雰囲気……船に流れる。

ふと、チョッパーが陸の方へ眼をやると……ナミが慌てた様子で走ってきた。

.....  
更なる心配事と共に。

第19話 壊れた羊と貧血娘（後書き）

《次回予告》

「メリー号はもう……直せねえんだよ!!」

「弁償しろ!! 弁償!!」

「大丈夫でしょ。チョッパも行っているし」

「おいウソツプ落ち着け!!」

「ああ!? 何すんだてめえ!!」

「ご……ごめんなさい……」

「やっと……見つけた……」

〈賣められた貧血娘〉

## 第20話 賣められた貧血娘（前書き）

K「Kと！！」

T「ツエルの！！！」

K & T 『作中ゲリララジオ！！略してゲリララ！！』

K「さあ始まりました“楊貴妃”！！今回は……ルフィとウソップの言い合いのところですよ」

T「何で……こんなことに……」

K「ですね。いつ見てもケンカとは嫌なものですね」

T「はい……」

K「でもね、ツエルちゃん。“ケンカするほど仲がいい”って言葉知ってる？」

T「え？まあ……知ってますけど」

K「だから、あの2人も大丈夫だって。元気出しな」

T「でも、仲がいいならケンカつてしないといませんか？」

K「いや……そんなことないよ」

T「Kさん？」

K「私はね……この言葉を身に染みてよく知っている人間ですから」  
T「え？どういうことですか？」

K「私は部活で吹奏楽をやっていたのですが、ある人物と非常に仲が悪かったんです」

T「それは大変ですね」

K「私はその人のことを最初はそんなに嫌ってたわけじゃなかったのですが……ある日を境にその人に無視されるようになりました。もちろん理由はわかりません」

T「かなりキツイですね……」

K「それでも何度か話しかけたりして頑張ったんですが一向に聞い

てくれないんですよ。で、結局私が退部するまでほとんど眼も合わせた記憶がないです」

T「私には耐えられないです……」

K「そして私が学んだことは、“仲が良くないとケンカは出来ない”ということですよ。仲がいいからこそ、言いたいことが言えるんです。仲がいい仲間でも、時には言い合いやケンカをしたりする必要ってあると思うんですよ」

T「Kさん……」

K「だから、見守ってあげましょう?」

T「わかりました。私、2人を見守ります!!」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!」

K「メールアドレスは、kakkey.com p k s p . j p  
です。 @に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってます!!」

K & a m p ; T 『 それでは第20話、どうぞ!!』

## 第20話 責められた貧血娘

2億ベリーが盗まれたのと、ウソップが大怪我を負わされたのをナミから聞き、ゾロ、サンジ、チョッパーの3人はウソップがいると言われた場所に向った。ツエルとナミはメリー号で留守番だ。今2人は船のメインマストの下にいて、辺りを警戒している。

「……ナミさん」

「何？」

「ウソップさん、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫ですよ。チョッパーも行っているし」

「あ、そうじゃなくて……」

「……え？」

ツエルが何を言おうとしているのかわからないので、ツエルの顔を見る。その表情は、何かを考えているような心配しているような表情だった。

「ウソップさんがもし動ける状態だったら、どうすると思います？」  
「動ける状態だったら……まさか……!!」

ツエルの考えが杞憂に終わればよかったが、そもいかなかった。帰ってきたルフィ達が言うにはウソップは、1人で2億ベリーを盗んだ犯人のアジトである“フランキーハウス”に乗り込んだそうだ。そこで、ボロボロにされていたウソップを発見した。憤怒したルフィ達はその勢いでフランキーハウスを破壊したそうだ。

ウソップは今チョッパーが診ており、ロビンを除くほかのメンバーは船室の外で待っていた。

日が暮れようとしていた頃、チョッパーが勢いよく船室から出て

きた。ウソップが目を覚ましたようだ。それを合図に全員船室へと入って行く。

「面目ねエみんな!! 大事な金を……俺は!!」

皆をみたウソップの第一声は謝罪だった。ルフィ達は気にするなと笑って言うてる。だが、ウソップはメリー号を強い船に改造することが出来なくなるだろうと嘆いていた。だが、ルフィが悩み抜いた末の案を言う。……なるべく明るい顔で。

「船はよ、乗り換えることにしたんだ。ゴーイングメリー号には世話になっただけどこの船での航海はここまでだ」

ルフィの唐突すぎる言葉に、混乱して何も言えなくなるウソップ。ルフィは構わず続ける。

「ほんでな、新しく買える船を調べてみたんだけど……カタログ見てたらまア1億あれば今よりもデカイ船が  
「  
「待てよ待てよ」

喋り続けるルフィに制止を求める。冗談じゃないと。

「やっぱり……俺があのだ2億盗られたから修理代が足りなくなったってことか!?!……一流の造船所はやっぱ取る金額も一流で  
「

「違うよそうじゃねエ」

「じゃあ何だよはつきり言え!! 俺に気イ使ってるのか!?!」

「使わねエよ!! あの金が盗られたことは関係ねエんだ!!」

「だったら何で乗り換えるなんて下らねエこと言うんだ!?!」

2人がヒートアップしていき、最早言い合いになってしまっていた。冷静になれ、落ち着けとゾロ達も止めに入るが2人は一向に落ち着かない。

「メリー号はもう……直せねえんだよ!!」

そしてルフィのこの言葉で静まり返った。ウソップは信じられないといった顔をしている。

「……………何言ってるんだお前……ルフィ」

「本当にそう言われたんだ。造船所で……もう次の島にも行き着けねえって!!」

「ハアそうかい……行き着けねえって………今日会ったばかりの他人に説得されて帰って来たのか」

「何だと!？」

1 拍置いた後、ウソップが叫んだ。

「一流といわれる船大工が達がもうダメだ言っただけで!!今まで一緒に海を旅してきた………どんな波も!!戦いも!!一緒に切り抜けてきた仲間を………お前はこんなところで見殺しにする気か! ?この船は………そんなものだったのかよ!!」

この船に乗る誰よりも………船を愛しているウソップだからこそ言う台詞に、一同は黙ってしまう。

次に口を開いたのは

ツエルだった。

「落ち着いてくださいウソップさん………傷が開いてしまいます」

なだめるように肩に置かれたツエルの手をウソップは振り払った。



ウソップの言葉を聞き、ツエルはビクツと身体を震わせて後ずさる。顔は蒼白で、眼は驚愕で見開いていた。そしてすぐに俯き、視線をさまよわせる。

「……………ごめん……………なさい……………」

「あつー！……………ツエルちゃんー！」

ツエルは踵を返すと船室を飛び出していった。その後をサンジが追う。

「待ってくれ！！……………ツエルちゃんー！」

ブル屋の前辺りで、ツエルは立ち止まった。息がもの凄く上がっている。サンジが追いつくと、膝を抱えてしゃがんだ。サンジはツエルの斜め後ろに立っている。ツエルの背中は……………いつも以上に脆く見えた。

「ツエルちゃん……………」

「そう、ですよね……………私、みなさんに迷惑ばかりかけてます」

「そんなことない！！……………みんなツエルちゃんにはいつも感謝してる！！掃除してくれたり、洗濯してくれたり……………俺の代わりに料理も作ってくれるじゃないか！！……………アイツだって、カツとなっ  
て言っちまっただけだっ」

「私……………いつもあんなに仲良くしてる、ルフィさんとウソップさんが……………言い合いするのを見たくありませんでした。仲裁しよう……………なのに、結果はこれです……………ウソップさんを傷つけました」

「そんなこと……………」

近づいて慰めようと歩み寄ったが、ツエルが泣いていることに気づき、立ち止まってしまった。ツエルはこらえきれなくなり、とう

とう顔を両手で覆う。

「……………なさい」

「え？」

「ごめ……なさい……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………ごめっ、な……………ふつく……………うええ……………ごめ、なさい……………」

「ツエルちゃん……………」

ごめんなさいと繰り返すツエル。だんだんと嗚咽の方が目立ち、終いには声を押し殺して泣き出してしまった。サンジは耐え切れなくなつて後ろから抱きしめた。ツエルの身体がビクツと震える。サンジが抱きしめた彼女の身体は想像以上に細く、冷たい。……………ありふれた表現だが、ほんの少し力を加えれば折れてしまうのではと思つてしまうほど。

「サンジ……………さん……………？」

「俺は……………ツエルちゃんを迷惑だなんて思ったことねエから！！他の奴らだつてそうだ……………だから、自分を責めないでくれ」

「……………ごめん、なさい。……………少し……………1人にしてください」

「……………ああ。……………じゃあ俺は、船に戻るよ」

「はい……………すみません」

ツエルの気持ちを尊重して、サンジは船に帰って行った。

サンジと別れた後、ツエルは裏町の歩道を歩いていた。頭の中はごちゃごちゃになっていて、上手く思考が働かない。

だからか……裏町のゴロツキ2人とぶつかって尻餅をついてしまった。

「ああ！？何すんだてめエ！！」

「ご……ごめんなさい……………」

「ごめんで済むわけないツシヨ！？ああ、コーヒーで服汚れちゃってるよ…………どうしてくれんの？」

「ほ、本当に…………ごめんなさい」

彼らの虚勢にすっかり怯えてしまい、縮こまって涙目になっていた。

「あーあ…………この服高かったのになア」

「弁償しろ！！弁償！！」

「あう…………その…………お金は…………」

「アアン！？持ってたねエのか！？」

「ご、ごめ…………なさ…………」

「おいおい君達、か弱い女性1人に対して2人がかりで恐喝とは…………関心出来ないな」

地面にすわって縮こまっていたツエルの後ろに、長身の男が立っていた。暗くて顔はよく見えなかったが、その男が2人のゴロツキに笑みを送っていたのはわかった。だが、ゴロツキ達も負けじと虚勢を張る。

「アア！？んだてめエは！？」

「私はただの通りすがりだ…………だが、彼女はちゃんと謝っているじ

やないか。もうその辺で許してあげたらどうだ？」

笑みを崩さず、優しく言う。

「それじゃ俺達の気が済まねエツつてんだよ！！」

「んだ！？ヤンのかコラ！？」

標的をその男に変えたゴロツキ。ツエルはこの状況に、ただオロオロしていた。男は一つため息をつく、ツエルに向かって言った。

「お嬢さん。少し離れていてください」

「……え？」

「すぐ済みますので」

「てめエチヨーシこいてンじゃねエぞオラアツ！！」

ゴロツキの片方が男に殴りかかる。だが、男はその拳を避けるどころか防ぎもせず、顔面で受けた。だが、ビクともせず余裕の笑みを浮かべている。ゴロツキは2人とも驚き目を見開いていた。

「軽い、軽いな。見本を見せてあげよう。……パンチはこうやるも

のだ……！！！！」

「ぐへアツ！！」

男が殴ってきたゴロツキの胸に拳をぶつけると、相手は吹っ飛び白目を向いて倒れた。もう片方のゴロツキは完全に怯えていた。男はそいつに微笑みかける。

「どうする？軽くやったから軽傷で済んでると思っけど……全力で相手しようか？」

ゴロツキは悲鳴を上げて逃げていった。男は見送ると、ツエルに歩み寄って手を差し伸べながら話しかける。

「大丈夫ですか？」

「……はい。……ありがとうございます」

ツエルは男に引っ張り上げてもらい、立ち上がる。その男の声が……何故か懐かしく感じるのは気のせいだろうか？

「もう日が暮れています。女性が1人で出歩くには少々危ない時間帯……で……」

座っている時は影になっていたのでツエルの顔が見えなかったが、立ち上がったことで民家の明かりに照らされて顔を認識できるようになった。彼は話しながらツエルの顔を見、驚愕の顔になり言葉が途中で切れてしまった。ツエルもどうしたのかと、長身の彼を見上げる。そしてその時、彼の“もしかして”が“確実”になった。

「やっと……見つけた……」

「……え？」

男の顔がどんどん緩んでいく。そして、男は急にツエルの両手を握った。

「ひゃっ!! な、なんですか？」

「探しましたよ……お久しぶりです……!!」

「ツエル殿!!」

第20話 賣められた貧血娘（後書き）

《次回予告》

「中将殿ー！！」

「はい。よろしくお願ひします」

「女性には一切興味がないと思つてたんだけどな……」

「落ち着いて下さい！！ツエル殿！！」

「（おい、見えないだろ！？）」

「もつとこ行つてたんですかッ！？」

「……：思い出しました。私の本当の名前と……：立場を」

〈海兵達と貧血娘〉

第21話 海兵達と貧血娘（前書き）

K「Kと!!」

T「ツエルの!!」

K & T 『作中ゲリララジオ!!略してゲリララ!!』

K「さあ始まりました“楊貴妃”!!今回も張り切っていきましょう!!」

T「おー!!」

K「さてツエルちゃん」

T「どうしましたかKさん？」

K「今、私の部屋の外では……雪が降ってます!!しかも結構積もってます」

T「おお!!ってKさんのお住まいでは珍しいのですか？」

K「うん。積もるほどの雪はすごく貴重ですよ!!もうテンションアゲアゲ!!」

T「Kさんは雪が好きなんですか？」

K「好きでもないし嫌いでもない」

T「よくそれでてんしょん?が上がりますね!!」

K「意味がわからないなら言葉を使わないの!!（ベシッ）」

T「あうう……って、話を逸らさないでください!!」  
K「簡単な理由だけど……雪景色って綺麗なのはいいんだけど、寒い」

T「ほんと簡単な理由ですね」

K「去年までは寒いのが強かったんですけどね……」

T「今は違ってますか？」

K「え?ああ、うん。あの頃と比べてだいぶ痩せましたからね。肉が落ちて暑さには強くなったんですけど逆に寒さが辛くて……」

T「あゝわかります。私も肉が薄いので寒いのにとても弱いです」  
K「胸の通気性抜群だもんね!!」

T「うるさいですよ!!」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!」

K「メールアドレスは、kakkey@pksp.jp  
です。 を@に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってます!!」

K&Amp;T『それでは第21話、どうぞ!!』

## 第21話 海兵達と貧血娘

「え？え？ええ！？」

突然のことで何がなにやらわからず、混乱するツエル。男はそんなことを気にする余裕もないくらい喜んでいた。

「あ……す、すみません！！私としたことがつい……喜びのあまりに我を忘れていたようです」

ツエルが戸惑っていることによく気づいた男はツエルの手を放し、苦笑いを浮かべて頭をかく。

「あ、あの！！……私を……私を知っているんですか！？」

「……ええ」

ツエルに微笑みかけて男は続ける。

「私は誰よりも貴女を知っていますよ。ツエル殿」

「じゃあ……じゃあ！！教えてください！！私は一体」

「そのことは、とりあえず落ち着いたところでお話いたします。……ついて来て下さい」

男はエスコートするようにツエルの肩に手を回した。ツエルは着いて行こうか迷った。会ったばかりのこと男を信用していいのかわか。……だが、助けてもらったから悪い人ではないだろうし、何より暗くて顔がよく見えないが彼の声が懐かしくてしょうがなかった。

結局ツエルはついて行くことにした。

男について行くこと数十分。中心街を2人は歩いてきた。中心街に入った辺りで街灯の明かりによって、ようやくその男の姿をはっきりと見ることができた。身長は少なくとも2mはありそうな中肉の長身で、少し長めな茶髪をオールバックにして後ろで一つに結いでいる。そして何より、結構なイケメンであった。どちらかと言えば優しく人の良さそうな顔立ちで、先程ゴロツキを吹っ飛ばしたような姿は見た目だけでは想像できないだろう。

中心街でも普段人が少ない場所に来た。そこで、海兵達がせわしなく動き回っているのが見えていた。

「中将殿ー!!」

「どこですかーッ!？」

「おや?……皆さん、どうしました?」

状況が把握できていないのんびりしたような声に反応して、海兵達の視線は一斉にその声の先……ツエルを連れだした男に集まった。どこか怒ったような呆れたような顔をして。

「中将殿!もうどこ行ってたんですかッ!？」

「くふふ……いえ、ちよつと散歩に」

「全く……あ、これマントです。部屋に置きっぱなしでしたよ?」

「ありがとうございます。……ですが、今回は任務で行ったわけではないので別に必要なかつたんですけどねえ」

「自覚を持ってくださいよ……将校の証なんですから」

「このマントあまり好きじゃないんですよね……」

「宿に世界政府の役人の方がいらっしゃってます。おそらく明日の件かと」

「わかりました。ご苦労様です」

「（海軍……中将！？）」

バサツと背中に『正義』の二文字が大きく書かれたマントを羽織る男。ツエルはその男の立場を知り、そのやり取りを呆然と見ていた。海兵の1人が、ツエルがいるのに気づき、近づいてきた。

「民間人の方ですか？ここはもう暗いです。早く家に帰ったほうがいいですよ」

「え？あ……その………」

「ああいいんですよ。その方は私の客人です」

『え？』

海兵達が全員一斉に声をあげ、ツエルと男を見比べる。男は海兵達の反応に少々不機嫌そうな顔をした。

「何か問題でも？」

「い、いえいえ！それは失礼しました！！」

「よろしい。……ではツエル殿。参りましょう」

「あ……う………はい」

一応海賊の仲間であるツエルは海兵達に囲まれた場所に長々といるのはイヤだったが、青キジが言っていた“記憶の鍵”とは彼のことでだろうと思ったので、目立たぬよう精一杯身を小さくしてついでに行った。

海兵達は去っていく二人を好奇心な眼差しで見送っていた。

「まさかあの中将に一般人の……しかも女性の客人が来るとは」

そして、1人の発言をきっかけに盛り上がりだす。

「確かに……あの人サン・ファルドでメチャクチャ逆ナンされてたけど誰にも振り向かなかったぜ？」

「女性には一切興味がないと思つてただけだな……」

「でも、あの女性もなかなか可愛いかったよな？」

「ああわかる。何っーか惚げつていうか、純情そうっていうか」

「どんな関係なんだろうな……」

ツエルを連れだした男が立ち止まったのは少し大きめの宿屋の前だった。

「私はここに宿泊しているんですよ。……それでは入りましょう」

そう言つて中に入っていく。少し遅れて不安そうにツエルも後に続いた。

ツエルが入つた時に見えたのは広いロビー。小奇麗でなかなか高価そうな場所だった。男はロビーで宿屋の従業員と思わしき人物と話をしている。ツエルはどうすればいいのかわからず、とりあえずキョロキョロと辺りを見回しながら男の方へ近づいていく。

「そうですね……なら仕方ありません。わかりました」

「すみません」

「いえいえ、こちらこそ無理を言つて申し訳ない。後はこちらで何とかしますので」

「はい。よろしくお願いします」

どうやら話しが終わつたようで、男は挨拶をして振り返り、ツエルに話しかけた。

「お待ちせしましたツエル殿。とりあえず私の部屋にご案内しましょう」

そう言っつてロビーから見て右側の廊下の一番奥の部屋まで歩いていく。鍵を差し込んで中に入ると、ベッドが2つある少し広めの部屋だった。男は椅子を出し、ツエルに座るよう促す。ツエルはお言葉に甘えて座った。

「あの……いいお部屋ですね」

「え？ああ、私には少し広すぎますけどね。私一人なのにベッドが2つあるのは無駄だと思いますか？」

「ふふ……そうですね」

「ツエル殿。夕食どうです？それとももう済ませていますか？」

「え？あ、いや……私はけっこうです。………お金ありませんし構いませんよ。ここは団体料金で宿を取っているので食事は無料なんです。それも踏まえてどうですか？」

そう言われ、少し考えるツエル。そう言えば、色んな事があつて夕食を摂る暇がなかったことに気づいた。

「じゃあ……お言葉に甘えて」

「わかりました。後で部下に運んでこさせますので」

「そ、そこまでしていただくわけには………」

「気になさらないで下さい。あと、本来ならこのままお話をしたかったのですが………」

今までにこやかに話していた男が、渋い顔をして頬をポリポリとかく。

「少し急用が出来てしまったので、ここで待っていていただいてもよろしいですか？」

「あ、はい……わかりました」

了承してもらえ、嬉しそうな表情になる男。

「そうですか。ありがとうございます。……では後ほど」

そう言って部屋を出て行った。

ツエルは1人残された部屋の中で、これからどうしようかと考えていた。

「（サンジさんはああ言ってくれましたけど……やっぱり、私はみなさんに迷惑をかけてます。……こんな貧血ばかり起こして、戦う度に倒れている私なんか……。私、出ていったほうがいいのでしょうか？）」

扉の反対側にある窓から外を眺めながらそんなことを考えていた。ウソップの言葉は、ツエルをとことんネガティブにさせていた。そんな時、ドアがノックされる。

「あ、はい」

「失礼します。食事をお持ちしました」

「すみません……ありがとうございます」

1人の海兵がお盆にのった食事を持ってきた。なるべく明るい表情になるよう努めて、笑顔でお礼を言うツエル。

「（おい、見えないだろ！？）」

「（しょうがねえだろ！？集まりすぎなんだよ！！）」

「（そんなこと言ったって……中将が女の客人を招いたんだろ！？せめて一目は見てみてエよ！！）」

部屋の外では、数人の海兵達がドアの隙間から部屋の中を覗き見  
ていた。ツエルはそのことにとっくに気づいていた。

「あの……部屋の外の方々は？」

「え？いやあ、その……貴女と話してみたいな」と思っていたりと  
か……」

「お話、ですか？」

「あ、いやいや！別にイヤだったら追い払うんで！！ハイ！！」

目の前にいる海兵が慌てた様子をしていたので、くすくすと笑っ  
てしまう。

「ふふ……あ、ごめんなさい。……別に私は構いませんよ？入って  
いただいても」

その言葉を聞き、一斉に海兵達は部屋の中に入った。

「すみませんツエル殿。お待たせいたしました。何をやっているの  
ですか君達？」

用を済ませ、部屋に戻ってきた男が見たのは、ツエルを囲む沢山  
の部下達だった。ちよつと不機嫌そうな顔をしている。男が戻って  
きたことに気づいた海兵達は、素早く姿勢を正して敬礼する。

「あの、この方々を怒らないであげてください。私が招いたような  
ものなので……」

「ええわかっていきますよ。では君達、私はこの方と話があるので出て行ってくれますね？」

笑顔だが、威圧するような声に海兵達は大慌てで部屋を出て行った。部屋の周りに誰もいないことを確かめると、男は扉を閉めた。

「長々とお待たせして申し訳ありません」

「いえ……あの方々とお話していただきましたので退屈はしませんでしたよ」

「そうですね。それは何より。……さて、本題に入りましょうか」

男は椅子を出し、ツエルと向かい合うように座った。

「クザンさん

青キジさんから聞きましたよ。……記憶をな

くされたそうですね」

「……はい」

「私のことも？」

「ごめんなさい……懐かしさを感じるのですが、名前までは」

ツエルの申し訳なさそうな表情に、男は安心させるような微笑みを浮かべる。

「いえ、懐かしさを感じていただだけでも嬉しいですよ。ツエル殿」

「そうですね？」

「ええ。……私の名前はマインハルト。“マインハルト・ファルス”と申します」

「マイン……ハルト……ト？」

ツエルは彼の名前を聞いて、驚き目を見開いた。

「知ってる……私、知ってる……!!」  
「本当ですか!？」

思わぬ発言に、マインハルトは身を乗り出す。

「あなたが、マインハルトさん？」

「そうです。……他には何か思い出しませんか？」

「いえ、特に……何も」

「……そうですか」

マインハルトは一つ咳払いすると、席に座りなおした。

「続けてもよろしいですか？」

「はい。お願いします」

「貴女は、以前とある島に任務で暮らしていました。ですが……ある日を境に、消息が不明になったのです」

「任務?……とある、島？」

「はい。その島とは、ここより少し先にある国、“ワルキア小国”です」

「ワルキア……？」

「貴女は消息を絶つ前に私に連絡をし、深刻な問題が発生したと仰っていました」

「任務……ワルキア?……うそ?……何で私、知って……いたっ……!!」

「どうしました？」

急に頭を押さえだしたツエル。マインハルトは心配そうに駆け寄った。

「なんですか……これ？」

「え？」

「どンドン……どンドン私の頭の、中に………何かが入ってきた………！！」

「落ち着いて……落ち着いて下さい！！ツエル殿！！」

ツエルは訳がわからず急に立ち上がる。その拍子に椅子は音を立って倒れた。マインハルトは落ち着かせようと背中を丸めて目線を合わせ、ツエルの肩を擦る。

「いや……！！……怖い、怖い！！」

「大丈夫ですから……ツエル殿」

マインハルトに聞かされた話はどれもこれも、何故かツエルに覚えのあるものばかりだった。そしてそれらが引き金となり、今ツエルの頭の中では、堰を切ったかのように情報が痛みとともに流れ出てきた。

床にへたり込んで頭を振るツエルを見て、マインハルトは膝をついて彼女の肩を抱いた。

ツエルは大きな身体、懐かしい匂いに包まれて、徐々に落ち着きを取り戻していった。

「大丈夫ですか？ツエル殿」

「………マインハルトさん」

「何ですか？」

「………思い出しました。私の本当の名前と………立場を」  
「………言ってみてください」

身体を放し、肩に手を置いて、マインハルトはじつとツエルの眼を見下ろした。ツエルは呆然とした、焦点の合わない眼で彼の顔を

見上げる。

「私の名は……ユラ。ユラ＝ツエペシユールミア。ツエルは偽名。そして……」

信じられない、信じたくないという表情に変わる。目には、今にも零れ落ちそうなくらい涙が溜まっていた。

「そして、私は」

## 第21話 海兵達と貧血娘（後書き）

### 《次回予告》

「準備はいいですか？」

「（あの女性は誰だ？）」

「何をしていらっしゃるのですか？」

「どいてください」

「……………ビンゴ」

「もう……………帰ります」

「我々には貴女の記憶が必要なのです！！」

〈諦めた貧血娘〉

## 第22話 諦めた貧血娘（前書き）

K「Kと!?!」

T「ツエルの!?!」

K & T「作中ゲリララジオ!?!略してゲリララ!?!」

K「さあ始まりました“楊貴妃”!?!今回もシリアス!?!」

T「そうですね」

K「なので、こっただけでも面白くしていきましょう」

T「了解です……そう言えば思ったんですけど、このコーナー始めてからお便りって来ましたか?」

K「……全然来ない」

T「悲しいですね」

K「でも、私は考えたんです!?!読者の方々からお便りをもらせる方法を!?!」

T「おお!?!それは何ですか!?!」

K「本物のラジオみたいに読者も投稿して楽しめる企画作りです!?!……ほら、大喜利みたいなのあるじゃないですか。ラジオに。読者の皆様に投稿していただき、それをここで発表したいな」とか思っているわけですよ!?!」

T「確かにそうですね……でもそう言うのって大抵景品とかあるじゃないですか?そこはどうするんです?」

K「ふっふっふ……そこも考えてますっ!?!」

T「ほうそれは!?!?」

K「投稿してくださった方には、“楊貴妃”に出ているオリキャラの中から誰か1人を指名してもらい、その人が返事を返します!?!ちなみに今出ているオリキャラはツエルちゃん、マインハルト氏、Mr.パーティ、アンスさんの4人です」

T「ありがちなパターンですね!」

K「私は信じている……では、今日のお題はこちら!」一秒間で世界ではなにが起こっている?』これで考えてもらいます」

T「ほう……」

K「ではツエルちゃんから」

T「え? ちよ、待つてください! 普通Kさんからじゃ」

K「やらねば……デバンヘラス」

T「そ、そんなあ……」

K「では、何が起こっている!」

T「ええつと……100種類以上もの生き物が絶滅しています」

K「誰がリアルな現実問題を叩きつけるって言ったの!? 笑えないよね!? 笑ったら人として最悪だよね!」

T「だってこれしか思いつかなかったんですもん! そういうKさんはどうなんですか!」

K「では、私のを言います」

T「お願いします」

K「上の人間に下の愚民が虐げられています」

T「何“してやったぜ”みたいな顔しているんですか!? Kさんのも笑えないじゃないですか!!」

K「笑えますよ……上の人間が」

T「やっぱりKさんは最低ですつ!」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!」

K「メールアドレスは、kakkey@pksp.jp  
です。 @に変えてくださいね」

T「たくさんメッセージ待ってます!」

K「前半に言ったように、リクエストを頂いたキャラクターでお返事します!」

K & a m p . i t 『それでは第22話、じじいー!ー!』

## 第22話 諦めた貧血娘

目覚めは……最悪だった。カーテンが閉まっておらず、眼を開けた瞬間日差しが焼け付くように眩しかった。太陽は東ではなく西に傾いており、すぐ近くのテーブルに置かれていた冷めたスープが、ツエルがどれだけ眠っていたのかを物語っていた。

「……………いたっ……………」

昨日急激に色々なことを思い出したせいで、頭痛が酷かった。そのせいで昨日は歩くことも難しく、ここに泊まることになったのだ。正確には、泊まるしかなかった。

彼は悪い人どころか、とてもいい人だとツエルは思い出していた。だから安心して泊まることも出来たのだが…………

「私、無断外泊してしまいました……………悪い子です」

ルフィ達のことか心配だった。それに、絶対に彼らに心配をかけてしまったと悔やんでいる。

ノックが聞こえ、ドアが開くとメインハルトが入ってきた。

「やあツエル殿。目が覚めましたか。調子はどうです?」

相変わらず彼は人のいい笑みを浮かべたまま話しかけてくる。その笑顔を見ると心が落ち着く。

ツエルも笑顔で返した。

「まだちよつと頭が痛いですけど……………もう大丈夫です。ご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、こんな迷惑の内には入りませんよ」

話しながら昨日はどこまで話したかを思い出そうとするツエル。  
昨日は……

「本当に……本当に思い出したのはそれだけですか!？」

「い、いたい………いたい、です………マインハルトさん」

「はっ………す、すみません」

ツエルが思い出した、自分の立場は合っていたようで、マインハルトはほっと一息ついていた。その後、マインハルトがツエルに様々な質問を繰り返して聞いたが、彼にとって本当に思い出して欲しい情報を彼女はほとんど思い出せずにいた。彼は驚愕し、取り乱してしまうほどだった。

「そう、ですか。………わかりました。今は思い出さなくても構いません。………ゆっくり思い出していきましょう」

「はい………」

「ツエル殿？ 顔色が優れませんが大丈夫ですか？」

「いた………い」

「え？」

「いつ………いたい………頭が………いたい………!!」

ツエルは頭を押さえてうずくまった。マインハルトは彼女のそばに駆け寄り、声をかける。

「大丈夫ですか!？ ツエル殿!？ ……くっ………やはり名乗るの

が早すぎたか……とりあえず、ベッドに」

そう言っただけでマインハルトは頭を抱えるツエルをベッドに運んだ。ツエルはまだ辛そうにしている。

マインハルトは取り乱すことなく、ツエルの頭を撫でてやり……静かに歌を歌っていた。

「……それが我らの調べ……天高く昇るのであれば、泣く事無く見送ろう……それが我らの運命……」

「（この歌……なんでしょう？安心……する）」

そのまま、ツエルは目を閉じた。

「……ル殿。……聞いていますか？ツエル殿」

「あっ！……ごめんなさい……ついぼーっとしてしまいました……」

マインハルトが何かずつと話しかけていたみたいだった。

「いえ、お気になさらず。昨日あんなことがあったのですから……それも仕方のないことです」

「そう……ですか」

「話に戻りますが……ツエル殿には今日から、私と一緒にいて頂きます」

「そうですね？」

予想外の一言に、思わず聞き返す。

「あの……もう一回言っていただけですか？」

「ええ、いいですよ。……ツエル殿には今日から、私と一緒にいて頂きます」

少しの間が、空く。そして……次の瞬間ツエルの悲鳴が響いた。

「ええええええええええええつ!？」

「な、何かおかしなことがありますか？」

「え、ちよ……まま待つてください!えつとその……今は記憶がないなりに生活があるのですが……」

「生活……ああ、麦わら海賊団のことですか」

「え？」

知っていないかと思っていた、ツエルが身を寄せている先を彼が知っていることに、言葉が詰まった。マインハルトは構わず続ける。

「青キジ大将から聞いていますよ。……貴女をあんな危険な場所に置いたままにしておけるわけがありません」

さつきまでは打って変わって、真顔で威圧感のある声で言った。

ツエルは彼の変貌ぶりに何も言えなくなる。

「海賊とは犯罪者です。法の下での保護はありません。……貴女は重要な人材です。貴女自身が思っているよりもね。だから……貴女をいつ死んでもおかしくないような状況に身を置かせるわけにはいかないのです」

「そ、そんな……私はあのまま……今までのようにルフィさんたちのお側にいちゃいけないっておっしゃるのですか!？」

マインハルトの言っていることは正論だったが、ツエルはこのまま彼らと別れるなんてイヤだった。

「こればかりは私でも譲れません。強制的にでも貴女を連れて行きますよ」

「そ、そんな……いやですっ!!もっ……帰ります」

そう言っただアのほうへ歩き出すツエルだが、マインハルトが前に立ち塞がった。約50cmもの差があるが、ツエルは精一杯睨み上げる。

「どいてください」

「貴女を帰すわけにはいきません……貴女が必要なのです」

「そんなの知りませんっ!!」

脇をすり抜けて通り抜けようとするが、右腕をガツチリと掴まれてしまった。

「い、たい……いやっ……放してください!!」

「いけません……我々には貴女の記憶が必要なのです!!」

「いやっ……誰か……誰かあ!!」

「……仕方がない」

「やっ……!!……」

想像以上に抵抗する彼女にやきもきしたマインハルトは、彼女の腕を思いつきり引つ張って身体を自分の方へ引き寄せると、鳩尾に拳を当てた。ツエルは息を詰まらせ、そのまま気を失う。力なくだらりとなった彼女の身体を抱き上げると、愛しそうに彼女の顔を見つめる。

「こんなに青白くなってしまって……血をあまり搦っていないかったのですね……………」

「中将殿！！大丈夫で……何をしていらっしやるのですか？」

そこへ、海兵が1人部屋に入ってきた。どうやら言い争う声が聞こえたので心配になったようだ。

「ん？いやなに……気にしないでください。それより、準備はいいですか？」

「はい。大丈夫です」

「そうですか。では、全員チェックアウト。これから“ブルーステーション”に向かいます」

「了解です！！」

敬礼して海兵は部屋を出て行った。そして、ツエルを両手で抱えたマインハルトも部屋を出て行った。

宿を出て、マインハルト達がブルーステーションに着いたのは日が暮れた頃。ブルーステーションには世界政府の役人と海兵が多数控えていた。その中にはロビンの姿も。ロビンもツエルも、互いに互いの姿に気づかなかったようだ。

すでに目を覚ましていたツエルは、マインハルトのそばで俯いていた。肩に手を回されている状態なので、逃げることも出来ない。いや、逃げる気ももうなかった。

昨日自分が言われたことを冷静に考えると、あそこにはとてもい

られない。サンジの言うとおり全員が全員ツエルのことを迷惑だと思っではないだろう。だが……今までの自分の行動を思い返してみたら、どうだ？ 普段は戦おうとはしないで、戦う時はいつも頭に血が上っている状態で、不意を突かれたりして大怪我を負って皆に迷惑をかける。

ルフィは海賊王になるために旅をしていると言っていた。なら、こんな足手まといはないほうがいい。……そう結論付けた。

それに、マインハルトに「貴女の立場を知った彼らがどんな反応すると思いますか？」と言われてしまっっては……正直怖くて戻れなかった。

ちなみにツエルの恰好はいつもの戦闘服だが、その上に顔まですっぽり覆うマントを羽織っていた。マインハルトが風邪を引かないようにと用意してくれていたのだ。

2人は無言だったが、周りにいる世界政府の役人や海兵達は好きに雑談していた。

「（あの女性は誰だ？）」

「（ああ……なんでもマインハルト中将の客らしい。本部に連れて行くみたいだぞ）」

「（本部に！？……あの子は一体何者なんだ？）」

「（さあな………中将に聞いても、その内わかると言うだけで何も教えてくれないんだ）」

そして、少し離れた建物の影に、タバコを吸っている人物がいた。

「……………ゴング」

## 第22話 諦めた貧血娘（後書き）

### 《次回予告》

「侵入者です……」

「何じゃ？気でも触れたか？」

「逃げる！？」

「お前……いいのか？」

「あの人のことをあまり悪く思わないであげてください」

「貴方の決死の行動も無駄に終わってしまいましたね」

「お嬢ちゃん……アンタは罪人じゃねエのか？」

（口を閉ざす貧血娘）

### 第23話 口を閉ざす貧血娘（前書き）

K「Kと！！」

T「ツエルの！！！」

K & T 『作中ゲリララジオ！！略してゲリララ！！』

K「さあ始めました“楊貴妃”今回も楽しみですねー」

T「そうですねー」

K「さて、前回のアレは反響が……ありませんでした」

T「ざ、残念でしたね……」

K「でも私は諦めない！！読者<sup>リスナー</sup>の皆さんと楽しくやるんです！！」

T「おお！！頑張つて下さい！！」

K「では、今日のお題はコチラ！！“新しく作られた映画。あなたはその映画の試写会を見に行き、インタビューに答えることになりました。その時、映画を見た感想を、どういいますか？”これで考えてもらいましょう」

T「結構幅広いですね。ジャンルの指定はないんですか？」

K「ありません。では、ツエルちゃんどうぞ！！」

T「また私からですか！？……もう。えっとお……『おもしろかった！』」

K「何それ？」

T「よくあるじゃないですか……CMとかでも」

K「それ圧倒的に小学生低学年以下の子供がいうことだよね！？子供！？アンタ子供！？」

T「うるさいですよ！！じゃあKさんはどうなんですか！？？」

K「ふっ……嘗めないでくださいね。こういうのはですね、感想を聞いた人が見たくなくなるような事を言わなきゃですよ」

T「それはそうですね」

K「だからこうです!!..... 『イヤッホオオオウ!!ビバ!  
!アブラ虫イイイアツ!!』」

T「ああ..... 映画事態には興味がないけど内容だけ凄く気になりま  
す.....!!」

K「でしょ?」

T「なかなかやりますね.....」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読  
者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!」

K「メールアドレスは、k a k k e y - c o m e p k s p : j p  
です。 を@に変えてくださいね」

T「たくさんメッセージ待ってます!!」

K「もちろん今日のお題の答えも待ってます!!」

K & a m p ; T「それでは第23話、どうぞ!!」

### 第23話 口を閉ざす貧血娘

政府関係者や海兵らしき乗らないのと、アクア・ラグナが接近中と言ったこともあり海列車は予定よりも少し早めに出航することになった。列車の準備が整い、CP9の面々が到着すると全員乗り込み始める。海列車の車両は全部で7車両。その中で、ツエルとロビンは第1車両に乗ることになった。そして、そこでお互いの姿を確認することとなる。

「……ロビンさん？」

「ツエル……貴女、どうして？」

お互いに驚いている。ロビンはツエルを連れてきたメインハルトの方を向き、睨みつける。

「どういうこと!? 約束と違うじゃない!!」

「約束? ……ああ、CP9と交わしたアレですか。ご安心下さい。約束はちゃんと守っていますよ。ツエル殿には……任意で来て頂いたのです」

「え? ……」

わけがわからないといった様子でツエルの顔を見る。だが、ツエルは気まずそうに目を逸らした。

「ではツエル殿。私は第2車両の方にはいますので何かありましたら申しつけ下さい。……ああそれと、この車両からは出ないようお願いしますね」

会釈してメインハルトは去って行った。バカ丁寧な対応に、呆気

にとられた。ツエルに事情を聞こうと振り向くが、彼女はさつと顔を背けると第1車両の前方の席に座った。その背中が……聞かないで欲しいと言っているように見えて、ロビンは何も言えなくなった。そして……海列車は発車した。

出航してからしばらくした頃、後ろの車両から慌てた様子の海兵がやってきた。マインハルトの部下だ。

「中将殿!」

「どうかしました?」

「侵入者です……第7車両と第6車両の役人がやられました」

「……ほう」

優しい顔をしていたマインハルトだが、目が少し釣りあがった。周りにいる、CPも含めた全ての人達に寒気が走る。

「ふむ……となると、彼女の仲間ですね。……落ち着いて対処して

下さい。侵入者は車両内には限りません。外にも注意を払って下さい」

「はっ!」

そう言っつて海兵は走り去る。マインハルトは何てこと無いような顔に戻り、椅子に座った。

「お前は加勢しなくていいのか?」

「ん?くふふふ、私は部下を信じてますからね。……まあ、いざと

なつたら貴方達もいますから安心です」  
「お前自分で動く気は無いのか……」

ルッチが呆れたような声をするがメインハルトは気にした様子も泣く、ただ微笑みを浮かべたまま窓の外を眺めていた。  
そして、再び沈黙の時間が流れる……………。

「……………くふふふ」

「何じゃ？気でも触れたか？」

「いえいえ、想像以上に侵入者はやるようですね」

「……………どう言う意味だ？」

「騒ぎ声がもうすぐそこまで聞こえる……………」

「……………？」

「ふむ……………ちよつと席を外しますね」

そう言つて第1車両に足を進めたメインハルト。CP9の面々は、彼の行動がよくわからなかった。

第1車両。メインハルトが入ってくる少し前。窓から侵入してきたそばキングによって、ツエルとロビンは向かい合っていた。そばキングは2人に脱走を勧めるが、2人ともそれを拒否する。特に、ツエルに至ってはここに居る理由を話そうともしない。

「何でここにお前はいるんだよ!？」

「……………言いたくありません」

「何で言いたくないんだ!？」

しつこく食い下がってくるそげキング。ツエルは……重い口を、  
少しだけ開いた。

「私には……みなさんと旅を続ける“資格”も“価値”もありません。  
ん。……昨日、そう思いました」

「昨日って、ウソップ君の言った……？」

「それもあります……昨日すぐ隣りにいらっしやるマインハルト  
さんと出会って、私の記憶が……ほとんど戻ったんです」

『え！？』

まさかこんな返事が返ってくるとは思わず、2人はかなり驚いた。

「だったら尚更戻るべきじゃあ……」

「……怖いんです」

「怖い？」

「私は……本来みなさんとはいてはいけない人間だったんです。そ  
れを知ったみなさんが、どんな顔をするのか……想像するだけ  
でも怖いんです……」

「ルフィ達がそんなことを気にすると思ってるのか!？」

「それだけじゃないんですよ!!私は、昨日考えたんです……  
……私が今までどれだけみなさんに迷惑をかけたか。普段は戦わない  
くせに怒りに任せて戦ったと思ったなら隙をつかれて重症を負う。私  
は、ウソップさんの言うとおり……迷惑ばかりかけている役立たず  
なんですっ……!!」

「アレは……」

カッとなって言ってしまったことを後悔した。あの時のことがま  
さかこんなことになるなんて……。

どう言おうか迷っていた頃、第2車両とつながる扉からノックが

聞こえてきた。

「ツエル殿？ロビンさん？入りますね」

扉を開けて入ってきたマインハルト。そげキングは咄嗟にロビンのマントの中に隠れた。

「おやおや、席を向かい合わせてお話中だったのですか？もしかしてお邪魔でした？」

「い、いえ……大丈夫ですよ。マインハルトさん」

「（こ、コイツがツエルの記憶が戻ったきっかけか！？）」

マントに隠れたまま、さっきのツエルの言葉を思い出した。

「それなら結構。……では、侵入者の方にはご退場を願えますかな？」

え？と2人は顔を上げると、そこには少し怒っているような笑顔のマインハルト。そげキングの心臓はもうバクバクと音を立てていた。……もう、奇襲しかないのだろうか？そう考えていた時、

「ふむ……これでは埒が明きませんね。ちょっと失礼」

マインハルトはロビンのマントを捲ると、中からそげキングを引っ張り出した。

「うわっ！！何しやがる！？放せエ！！」

「落ち着きなさい……」

そう言うと第2車両まで歩く。中には、CP9に加えてサンジ、

フランキーがいた。マインハルトはそげキングを彼らの方に投げた。

「返却します」

「うわ!!」

そげキングはサンジ達の丁度手前に落ちた。

気になったのか、ツエルとロビンはマインハルトのすぐ後ろまで来ていた。

「お2人とも……危険ですので下がって下さい」

「でも……」

「フランキー君!! 列車を切り離れたまえ!!」

「何すんだよ!?!」

「逃げる」

「逃げる!?!」

ただ逃げるだけならよかったのだが……ただでは逃げてくれなかった。そげキングは煙幕を張り、そして……

「ニコ・ロビンとツエルは……頂いたア!!」

2人を抱えて連れ出した。

だが、CPの面々も黙って見ているわけは無い。カリファがムチで第3車両を絡め取り、ブルーノがそれを引き寄せる。

「お前……いいのか?」

「何がです?」

「アンタのお姫さんが攫われたんじゃないぞ?」

「先程言ったでしょう? 貴方達なら安心です……おあ!?!」

ルツチ、カクと話していると、フランキーが第3車両の壁に体当たりして無理矢理車両を切り離れた。床に伏せたまま不適な笑みを浮かべるフランキーに、マインハルトは話しかける。

「くふふ、カティ・フラム。なかなかやりますね」

「ああ！？何だデメエは！？」

「私はマインハルトと申します。以後お見知りおきを」

「あ、ご丁寧にどうも」

「ですが……貴方の決死の行動も無駄に終わってしまいましたね」

「は？……！！」

マインハルトが指差す先には、ブルーノに連れられたツエルとロビンがいた。フランキーは愕然としている。

「くふふふ……だから言ったでしょう？貴方達なら安心だと」

満足気にルツチに視線を送るマインハルト。CPの面々は呆れてため息をついた。

その後、罪人であるフランキーとロビンは手錠をかけられ、ツエルと一緒に第1車両に入れられた。1人だけ手錠をしていないツエルを見て、フランキーが話しかける。

「お嬢ちゃん……アンタは罪人じゃねエのか？」

「……そう、ですね」

「なんでここにいるんだ？」

「私は……マインハルトさんについて来たんです」

「マインハルト……さっきのいけ好かねエ奴か」

「あの人のことをあまり悪く思わないであげてください。私を思う

ばかりに、ついやりすぎてしまっんですよ……………昔から  
「昔から?」

言い過ぎた。はっとそう思い、もう話しは終わりだとばかりに席を移動したツエル。

海列車は数々の傷跡を残しながら……………ついに“不夜島” エニエス・ロビーにたどり着いた。

## 第23話 口を閉ざす貧血娘（後書き）

### 《次回予告》

「私は、彼らを信じます……」

「ほう……ちなみにどんな犯罪を犯したんだ？ソイツは？」

「な、なんだ……アイツの殺気は……」

「ツエル君が言っていた、記憶を取り戻したきっかけの男だ」

「ロビンだけじゃねエ！！ツエルも取り戻すんだ！！」

「チャパパー是非とも道力を測ってみたいものだ」

「いい仲間を持ちましたね……」

〈暴露された貧血娘〉

## 第24話 暴露された貧血娘（前書き）

前回のお題。

“新しく作られた映画。あなたはその映画の試写会を見に行き、インタビューに答えることになりました。その時、映画を見た感想を、どういいますか？”

カルテノイドさんの回答

『まさか主人公が死ぬとは思いませんでした』

ツエルのコメント

『ネタバレですかっ！？前の人達の感想を聞いて観に行こうかなって思っていた私の思いを返してくださいよう！！』

K「Kと！！」

T「ツエルの！！」

K&amp;T『作中ゲリララジオ！！略してゲリララ！！』

K「さぁ始まりました“楊貴妃”！！今回はやっと他のCP9とのご対面です」

T「そうですねー」

K「さてツエルちゃん。早速今日のお題つくよー」

T「何だかテンション高いですね。どうしました？」

K「お題に対する回答が来たから嬉しくって……つい」

T「わからなくもないですが……自重してくださいね？」

K「了解であります！！では、今日のお題はコチラ！！“宇宙人が地球にやってきて最初に言った一言は？”これで考えてもらいます……ではツエルちゃんどうぞー！！」

T「うーん……………」ワ〜レ〜ワ〜レ〜ハ〜、ウ〜チュ〜ウ〜

「ごほっー！！ごほっー！！」

K「咳き込むくらいなら首チョップやめなよ！！アンタ身体弱いんだからー！！」

T「うう……………ずびばせん」

K「今度は私の番ですね」

T「そうですね。ではどうぞー！！」

K「まっかせなさーい……………」『戦闘力たったの5……………ゴミめ』

T「ドイツツー？まさかのドラゴンールのドイツツですか！？」

K「そつ いやーいきなりこんなこと言われたらヤダね」

T「……………そうですね」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞー！！」

K「メールアドレスは、k a k k e y - c o m e p k s p . j p p  
です。 を@に変えてくださいね」

T「たくさんのお題のメッセージ待ってますー！！」

K「もちろん今日のお題の答えも待ってますー！！リクエストのオ  
リキャラは、ツエルちゃん・マインハルト氏・Mr. パーティ・ア  
ンズさんに加え、作者KでもOKですー！！」

K & a m p ; T 『 それでは第23話、どうぞー！！』

## 第24話 暴露された貧血娘

エニエス・ロビーに到着すると、一向はすぐに司法の塔へ向った。長官室では、CP9の長官スパンダムや、他のCP9のメンバーであるフクロウ、ジャブラ、クマドリがすでに控えていた。マインハルトとツエルはそこに行く義理は無かったが一応挨拶だけでもしておこうと思い、ルッチ達について行った。

「海軍本部中将……“改剣”のマインハルトが何の用だ？」

“改剣”とはマインハルトの異名だ。スパンダムはマインハルトのことが苦手なのか、苦い顔をして睨みつけている。マインハルトも彼のことを快く思っていないようで、笑顔ではあるが何か違っていた。

「いえ、海列車では彼らの世話になりましたから……一応挨拶だけでもと」

「ああそうかよ……で？テメエは何でここにいるんだ？バスターコールに備えて待機しているはずじゃなかったのか？」

「事情がありましたね……私の代わりにモモンガさんが入ることになりました。そして、私がここにいるのはこの方……ツエル殿の護送です」

マインハルトの後ろにずっと隠れていたツエルを、訝しげにみるスパンダム。ツエルは居心地悪そうにしている。

「ほう……ちなみにどんな犯罪を犯したんだ？ソイツは？」

ここに来る海兵や役人以外は全員犯罪者だと思ってしまうので、

そう尋ねる。だが、そう聞かれたマインハルトはカツと眼を開き、笑顔を崩して怒りの形相へと変わった。

「誰が犯罪者だこのウジ虫がアツ!!」  
「ヒツ!!」

凄まじい殺気が発せられ、その場に居る全員が固まる。スパンダムはすっかり怯え、CP9の面々も緊張した面持ちになった。だが、怒りのマインハルトをツエルがなだめた。

「お、落ち着いてくださいマインハルトさん。私は気にしていませんから……」

「……………そうですか。おいウジ虫、今日のところはツエル殿に免じて許してやる。だが次は無い、と言うことを覚えておけ。……………ではツエル殿。正義の門に船が到着するまで、他の部屋で待機しましょう。ついて来て下さい」

「は、はい……………では、失礼します」

ツエルになだめられると、いつも通りの笑顔に戻った。マインハルトはよっぽどこにいたくないのか、部屋を変えることにする。ツエルは律儀にお辞儀すると、歩いていくマインハルトについて行った。CP9の面々に、安堵の空気が流れる。

「な、なんだ……………アイツの殺気は……………」

「チャパパー是非とも道力を測ってみたいものだー」

「どうぞ、お座り下さい」

「はい……ありがとうございます」

今、彼らがいるのは長官室のすぐ上の階にある部屋だ。そこに2人は向かい合って座っている。マインハルトは笑みを浮かべ、ツエルは暗い顔で。

「ツエル殿、何か私に聞きたいことがあるみたいですね」

「えっ？」

彼の突然の言葉に驚くツエル。

「くふふ……ほとんどの記憶を取り戻した貴女ならばわかるでしょう？何年一緒にいたと思っっているのです？私と貴女は」

「そう、ですね。……マインハルトさん」

「はい？」

「これからどうなるんですか？……ロビンさんは」

思わぬ名前が出てきて、今度はマインハルトが驚く番だった。

「おや、てつきり私は貴女の今後について聞いてくるかと思ったのですが……」

「確かに気になりますが……それよりもロビンさんが気になります」

わかってはいたが、どうやら彼女は相当麦わら海賊団に惚れ込んでいるみたいだ。一応マインハルトについて来ているが、内心ルフイ達の所に戻りたいと思っっているのだろう。彼女の表情を見れば、マインハルトには手に取るようにそれがわかった。……だからそ気に食わない。長年、一緒にいた自分との絆を思い出せずにいるツ

エルに、少し焦りと不安を感じていた。  
だが、それを表情に出さないのが、彼の凄いところなのだろう。

「ニコ・ロビン……彼女がここにいる理由を教えましょうか？」  
「……いいんですか？」

構いません。そう言ってロビンがここにいる理由は、ルフィ達が  
ウォーターセブンから無事に出航できることと引換えに、自分の身  
を海軍に引き渡したことだとマインハルトは話した。そして、今後  
彼女に待っているのは苦痛の日々だということも。

「そんな……ロビンさん………」  
「私もこんなやり方には賛同できないのですが……あ、今言ったこ  
とは内緒でお願いしますね」

マインハルトは、たとえ相手が犯罪者でもやってはいけないこと  
はあると思っている。今回のスパンドムのやり方には、一切納得出  
来ていないようだ。マインハルトは立ち上がって、窓に歩み寄った。

「じゃあ、ルフィさんたちは安全なんですか？」

「それが、どうもそうは行かないみたいですね」

「……え？」

「来て下さい………あそこ、見て下さい」

立ち上がって歩み寄ってきたツェルに、窓から裁判所の屋上を指  
差す。そこには……CP9のブルーノと戦っているルフィがいた。

「ルフィさん!？」

「どうやら彼らは、貴女方を連れ戻しにここまで来たようですね。  
捕まったら連行されるといいうのに」

「で、でも……それじゃあ約束と違うのでは!？」

「スパンダムという男を、先程見たでしょう?あの男はきっとこう言うはずです、“彼らは無事ウォーターセブンを出航してここまで来た”と」

「そ、そんなこじつけが通るわけが」

「それが通ってしまうのですよ……奴はそういう男です。……  
ツエル殿。質問してもよろしいですか?」

戸惑い、視線をさまよわせるツエルと向かい合う。真剣な顔で。

「な、なんででしょう?」

「彼ら……麦わらの一味はここまで辿り着くと思いますか?」

「……はい」

迷いのない、返事だった。

「彼らと旅をして、私は彼らの強さを知っていますから」

「そうですね……では、ここからが本題です。これは理屈、立場、思考など全てを振り払い、本心に従って答えて下さい」

「はい……」

より真剣な顔になるマインハルト。ツエルも真剣な表情をしている。

「貴女は……彼らとまだ旅を続けたいですか?」

「それは……でも」

「言ったはずですよ?本心で答えて下さい」

ツエルは目を逸らしたが、マインハルトの言葉にはとなり、下唇を噛んで俯く。

「……たいです」

「もう一度……お願いします」

「私……まだルフィさんたちといたいです!!」

目に涙を溜めながら、精一杯答えた。マインハルトはふつと息を吐き目を閉じ、窓から離れ、ツエルに背中を向ける。思考をまとめると、振り返った。

「では……2つ選択肢を出しましょう」

「選択肢？」

「はい。本来なら貴女には、これから私と一緒に本部に来ていただいて、Dr.ベガパンクという科学者が発明した薬を使って、貴女がまだ思い出せていない重要な記憶を取り戻していただく予定でした。これが1つ目の選択肢です。そして2つ目……もし麦わらの一味がニコ・ロビンの奪還に成功したら、貴女は彼らと旅を続けていただいても構いません」

「えっ!？」

まさかの案に、驚く。

「但し、その場合私も彼らをあらゆる手段で妨害します。私はこれでも一応海軍本部中將ですのでそれなりに戦闘力はあると自負しますので、CP9に加えて私が彼らの殲滅に加わった場合、彼らの生存率は破滅的と言っても過言では無いでしょう。……以上のことを含め、今選んで下さい。」

記憶を重要なところが抜けているとはいえ、ほとんどの記憶が戻っているのでマインハルトの強さはわかっていた。……それで

「私は、彼らを信じます……」

真つ直ぐ、マインハルトを見つめた。

「わかりました。……ふむ、ちょうどいいですね。ルフィ海賊団全員集合しています」

窓から外を見ると、裁判所の屋上に全員いた。どうやら跳ね橋が下りるまで待っているようだ。

「下に行きましょう。ついてきて下さい」

「わかりました」

ツエルを伴って、マインハルトは再び長官室へ降りていく。壁には大きな穴が空いており、その外側にあるバルコニーにCP9の面々とロビン、フランキーがいた。

ロビンは膝をついてバスターコールの悲惨さを語っている。大方、スパンダムが軽い口調でバスターコールをかけるとも呷ったのだろう。そして、ロビンはルフィ達に、自分が抱えた闇、そしてその闇のせいで彼らにいつか重荷に思われてしまうのだ怖いのだと言うことを伝える。

「ロビンさん……」

「……」

2人はバルコニーには出ないで、長官室のなかで様子を見守っていた。そげキングが世界政府の旗を打ち抜いた時も。

「ロビン！！まだお前の口から聞いてねエ……“生きたい”と言え

エ！！！！！」

その言葉を聞き、ロビンの目から止め処ない涙が溢れてくる。

「生きたいっ！！私も一緒に……海へ連れてって！！」

その言葉を聞き、満足そうにルフィは口角を上げた。

マインハルトはツエルに長官室から出ないように言うと、バルコニーへと出てきた。………拍手をしながら。

「くふふふ………素晴らしい。素晴らしい絆だな。麦わらの一味の諸君」

「何だお前は！？」

突然現れたマインハルトに、一同は訝しげな視線を送る。だが、サンジとそげキングは声を上げた。

「あ、アイツは！！」

「知っんのか！？そげキング」

「ツエル君が言っていた、記憶を取り戻したきっかけの男だ」

「やあ君達。列車では私の部下が随分世話になった」

あくまで友好的な笑みで、話しているマインハルト。だが、ルフィ達はそれとは逆に厳しい表情だった。

「オイテメエ！！ツエルちゃんは無事だろうな！？」

「安心しなさい………あの方に私は手を上げることが出来ない」

「………どういふこと？」

そして今、彼がさっき言った“あらゆる手段を用いても彼らを妨

害する”行動を実行する。笑みを消し、真剣な顔にまた戻る。

「君達はニコ・ロビンを取り戻しに来た……そうだな」

「ロビンだけじゃねエ!! ツエルも取り戻すんだ!!」

「悪いがそれは諦めてくれないか? ツエル殿は君達と一緒にいるべき立場の人間ではないのだ」

「それはツエルも言っただけ……どういふこと!？」

すぐ横にいる、ロビンが聞いてきた。ルフィ達も同じことを思っていたので、黙ってマインハルトの次の言葉を待っている。

「……いいだろう。そこまで言うのなら、君達に教えようじゃないか!! 彼女の立場を!!」

「待ってください!! 言わないでください!!」

長官室から、ツエルが出てきた。マインハルトが言わないように妨害しようとする。

「ツエル殿、ここは危険です。下がっていただきます」

「なんで……なんで言う必要があるんですかっ!？」

「これも貴女のためです……カリファ、ツエル殿を少し抑えていて下さい」

「……了解」

「いやっ!!………放して………放してくださいっ!!」

さっきの件があったので恐る恐るだが、カリファはツエルの両手を掴んで動けなくした。スパンダムは面白そうな視線を送っている。

「さて……君達、教えてやろう。この方の立場と言うものを!!」

「やめて!!……いわないで!!」

「彼女の所属団体は世界政府直下海軍本部。地位は……………中佐だ  
！！」  
「……………え？」

ルフィ達は愕然とした様子で、泣きじゃくるツエルを見ている。

「ちなみにツエルと言う名前は海軍に入る際に、身元が割れないように作った偽名だ。海兵だと言うことは彼女の一面に過ぎん！！」  
「や、めて……………マインハルトさん！！それは……………それはいわないで  
！！！」

「この方はグランドラインに現存する国、ワルキア小国の前女王、  
ユラッツエペシュルルーミア様だ！！！」

「……………え？」

『何イイイイイ！！！？？』

驚きの声が、ルフィ達だけでなくCP9からも上がる。

「じよ、女王様だったのか……………」

「……………聞いたことがある」

「ナミ？」

「王族のほとんどが病気で死んで……………15歳で国の女王になった少女の話」

「まさかそれが……………ツエルちゃんだったのか？」

当時、世界中で話題になった出来事だった。あまりにも若すぎる女王の誕生……………まさかそれがツエルだとは誰も思わないだろう。写真すら出回っていなかった、世界会議でしかお目にかかれない女王なのだから。

「ほう、よく知っているな。現在はユラ様の弟君であるブラム様が

国を治められている……これが君達と彼女の間にある壁だ！！彼女は君達に知られ、疎ましく思われるかも知れないと怖かった。さあ！！これでも君達はユラ様を取り戻したいか！？」

「当たり前だアアアツ！！」

「……ルフィさん？」

ルフィの答えは即答だった。

「ツエル！！バカかオメエは！？俺たちがそんなの気にするわけねエだろ！！」

「で、でも……私海兵なんですよ！？それに……」

「そ、そうだ！！俺たちの仲間はちよつと気の弱い優しい女の子だ、ツエルちゃん！！立場なんて関係ない！！」

「でも……でもお……」

「ツエル……お前はどう思っているんだ！？俺たちといたいのかいたくないのか！？」

ツエルは、マインハルトの顔色を伺うように視線を送る。マインハルトは、優しい顔だった。

「自分の……本心に従って下さい」

ルフィ達は、ツエルに言葉を送り続けている。そして出した答えは……

「私も……私も一緒にいたいですっ！！」

「よしッ！！」

「絶対助けに行くからア！！」

その様子を見て、マインハルトは踵を返してスパンダムに言った。

「スパンダム……今回の戦い、私も参加しますよ」

「……お、おお！！そうか！！よし、やっちまえ！！」

能天気嬉しがるスパンダム。それもそうだろう。海軍本部中將といえは、かなりの戦力だ。

マインハルトは歩いてツェルの脇を通り過ぎながら、声をかける。

「いい仲間を持ちましたね……」

「……はい。マインハルトさん」

そして、長官室へと入って行った。

## 第24話 暴露された貧血娘（後書き）

### 《次回予告》

「負けは時間のロス……全員死んでも勝て!!」

「お前は……さっきのヤツ!!」

「羨ましいぞコノヤロー!!」

「ええ、全くその通り……」

「お、オイ……あの剣」

「よしなさいアンタ達!!」

「私は君達をあらゆる手段を用いて妨害する」

〈恐るべし中將の力〉

## 第25話 恐るべし中将の力(前書き)

前回のお題

“宇宙人が地球にやってきて最初に言った一言は？”

ウーバムさん(メールでの投稿)の答え

『すみません、秋葉原はどちらですか?』

Kのコメント

『あつ、私も行くんで一緒にどうですか?』

筋肉革命さんの答え

『あつ!やせいのちきゅうじんがあらわれた!』

Kのコメント

『地球人の口撃「どこから来たの!?ミステリーサークルって本当に宇宙船が着地した跡なの!?ナスカの地上絵は宇宙人との交信の跡だっつのは本当!?エジプトのピラミッド建設に携わっていたっつのはどうなの!?それから、それから……………」』

K「Kと!」

T「ツエルの!」

K&amp;T『作中ゲリララジオ!略してゲリララ!』

K「さあ始まりました“楊貴妃”!!」

T「始まりましたじゃありませんよ!!遅いじゃないですか!!」

K「ごめんなさい現実世界のほうでいろいろあったから……」

T「あと、今までサブタイトルに必ず“貧血娘”が入ってたのに、今回はないですよね?どうしたんですか?」

K「それは……読めばわかるさつ!!」

T「え!?なんでそんなにいい笑顔なんですかつ!?なんか怖いですつ!!」

K「じゃ、今回もやりますか!!」

T「聞いてますかつ!?!」

K「今回のお題はコチラ!!“見イゝたアゝなアゝ!!……何を?」

”これで考えてもらいましょう。ではツエルちゃんどうぞ!!”

T「うゝん……『み、見てません見てません!!』」

K「素で返しちゃったよ!!まあ確かにアンタならそうだろうけど!!」

T「怖いものは怖いんですよつ!!Kさんはどうですか?」

K「私の回答はコチラ……『答えたら答えたで、言ゝつたアゝなアゝ!!』とキレられる』」

T「理不尽つ!!あまりにも理不尽ですつ!!」

K「さて、そろそろお時間もなくなってきました。ゲリララでは読者のみなさまからのメッセージやお便りも受け付けております」

T「メールもしくはこの感想欄にどうぞ!!」

K「メールアドレスは、kakkey-comepksp.jpです。を@に変えてくださいね」

T「たくさんのメッセージ待ってます!!」

K「もちろん今日のお題の答えも待ってます!!リクエストのオリキヤラは、ツエルちゃん・マインハルト氏・Mr.パーティ・アンスさんに加え、作者KでもOKです!!」

K&amp;T『それでは第25話、どうぞ!!』



## 第25話 恐るべし中將の力

マインハルトがツエルを連れて去った後、ロケットマンに乗ったルフィ達が司法の塔に突っ込んできた。そこでCP9の内の人、フクロウが今回彼らに仕掛けたゲームを説明する。言い終わると、すぐに去ってしまった。

そして、ルフィ達は自分達のそれぞれが成すべき事を確認する。

「“ルッチ”とか言う奴があのだとすると……ルフィ。お前が先に行ってハトの男をブツ飛ばせ。ルフィを除いて俺たちは6人、ここにいらしい5人のCP9からロビンちゃんの鍵を手に入れたツエルちゃんとあのいけ好かねエ男を探し、ツエルちゃんを取り返す。そして、ルフィを追う!!」

「ロビン君とツエル君が門をくぐれば全てが終わる。何もかも時間との勝負だな」

「負けは時間のロス……全員死んでも勝て!!」

『おっ!!』

そう言っただけで全員階段に向かって駆け出すが、

「そもいかなんだなコレが」

「……!!待て!!止まれ!!」

ズウウウウン!!と大きな音と共に何かが落ちてきた。衝撃に石の床が割れ、煙が舞う。煙が晴れてくると、落ちてきたのが何かわかった。

「お前は……さっきのヤツ!!」

「マインハルトが上の階から飛び降り、武器を地面に叩きつけたのだ。」

「やあ麦わらの一味諸君……また会ったね」

「テメエ、ツエルちゃんはどうしたア!？」

「くふふふ、ツエル殿は安全な場所に保護しておいた。君達に言わなくてはいけないことがある」

「俺たちは急いでるんだ!!そこをどけエ!!」

ルフィが腕を伸ばして攻撃してくる。だが、マインハルトは武器から手を放してそれを両手で受け止める。だが、威力が想像以上に高かったのか、少し押されてしまう。

「な……!？」

「ルフィの攻撃が止められた？」

「ふむ……素晴らしい。重み、速さ、威力ともに高評価だ……だが、焦ってはいけない」

そう言っつてルフィの手を放した。

「君達に大事な話がある。長くはならないから聞いてくれ」

「じゃあ早く言え!!」

「今回私はツエル殿に2つの選択肢を与えた。1つ目は、私が君達の相手をしない代わりにツエル殿を海軍本部に連れて行くこと。2つ目は君達が、ニコ・ロビンを救うことが出来たらツエル殿が君達について行くことを許可するというものだ」

「え?じゃあツエルは?」

「あの方は君達を信頼して、2つ目を選んだ」

ツエルが自分達といることを望んでいるとわかり、ほっと一息つ



「私はガチャガチャの実を食べた構築人間。複数の無生物に力を込めることで、それらを私の意志で自由に組み替えることが出来ます……まあ、物体の形を変えられないので使い勝手が悪いのですがね」  
そう言っって苦笑いを浮かべる。だが、ルフィ達は首をかしげているた。

「つまり……どういうことだ？」

「百聞は一見にしかず……戦いながら、私の能力と武器の性能をお見せしましょう」

そう言っつと、ルフィ達に手招きをする。自分達に置かれている状況を思い出すと、彼らはマインハルトに向っつていった。

「ではまず、タイプアルファから……」

そう言っつと、肩に担いだ状態で改剣を両手持ちにし、振りかぶっつて地面にぶっつける。すると、地面が割れたかと思っつたらそこから一気に衝撃波がルフィ達めがけて放出された。予想外の攻撃に、一同は吹っ飛ばされる。

「ぐあアー!!」

「な、なんだ……コレは？」

「空島の、インパクトリアル衝撃貝みてエだ……」

彼らとマインハルトの間には一気に距離が開いた。マインハルトは不適に笑っつ。

「くふふふ……なかなか味わえない痛みでしょう？君達はツェル殿

の戦闘を見たことあるかな？」

「ああ……少しだけ」

「あの方が使う衝撃波と同じものですよ。私達の祖国ワルキア小国に伝わる力だね。厳しい修行を積んだ一部の人間にしか扱えない。私達はそれを、テオリア観想と呼びます。より強く、より鋭く想い昇華させた力は全てを破壊する」

「そっか……だからツェルはエネルギーに攻撃できたのね」

ルフィ達は立ち上がり、それぞれ再び構えた。

「お前が強いのはわかった……だけど、どけエ!!」

今度はルフィが1人で突っ込んだ。

「では、今度は戦法を変えましょう」

そう言うと、マインハルトはルフィが突っ込んで来るまで武器を振るい始める。

「お、オイ……あの剣」

「ああ、ようやくアイツの言っていた意味がわかったぜ」

マインハルトが改剣を振るう度に、その形が変わっていく。刀身がスライドし、折れ、中から何かが飛び出て、新しい形になっていく。不恰好な大剣は、巨大なメイスのようになった。

コンスト五タト 改剣タイプ ベータ 【戦棍ヒストル〜ガブリエル〜】

「ゴムゴムのオヒストル〜銃”!!!」

「甘い!!!」

ルフィの攻撃を避けると、そのままルフィの顔めがけてメイスの先を叩きつける。ルフィは仲間達の所まで吹っ飛ばされた。

「いってエエエエエエー!!」

「いてエ？お前には打撃が聞かないハズじゃあ……」

「言ったでしょう？<sup>テオリリア</sup>観想は全てを破壊する力。これに対抗するには同じ<sup>テオリリア</sup>観想しかありません」

そうだった。と彼らはさっきの説明を思い出した。

「って言うか、なんなんだよその武器は!!」

「コレは私の能力を使い、ツエル殿 いや、ユラ様の考案の下に現実となった夢の武器です。この武器は私にしか使えない世界でただ1つの武器です。基本形態のタイプ 【大剣】ミカエル】  
から始まり、<sup>ガンマ</sup> . . . <sup>デルタ</sup> . . . <sup>イプシロン</sup> . . . <sup>ゼータ</sup> . . . <sup>イータ</sup> まで様々な武器に変形する7  
段変形の武器です」

それを聞いた時、ルフィ、そげキング、チョッパーの眼が光った。

『7段変形オモシロ武器〜!!』

「くふふふふ、どうだ？羨ましいでしょう!？」

「羨ましいぞコノヤロー!!」

「もっとやれー!!」

「よしなさいアンタ達!!」

ナミの鉄拳が、3人に炸裂した。

気を取り直してサンジがメインハルトを指差す。

「だが!!それが俺たちに勝っている理由にはならねエ!!」

「……ええ、そうですね。コレは私の武器ではありません……で

すが、コレが私に力を与える!!」

また、マインハルトは武器を変化させた。今度はさっきとは真逆の方向に形が変化していく。改剣は、大剣の形に戻った。

「集団を相手にするには、やはりコレがいい」

「マズイ!! また来るぞ!!」

再び衝撃波を打とうと大剣を振りかぶる。ルフィ達は打たせまいと攻撃を仕掛けに行くが……距離が開いていて間に合わない。

「くっ……全員避ける!!」

「無駄だ!!」エンジェルズアクトム “天使の靈魂”!!」

大剣が地面に叩きつけられる。ルフィ達は迫る衝撃に備えて防御体制をとるが……一向に衝撃が来ない。おかしいと思い、マインハルトの方を窺うが煙が立ち込めていてよく見えない。

やがて煙が晴れてくるとそこには

「ええ、全くその通り……対抗するには同じ力を使うしかありませんわ」

……1人の女性が立ってマインハルトに左の手のひらを向けていた。

## 第25話 恐るべし中将の力（後書き）

### 《次回予告》

K「はい！ー！と言うわけで、サブタイトルに“貧血娘”が入ってなのは、ツエルちゃんが出ないからでした」

T「楽しそうですねっ！ー！」

K「楽しいもん」

T「ううっ……私の出番が………」

K「まあ、ドンマイ？」

T「なんで疑問形ですかっ！？　　ってそう言えば、いつもの次回予告とは違いますね。どうしました？」

K「……次回予告にはいつも違う人間の台詞を7つ使ってたんだけど………」

T「だけど？」

K「台詞の数が圧倒的に足りない為、急遽こうなりました」

T「ダメダメですね」

K「今後同じような事態になった時のために、他に何らかの企画を考えておくのでお楽しみに！ー！」

T「それではまたお会いしましょう！ー！」

K & amp ; T 『次回 挫け！ー！中将の力』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0993q/>

---

ONE PIECE ~ 陽気な海賊達と貧血娘 ~

2011年4月7日23時32分発行